

多文化共学短期 [受入] 留学プログラム

2024 年度実施報告書

アジア研究教育ユニット (KUASU)

国際高等教育院 (ILAS)

目次

はじめに	iii
1 多文化共学短期留学プログラム	1
2 実施体制	2
2.1 京都大学側	2
2.4 参加学生リスト	8
3. プログラムの日程	13
3.1 プログラム日程一覧（海外学生向け）	13
3.2 プログラム日程一覧（本学学生向け）	14
3.3 プログラム日程詳細	15
3.4 アカデミックレクチャー担当教員一覧	23
4. 成績評価	24
4.1 成績評価の概要	24
4.2 参考資料	25
5. プログラムの概要	28
5.1 実施方法	28
5.2.1.カリキュラムの内容	28
5.2.2 アカデミックレクチャー	29
5.2.3 日本語教育	30
5.2.4 課内の特別活動	32
5.2.5 課外の活動	34
6. 展望	35
7. 資料集	36
8. 京都サマープログラム 2024(ILAS プログラム)	67
8.3.参加学生報告	73
9. 京都サマープログラム 2024(KUASU プログラム)	129
9.2 KUASU プログラムの特徴	131
9.3. 共同発表	132

9.4.参加学生報告.....	134
10. 京都大学受講生 参加報告.....	151

はじめに

2024 年夏、京都大学アジア研究教育ユニットおよび国際高等教育院の主導のもと、アセアン、東アジアに加え欧米諸大学からの学生の受け入れをおこなう「京都サマープログラム 2024」が実施されました。本報告書では、同プログラムの実施内容や成果についてまとめています。



アセアン諸大学の学生受け入れプログラムは 11 回目、東アジア諸大学の受け入れプログラムは 13 回目を迎えました。コロナ禍の長期化を経て、私たちは対面での交流の重要性を再確認するとともに、オンライン開催の利点を最大限に活用する方法も模索しました。その結果として、これまで以上に多様な地域からの参加者を受け入れることが可能となりました。

今年度は、昨年度の参加大学に加え、イギリスのキングス・カレッジ・ロンドン、ニューキャッスル大学、ブリストル大学、ウォーリック大学、さらにオーストラリアのチャールズ・ダーウィン大学、オランダのエラスムス・アムステルダム大学からも新たに参加がありました。KUASU プログラムにはベトナム 5 名、タイ 5 名、中国 1 名、香港 1 名、台湾 3 名、アメリカ 1 名の計 16 名が、ILAS プログラムには中国 6 名、香港 6 名、台湾 3 名、韓国 5 名、ドイツ 3 名、ルクセンブルク 1 名、スペイン 1 名、イギリス 3 名、オランダ 1 名、アメリカ 3 名、オーストラリア 1 名、インド 1 名の計 34 名が参加しました。合計すると、10 以上の国と地域からおおよそ 50 名の参加者が集まりました。このように多様な背景を持つ学生が一堂に会する短期プログラムを実現できたことを大変誇りに思います。

参加学生は、同世代の学生と交流する中で、自分とは異なる考え方や価値観に触れ、大いに学び、刺激を受けたことでしょう。混沌とする世界情勢の中、本プログラムの参加者が、将来、国際社会の調和と平和を担うリーダーとして活躍することを期待しています。

このプログラムを成功に導くために尽力いただいた先生方や、参加者間の交流を支えた京都大学の学生リーダーの皆様に、深く感謝申し上げます。また、国際高等教育院や連携諸機関の先生方、短期交流学生への講義や日本語授業を担当して下さった講師の方々、幅広い内容の授業を提供して下さった諸先生方に心より感謝いたします。さらに、国際・共通教育推進部留学生支援課日本語教育掛やアジア研究教育ユニットの事務担当者の皆様がプログラムの運営を支える重要な役割を担って下さったことに、改めてお礼申し上げます。

2025 年 3 月
京都大学アジア研究教育ユニット
ユニット長 安里 和晃

1 多文化共学短期留学プログラム

1.1 概要

多文化共学短期留学プログラムは、京都大学アジア研究教育ユニット（以下、KUASU）¹と国際高等教育院（以下、ILAS）²が主体となって展開しているプログラムである。今年度より、ILAS プログラムは、昨年度までの日本語・日本文化教育センターに代わって、国際高等教育院附属国際学術言語教育センターに設置された交流教育部門が担当することになった。東アジア、東南アジア諸国連合および欧米各国におけるトップクラスの諸大学と京都大学との間で短期学生派遣／受入を引き続き実施している。本報告書は、そのうちの受入プログラムについて報告するものである。

多文化共学短期[受入]留学プログラムは、日本語を主たる教授言語とする KUASU プログラムと英語を主たる教授言語とする ILAS プログラムという2つのサブプログラムからなる。2016 年まではそれぞれが独立性を保ちながら運営してきたが、2016 年以降、講義や日本語教育などを共同で実施し、徐々に連携を深め、双方に有益なプログラムを発展させてきた。両プログラムは共に、海外の学生と本学学生の共学を軸としたプログラムである。参加学生は、本学の学風及び先端研究に触れ、日本の文化、社会、科学、環境問題などを、共に学ぶ。そして、日本文化、日本社会を「外」の視点から捉えなおすことによって、アジアおよび世界各国と日本とのあいだの相互理解の促進と、互いに共通する課題の発見・解決を目指す力を身につける³。本プログラムへの参加を通じて本学学生は、更なる国際的活動への、そして海外の学生は将来にわたる本学ひいては日本との関係への礎を築くことを目的としている。

今年度（令和 6 年度）は、昨年度から引き続き対面でプログラムを実施した。昨年度は、新型コロナウイルスパンデミック以降、4 年ぶりの対面開催であり、危機管理に不安の残る中で開催に踏み切った感があったが、今年度はより万全の危機管理体制を整え、より充実した形で対面開催をめざした。その成果は本報告書後半の「参加学生報告」から十二分に伺えるものと思う。

本年度は、以下の表 1 に挙げた対象国／地域からの短期交流学生の受入をおこなった。

表 1 本報告書で扱う短期受入プログラム

形態	プログラム名称 (実施期間)	対象の国／地域
受入	京都サマープログラム 2024 (2024 年 7 月 25 日 ～8 月 10 日)	ILAS プログラム： 中国、香港、韓国、台湾、オーストリア、ドイツ、アメリカ KUASU プログラム（主としてアセアン）： ベトナム、インドネシア、タイ、アメリカ

¹ KUASU (Kyoto University Asian Studies Unit) は、平成 24 年度から開始された文部科学省による大学の世界展開力強化事業のプロジェクト（『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成）を推進する母体となってきた。KUASU を構成するのは、文学、経済学、農学、教育学、アジア・アフリカ地域研究の各研究科と、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター、東南アジア地域研究研究所、人文科学研究所、経営管理研究部である。

² ILAS : Institute for Liberal Arts and Sciences

³ 注 1 の世界展開力強化事業のプロジェクトにおいて、当プログラムは SEND プログラム（Student Exchange – Nippon Discovery Program）と呼ばれていた。

2 実施体制

2.1 京都大学側

実施責任者		
京都大学理事／副学長	國府 寛司	(KOKUBU Hiroshi)
▶ ILAS 実施責任者		
国際高等教育院・院長／教授	大嶋 正裕	(OHSHIMA Masahiro)
▶ KUASU 実施責任者		
アジア研究教育ユニット ・ユニット長	安里 和晃	(ASATO Wako)
担当教職員		
([1]主として ILAS 担当,[2]主として KUASU 担当)		
国際高等教育院・教授	河合 淳子	(KAWAI Junko) ^{[1][2]}
国際高等教育院・准教授	韓 立友	(HAN Liyou) ^[1]
国際高等教育院・特定准教授	若松 文貴	(WAKAMATSU Fumitaka) ^{[1][2]}
国際・共通教育推進部 留学生支援課	大島 美花	(OSHIMA Mika) ^[1]
アジア研究教育ユニット	野澤 結衣	(NOZAWA Yui) ^[2]
国際高等教育院 附属国際学術 言語教育センター	溝口 有美	(MIZOGUCHI Yumi) ^{[1] [2]}
国際・共通教育推進部 留学生支援課	北川 真弓	(KITAGAWA Mayumi) ^[1]

学内協力組織		
国際戦略本部		
欧州拠点		
北米拠点		
ASEAN 拠点		
学術情報メディアセンター		
学術講義担当（学内・学外）		
京都大学 大学院教育学研究科 教授	佐野 真由子	SANO Mayuko
京都大学 大学院総合生存学館 教授	関山 健	SEKIYAMA Takashi
京都大学 国際高等教育院 附属日本語・日本文化教育センター 准教授	家本 太郎	IEMOTO Taro

京都大学 国際高等教育院 附属日本語・日本文化教育センター 教授	河合 淳子	KAWAI Junko
京都大学 農学研究科 教授	近藤 直	KONDO Naoshi
京都大学 成長戦略本部 特定教授	木谷 哲夫	KITANI Tetsuo
京都大学 国際高等教育院 附属国際学術言語教育センター 特定准教授	若松 文貴	WAKAMATSU Fumitaka
京都大学 高等研究院 野生動物研究センター (兼任) 准教授	山本 真也	YAMAMOTO Shinya
京都大学 副学長 学術研究展開 センター長 名誉教授 特定教授	石川 冬木	ISHIKAWA Fuyuki
京都大学 国際高等教育院 准教授	湯川 志貴子	YUKAWA Shikiko
京都大学 人と社会の未来研究院 教授(上廣倫理財団寄附研究部門 長) / 京都大学 人と社会の未来研究院 上廣倫理財団寄附研究部門 特定准教授	熊谷 誠慈 / 亀山 隆彦	KUMAGAI Seiji / KAMEYAMA Takahiko
京都産業大学 現代社会学部・教授 京都大学・名誉教授 京都大学アジア研究教育ユニット・ 初代ユニット長	落合 恵美子	OCHIAI Emiko
日本語教育担当		
日本語講師	中澤 まゆみ	NAKAZAWA Mayumi
国際高等教育院・非常勤講師	高橋 旬子	TAKAHASHI Junko
国際高等教育院・非常勤講師	下橋 美和	SHIMOHASHI Miwa
立命館大学・授業担当講師	柏木 美和子	KASHIWAGI Miwako
国際高等教育院・非常勤講師	浦木 貴和	URAKI Norikazu
神戸学院大学・講師	白方 佳果	SHIRAKATA Yoshika
大学院/研究室訪問対応		
文学研究科	ビョーン＝オーレ	Björn-Ole KAMM

国際連携文化越境専攻・講師	カム	
医学研究科附属 がん免疫総合研究 センター(CCII)高次統御システム間 制御部門 特定講師	但馬 正樹	TAJIMA Masaki
人間・環境学研究科・教授	齋木 潤	SAIKI Jun
人間・環境学研究科・ 講師	パッラヴィ バッ テ	Pallavi BHATTE

2.2 派遣元大学側

ILAS プログラム		
北京大学 Division for Education Abroad Program Office of International Relations Peking University	Chuqiao SHI	
香港中文大學（全学） Assistant Director Office of Academic Links The Chinese University of Hong Kong	Myra LAU	
香港中文大學（歴史学部） Senior lecturer, History Department The Chinese University of Hong Kong	SIU Kam-wah, Joseph	
延世大学校 Associate Professor Underwood International College	Astrid LAC	
延世大学校 Dean Underwood International College	Helen LEE	
国立台湾大学 Manager for Global Student Affairs (Outbound) Office of International Affairs National Taiwan University	David SHEN	
欧州拠点 Deputy Director Kyoto University European Center	神野 智世子	Chiyoko KANNO
バルセロナ大学 Faculty of Economics and Business Coordinator for the relations with East Asia University of Barcelona	Angels PELEGRIN	
バルセロナ大学 Professor University of Barcelona	塚原 信行	Nobuyuki TSUKAHARA
北米拠点 Coordinator Kyoto University North American Center	Danielle REED	

スタンフォード日本センター (SJC)	Mike Hugh	
Kyoto Consortium for Japanese Studies Assistant Director	Fusako Shore	
KUASU プログラム		
ベトナム国家大学 ハノイ校外国語大学 日本語文化学部・講師	ルオン・チャム・アイ ン	LUONG Trâm Anh
ベトナム国家大学 ハノイ校人文社会科学大学 東洋研究学部・講師	グエン・フオン・トゥイ	NGUYEN Phuong Thuy
チュラーロンコーン大学 文学部・准教授	チョムナード・シティ サーン	Chomnard Setisarn ผศ.ดร.ชนนาค สัตติสาร
インドネシア大学 人文科学部・講師	アリエスティアニ・ペ ルウィタサリ	Ariestyani Perwitasari

(灰地は今年度学生派遣なし)

2.3 プログラム費用

本節では、京都サマープログラム 2024 における費用補助状況と学生参加状況の概要について述べる。以下の二項目によって短期交流学生の修学が費用面から支援された。

①全学事業実施経費（留学生獲得支援事業）（京都大学）

②機能強化経費「世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成－京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム－」による基幹経費（京都大学）

表 3 では、基本情報と、費目別の費用補助該当者数、各項目の合計人数を、上記 ①～②による費用補助の該当是非と合わせて示す。

表 3 京都サマープログラム 2024 の経済支援概要

	ILAS プログラム	KUASU プログラム	計
実施期間	2024 年 7 月 25 日～ 8 月 9 日		50 名
短期交流学生	34 名	16 名	50 名
短期交流学生 授業料・学内研修費	① 34 名	① 16 名	50 名
短期交流学生学外研修費	① 34 名	① 16 名	50 名
渡航費補助	なし	なし	0 名
宿泊費補助	① 34 名	① 16 名	50 名
本学受講生 授業料・学内研修費	① 40 名		40 名
本学学生リーダー雇用	① 8 名	① 7 名	15 名
出席管理 OA 雇用	① 4 名		4 名

2.4 参加学生リスト

ILAS

KSP No.	Nickname	University	Department	Grade
101	Radon	Peking University	Chemistry	B2
102	Alex		College of Chemistry and Molecular Engineering/Chemistry	B3
103	KvQ		Economics	B1
104	Patrick		school of electronic engineer and computer science	B1
105	Minami		Economy	B2
106	Jasmine	Chinese University of Hong Kong	Medicine (MBChB)	B2
107	Darian		Laws	B2
108	Pauline		History	B3
109	Jimmy		History	B4
110	Jenny	Yonsei University	History	B2
111	Yejin		Underwood International College / Quantitative Risk Management	B2
112	Yunha		Economics	B2
113	Watermelon		Asian Studies	B2
114	Charx		Humanities, Arts, and Social Sciences	B3
115	Jacqueline		Comparative Literature and Culture	B3
116	Jennifer	National Taiwan University	Accounting	B1
117	Elena		Occupational Therapy	B2
118	Randy		Dept. of Medicine	B1
119	Moritz	Heidelberg University	Biosciences	B3
120	Renni		Medical Faculty / Medicine	Other 4th
121	Tim	University of Vienna	Economics (Department of Economics)	B2
122	Elza		Business Management	M3
123	Nano	Universitat de Barcelona	Master's Degree in Creation and Management of	M1

			Innovative Technology-based Companies	
125	Allen		Economics	B4
126	Danny Inoue	University of California, San Diego	Data Science	B2
127	Tyler		International Business	B4
128	MidnightFerret	University of Florida	Geology	B3
201	Michelle	King's College London (KCL)	Chemistry	B1
202	Amelia	Newcastle University	College of Chemistry and Molecular Engineering/Chemistry	B1
203	Emily	University of Bristol	Economics	B3
204	Ironman	University of Warwick	school of electronic engineer and computer science	B2
208	Joe	University of Hong Kong	Economy	B4
209	Amadeus	Charles Darwin University	Medicine (MBChB)	B3
210	Kai	Erasmus University Rotterdam	Laws	B2

KUASU

KSP No.	Nickname	University	Department	Grade
301	Trish	Vietnam National University, Hanoi	Japanese Language	M1
302	Mia		Faculty of Japanese Linguistics and Culture	B3
303	Moon		Faculty of Japanese Linguistic & Culture	B3
304	Aki		Faculty of Japanese Language and Culture	B3
305	あめ		Faculty of Japanese Language and Culture	B3
306	Boston	Chulalongkorn University	Japanese Major	B1
307	Neena		Bachelor of Arts	B1
308	Phud		Faculty of arts	B1
309	Namtarn		Japanese	B1
310	Pakkadkaew		Faculty of Arts	B1
311	Winston	University of California, San Diego	Japanese Studies	B3

312	Allen	National Taiwan University	Medicine	B4
313	Jimmy		Department of Computer Science & Information Engineering	B2
314	Ian		Department of Japanese Language and Literature	B1
315	Alice	Chinese University of Hong Kong	Chinese Language and Literature	B3
316	Tau	Heidelberg University	East Asian Art History	B2

Kyoto University Students

KSP No.	Nickname	Department	Grade
401	Yuki	農学部	B1
402	Lei	法学部	B1
403	Tamaki	工学部	B1
404	Mio	法学部	B1
405	Taka	理学部	B1
406	Dora	理学部	B1
407	Haru	農学部	B1
408	Meo	教育学部	B2
409	Rina	薬学部	B1
410	Yuki	文学部	B1
411	Nayuka	工学部	B1
412	Tate	総合人間学部	B2
413	Ao	工学部	B2
414	Saho	法学部	B1
415	Bicky	文学部	B2
416	Sakura	経済学部	B1
417	Runa	経済学部	B2
418	Shoma	総合人間学部	B2
419	Macky	文学部	B1
420	Sakura	工学部	B2
421	Koharu	農学部	B1
422	ATSU	経済学部	B1
423	Atushi	工学部	B2
424	KEITO	工学部	B2
425	Erin	文学部	B1
426	Sena	法学部	B1
427	Masa	工学部	B2
428	Kotona	法学部	B1
429	Pond	総合人間学部	B1
430	RUKA	農学部	B1
431	Juri	農学部	B1
432	Nana	経済学部	B2

433	Ayane	法学部	B2
434	Shou	法学部	B1
435	Yuji	総合人間学部	B1
436	Koki	総合人間学部	B1
437	Hitomi	文学部	B1
438	Shiho	文学部	B2
439	Liz	総合人間学部	B1
440	Z	経済学部	B1

Program student Leaders

Yurika	法学部	B2
Chihiro	法学部	B2
Mariko	法学部	B2
Mayu	農学部	B2
Aiko	文学部	B2
Shuta	工学部地球工学科	B2
Shohei	工学部理工化学科	B3
Kaho	総合人間学部・総合人間学科	B2
Michi	文学部	B2
Hiro	理学部	B4
Natsuko	教育学部教育科学科	B2
Ayumi	経済学部	B2
Rina	工学部	B2
Shota	公共政策教育科	M1
Satoshi	文学部	B3

3.1 プログラム日程一覧（海外学生向け）

– 13 –

3.2 プログラム日程一覧（本学学生向け）

Kyoto Summer Program 2024 as of July 04											
7/1		7/2		7/3		7/4		7/5		7/6	
18:00	19:00	18:00	19:00	18:00	19:00	18:00	19:00	18:00	19:00	18:00	19:00
22:00	23:00	22:00	23:00	22:00	23:00	22:00	23:00	22:00	23:00	22:00	23:00
7/1											
7/2											
7/3											
7/4											
7/5											
7/6											
7/7											
7/8											
7/9											
7/10											
7/11											
7/12											
7/13											
7/14											
7/15											
7/16											
7/17											
7/18											
7/19											
7/20											
7/21											
7/22											
7/23											
7/24											
7/25											
7/26											
7/27											
7/28											
7/29											
7/30											
7/31											
8/1											
8/2											
8/3											
8/4											
8/5											
8/6											
8/7											
8/8											
8/9											
8/10											
8/11											
8/12											
8/13											
8/14											
8/15											
8/16											
8/17											
8/18											
8/19											
8/20											
8/21											
8/22											
8/23											
8/24											
8/25											
8/26											
8/27											
8/28											
8/29											
8/30											
8/31											
9/1											
9/2											
9/3											
9/4											
9/5											
9/6											
9/7											
9/8											
9/9											
9/10											
9/11											
9/12											
9/13											
9/14											
9/15											
9/16											
9/17											
9/18											
9/19											
9/20											
9/21											
9/22											
9/23											
9/24											
9/25											
9/26											
9/27											
9/28											
9/29											
9/30											
10/1											
10/2											
10/3											
10/4											
10/5											
10/6											
10/7											
10/8											
10/9											
10/10											
10/11											
10/12											
10/13											
10/14											
10/15											
10/16											
10/17											
10/18											
10/19											
10/20											
10/21											
10/22											
10/23											
10/24											
10/25											
10/26											
10/27											
10/28											
10/29											
10/30											
10/31											
11/1											
11/2											
11/3											
11/4											
11/5											
11/6											
11/7											
11/8											
11/9											
11/10											
11/11											
11/12											
11/13											
11/14											
11/15											
11/16											
11/17											
11/18											
11/19											
11/20											
11/21											
11/22											
11/23											
11/24											
11/25											
11/26											
11/27											
11/28											
11/29											
11/30											
12/1											
12/2											
12/3											
12/4											
12/5											
12/6											
12/7											
12/8											
12/9											
12/10											
12/11											
12/12											
12/13											
12/14											
12/15											
12/16											
12/17											
12/18											
12/19											
12/20											
12/21											
12/22											
12/23											
12/24											
12/25											
12/26											
12/27											
12/28											
12/29											
12/30											
12/31											
1/1											
1/2											
1/3											
1/4											
1/5											
1/6											
1/7											
1/8											
1/9											
1/10											
1/11											
1/12											
1/13											
1/14											
1/15											
1/16											
1/17											
1/18											
1/19											
1/20											
1/21											
1/22											
1/23											
1/24											
1/25											
1/26											
1/27											
1/28											
1/29											
1/30											
1/31											
2/1											
2/2											
2/3											
2/4											
2/5											
2/6											
2/7											
2/8											
2/9											
2/10											
2/11											
2/12											
2/13											
2/14											
2/15											
2/16											
2/17											
2/18											
2/19											
2/20											
2/21											
2/22											
2/23											
2/24											
2/25											
2/26											
2/27											
2/28											
2/29											
2/30											
3/1											
3/2											
3/3											
3/4											
3/5											
3/6											
3/7											
3/8											
3/9											
3/10											
3/11											
3/12											
3/13											
3/14											
3/15											
3/16											
3/17											
3/18											
3/19											
3/20											
3/21											
3/22											
3/23											
3/24											
3/25											
3/26											
3/27											
3/28											
3/29											
3/30											
3/31											
4/1											
4/2											
4/3											
4/4											
4/5											
4/6											
4/7											
4/8											
4/9											
4/10											
4/11											
4/12											
4/13											
4/14											
4/15											
4/16											
4/17											
4/18											
4/19											
4/20											
4/21											
4/22											
4/23											
4/24											
4/25											
4/26											
4/27											
4/28											
4/29											
4/30											
5/1											
5/2											
5/3											
5/4											
5/5											
5/6											
5/7											
5/8											
5/9											
5/10											
5/11											
5/12											
5/13											
5/14											
5/15											
5/16											
5/17											
5/18											
5/19											
5/20											
5/21											
5/22											
5/23											
5/24											
5/25											
5/26											
5/27											
5/28											
5/29											
5/30											
5/31											
6/1											
6/2											
6/3											
6/4											
6/5											
6/6											
6/7											
6/8											
6/9											
6/10											
6/11											
6/12											
6/13											
6/14											
6/15											
6/16											
6/17											
6/18											
6/19											
6/20											
6/21											
6/22											
6/23											
6/24											
6/25											
6/26											
6/27											
6/28											
6/29											
6/30											
7/1											
7/2											
7/3											
7/4											
7/5											
7/6											
7/7											
7/8											
7/9											
7/10											
7/11											
7/12											
7/13											
7/14											
7/15											
7/16											
7/17											
7/18											
7/19											
7/20											
7/21											
7/22											
7/23											
7/24											
7/25											
7/26											
7/27											
7/28											
7/29											
7/30											
7/31											
8/1											
8/2											
8/3											
8/4											
8/5											
8/6											
8/7											
8/8											
8/9											
8/10											
8/11											
8/12											
8/13											
8/14											
8/15											
8/16											
8/17											
8/18											
8/19											
8/20											
8/21											
8/22											
8/23											
8/24											
8/25											
8/26											
8/27											
8/28											
8/29											
8/30											
8/31											
9/1											
9/2											
9/3											
9/4											
9/5											
9/6											
9/7											
9/8											
9/9											
9/10											
9/11											
9/12											
9/13											
9/14											
9/15											
9/16											
9/17											
9/18											
9/19											
9/20											
9/21											
9/22											
9/23											
9/24											
9/25											
9/26											
9/27											
9/28											
9/29											
9/30											
10/1											
10/2											
10/3											
10/4											
10/5											
10/6											
10/7											
10/8											
10/9											
10/10											
10/11											
10/12											
10/13											
10/14											
10/15											
10/16											
10/17											
10/18											
10/19											
10/20											
10/21											
10/22											
10/23											
10/24											
10/25											
10/26											
10/27											
10/28											
10/29											
10/30											
10/31											
11/1											
11/2											
11/3											
11/4											
11/5											
11/6											
11/7											
11/8											
11/9											
11/10											
11/11											
11/12											
11/13											
11/14											
11/15											
11/16											
11/17											
11/18											
11/19											
11/20											
11/21											
11/22											
11/23											
11/24											
11/25											
11/26											
11/27											
11/28											
11/29											
11/30											
12/1											
12/2											
12/3											
12/4											
12/5											
12/6											
12/7											
12/8											
12/9											
12/10											
12/11											
12/12											
12/13											
12/14											
12/15											
12/16											
12/17											
12/18											
12/19											
12/20											
12/21											
12/22											
12/23											
12/24											
12/25											
12/26											
12/27											
12/28											
12/29											
12/30											
12/31											
1/1											
1/2											
1/3											
1/4											
1/5											
1/6											
1/7											
1/8											
1/9											
1/10											
1/11											
1/12											
1/13											
1/14											
1/15											
1/16											
1/17											
1/18											
1/19											
1/20											
1/21											
1/22											
1/23											
1/24											
1/25											
1/26											
1/27											
1/28											
1/29											
1/30											
1/31											
2/1											
2/2											
2/3											
2/4											
2/5											
2/6											
2/7											
2/8											
2/9											
2/10											
2/11											
2/12											
2/13											
2/14											
2/15											
2/16											
2/17											
2/18											
2/19											
2/20											
2/21											
2/22											
2/23											
2/24											
2/25											
2/26											
2/27											
2/28											
2/29											
2/30											
3/1											
3/2											
3/3											
3/4											
3/5											
3/6											
3/7											
3/8											
3/9											
3/10											
3/11											
3/12											
3/13											
3/14											
3/15											
3/16											
3/17											
3/18											
3/19											
3/20											
3/21											
3/22											
3/23											
3/24											
3/25											
3/26											
3/27											
3/28											
3/29											
3/30											
3/31											
4/1											
4/2											
4/3											
4/4											
4/5											
4/6											
4/7											
4/8											
4/9											
4/10											
4/11											
4/12											
4/13											
4/14											
4/15											
4/16											
4/17											
4/18											
4/19											
4/20											
4/21											
4/22											
4/23											
4/24											
4/25											
4/26											
4/27											
4/28											
4/29											
4/30											
5/1											
5/2											
5/3											
5/4											
5/5											
5/6											
5/7											
5/8											
5/9											
5/10											
5/11											
5/12											
5/13											
5/14											
5/15											
5/16											
5/17											
5/18											
5/19											
5/20											
5/21											
5/22											
5/23											
5/24											
5/25											
5/26											
5/27											
5/28											
5/29											
5/30											
5/31											
6/1											
6/2											
6/3											
6/4											
6/5											

3.3 プログラム日程詳細

水色部分は ILAS プログラムと KUASU の合同イベント

7 月 25 日(木) Kick-off Rally & Special Lecture					
時 間		カリキュラム / イベント		教職員 / 詳細	場所
18:00-20:00		Special Lecture by Prof. Tadashi TOKIEDA, Stanford University		【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特 定准教授	職員会館 かもがわ
7 月 26 日(金) Opening Ceremony& Orientation/ Campus Tour/ Optional: Guidance					
時 間		カリキュラム / イベント		教職員 / 詳細	場所
9:15-10:15		Opening Ceremony & Orientation		【国際高等教育院】 大嶋正裕 (OHSHIMA Masahiro) 院長 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特 定准教授	KUINEP Hall
10:30-11:30		Campus Tour		アテンド：リーダー	
12:30-14:00		Optional: Guidance for Daily Life by KU Students		リーダー 希望者のみ (ILAS) (KUASU)	KUINEP Hall
7 月 27 日(土) KU Introduction I/ Japanese Language Class ① 日本語教授実習①/ Academic Lecture①/ Discussion in English① or 発表準備講座①/ Optional: Consultation for Japanese Language level					
時 間		カリキュラム / イベント		教職員 / 詳細	場所
9:15-10:15		KU Introduction I		【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特 定准教授 (ILAS) (KUASU) (本学学生)	ILAS Bldg. Room 32
10:30-12:30	Japanese Language Class① (ILAS) (KUASU) 日本語教授実習 ① (京大受講 生)	Elementary IA	柏木美和子(KASHIWAGI Miwako)講師	IS-1	
		Elementary IB	高橋旬子(TAKAHASHI Junko)講師	IS-5	
		Elementary II	中澤まゆみ(NAKAZAWA Mayumi)講師	IS-6	
		Intermediate I	下橋美和(SHIMOHASHI Miwa)講師	IS-2	
		Intermediate II	浦木貴和(URAKI Norikazu)講師	IS-4	
		Advanced	白方佳果(SHIRAKATA Yoshika)講師	IS-3	

13:30-15:30	Academic Lecture①		【大学院教育研究科】 佐野真由子(SANO Mayuko)教授 Diplomatic ceremonial in the last decade of the Tokugawa Shogunate: Japan's first step into modern diplomacy before the Meiji Restoration —Ver. 5 (幕末の外交儀礼から、日本の近代外交の幕開けを考える—その5)	ILAS Bldg. Room 32
15:45-16:45	Discussion in English① (ILAS)		グローバル化と人の移動	IS-1
	発表準備① (KUASU)			IS-2
16:55-17:55	Consultation for Japanese Language level		希望者のみ (ILAS) (KUASU)	IS-1
7月29日(月) Discussion in English② or 発表準備講座②/ Japanese Language Class ②日本語教授実習②/ 海外学生と日本語で話そう①				
時 間	カリキュラム / イベント		教職員 / 詳細	場所
9:15-10:15	Discussion in English② (ILAS)		生成 AI 導入と社会	IS-1
	発表準備② (KUASU)			IS-2
10:30-12:30	Japanese Language Class② (ILAS) (KUASU) 日本語教授実習② (京大受講生)	Elementary IA	柏木美和子 (KASHIWAGI Miwako)講師	IS-1
		Elementary IB	高橋 旬子(TAKAHASHI Junko)講師	IS-5
		Elementary II	中澤まゆみ(NAKAZAWA Mayumi)講師	IS-6
		Intermediate I	下橋美和(SHIMOHASHI Miwa)講師	IS-2
		Intermediate II	浦木貴和(URAKI Norikazu)講師	IS-4
		Advanced	白方佳果(SHIRAKATA Yoshika)講師	1 共-04
13:30-14:30	海外学生と日本語で話そう① Conversation with KU Students in Japanese ①		(ILAS)(KUASU) (京大受講生)	IS-1
7月30日(火) Fieldtrip				
時 間	カリキュラム / イベント		教職員 / 詳細	場所
One-Day Trip	Fieldtrip		近江八幡新町通り/琵琶湖博物館/ラ コリーナ	滋賀県
7月31日(水) Discussion in English③④ or 発表準備講座③④/ Japanese Language Class ③ 日本語教授実習③/ Academic Lecture②/ 海外学生と日本語で話そう②				
時 間	カリキュラム / イベント		教職員 / 詳細	場所
9:15-10:15	Discussion in English③ (ILAS)		再生可能エネルギー	IS-1

	発表準備講座③ (KUASU)			IS-2
10:30-12:30	Japanese Language Class③ (ILAS) (KUASU) 日本語教授実習③ (京大受講生)	Elementary IA	柏木美和子 (KASHIWAGI Miwako)講師	IS-1
		Elementary IB	高橋 旬子 (TAKAHASHI Junko)講師	IS-5
		Elementary II	中澤まゆみ (Nakazawa Mayumi)講師	IS-6
		Advanced	白方佳果 (SHIRAKATA Yoshika)講師	ILAS Bldg. Room24
13:30-15:30	Academic Lecture②		【大学院 総合生存学館】 関山健 (SEKIYAMA Takashi)教授 Political Economy of Japan's "Lost Decades" (日本「失われた 30 年」の政治経済学)	ILAS Bldg. Room31
15:45-16:45	Discussion in English④ (ILAS)		英語の共通言語化	IS-1
	発表準備講座④ (KUASU)			IS-5
16:55-17:55	海外学生と日本語で話そう② Conversation with KU Students in Japanese ②		(ILAS)(KUASU)(京大受講生)	IS-1,6
8 月 1 日(木) Discussion in English ⑤ or 発表準備⑤/ Japanese Language Class ④ 日本語教授実習④/ 海外学生と日本語で話そう③/ Graduate School-Lab Visit I, II, and III				
時 間	カリキュラム／イベント		教職員 ／ 詳細	場所
9:15-10:15	Discussion in English⑤ (ILAS)		地域格差	IS-1
	発表準備講座⑤(KUASU)			IS-2
10:30-12:30	Japanese Language Class④ (ILAS) (KUASU) 日本語教授実習④ (京大受講生)	Elementary IA	柏木美和子 (KASHIWAGI Miwako)講師	IS-2
		Elementary IB	高橋 旬子 (TAKAHASHI Junko)講師	IS-5
		Elementary II	中澤まゆみ (Nakazawa Mayumi)講師	IS-3
		Intermediate I	下橋美和 (SHIMOHASHI Miwa)講師	4 共 40
		Intermediate II	浦木貴和 (URAKI Norikazu)講師	4 共 41
		Advanced	白方佳果 (SHIRAKATA Yoshika)講師	ILAS Bldg. Room21
13:30-14:30	海外学生と日本語で話そう③ Conversation with KU Students in Japanese ③		(ILAS)(KUASU)(京大受講生)	IS-5

15:00-16:00	Graduate School/ Lab Visit I &II		I) Graduate School of Letters II) Center for Cancer Immunotherapy and Immunobiology (CCII)	
16:45-17:45	Graduate School Visit III		Graduate School of Human and Environmental Studies	
8月2日(金) Cultural Experience				
時 間	カリキュラム／イベント		教職員／詳細	場所
All day	Cultural Experience (ILAS) 友禅染体験 盆踊り体験 英語落語		【国際高等教育院】 韓立友 (HAN Liyou)准教授	
	Cultural Experience (KUASU) 友禅染体験 漢字博物館 茶道体験		【国際高等教育院】 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特 定准教授	
8月3日(土) Discussion in English⑥ or 発表準備講座⑥/ Japanese Language Class ⑤ 日本語教授実習⑤/ Academic Lecture③④				
時間	カリキュラム／イベント		教職員／詳細	場所
9:15-10:15	Discussion in English⑥ (ILAS)		ジェンダー問題	IS-1
	発表準備講座⑥ (KUASU)			IS-2
10:30-12:30	Japanese Language Class⑤ (ILAS) (KUASU) 日本語教授実習 ⑤（京大受講 生）	Elementary IA	柏木美和子(KASHIWAGI Miwako)講師	IS-1
		Elementary IB	高橋句子(TAKAHASHI Junko)講師	IS-5
		Elementary II	中澤まゆみ(NAKAZAWA Mayumi)講師	IS-3
		Intermediate I	下橋美和(SHIMOHASHI Miwa)講師	IS-2
		Intermediate II	浦木貴和(URAKI Norikazu)講師	IS-4
		Advanced	白方佳果(SHIRAKATA Yoshika)講師	IS-6
13:30-15:30	Academic Lecture③		【国際高等教育院】 家本太郎 (IEMOTO Taro)准教授 日本語の社会言語学的諸相 (Sociolinguistic aspects of Japanese)	ILAS Bldg. Room32
15:45-17:45	Academic Lecture④		【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 学校教育にみる日本文化の諸相 (Cultural Aspects of Education in Japan)	ILAS Bldg. Room32

8月5日(月) Discussion in English⑦ or 発表準備講座⑦/ Academic Lecture⑤⑥/ Make up Japanese Language Class ①日本語教授実習⑥				
時 間	カリキュラム／イベント		教職員／詳細	場所
9:15-10:15	Discussion in English⑦ (ILAS)		食糧問題	IS-1
	発表準備講座⑦ (KUASU)			IS-2
10:30-12:30	Academic Lecture⑤		【農学研究科】近藤直 (KONDO Naoshi)教授 Sustainable Food Production with Environmental Issues and Animal Welfare (環境・動物福祉を考慮した持続的食料生産)	ILAS Bldg. Room32
13:30-15:30	Academic Lecture⑥		【成長戦略本部】木谷哲夫 (KITANI Tetsuo)特定教授 Innovation and Entrepreneurship (イノベーションとアントレプレナーシップ)	ILAS Bldg. Room31
15:45-17:45	Makeup Japanese Language Class① (ILAS) (KUASU) 日本語教授実習⑥ (京大受講生)	Intermediate II	浦木貴和 (URAKI Norikazu)講師	IS-5
8月6日(火) KU Introduction II/Academic Lecture⑦⑧/ Make up Japanese Language Class② 日本語教授実習⑦				
時 間	カリキュラム／イベント		教職員／詳細	場所
9:15-10:15	KU Introduction II		【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特定准教授 (ILAS) (KUASU) (本学学生)	IS-5

10:30-12:30	Academic Lecture⑦		【国際高等教育院】 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka) 特定准教授 Whaling in Japan: Cultural Politics of Food and Conservation (日本の捕鯨: 食と保護を巡る文化政治学)	ILAS Bldg. Room32
13:30-15:30	Academic Lecture⑧		【高等研究院 野生動物研究センター】 山本真也 (YAMAMOTO Shinya) 准教授 Exploring "humanity" by comparative studies with animals (「ヒトとは何か」を探る動物研究)	ILAS Bldg. Room32
15:45-17:45	Makeup Japanese Language Class② (ILAS) (KUASU) 日本語教授実習⑦ (京大受講生)	Intermediate I	下橋美和 (SHIMOHASHI Miwa) 講師	IS-2
8月7日(水) Discussion in English⑧ or 発表準備講座⑧/ Academic Lecture⑨⑩⑪				
時 間	カリキュラム／イベント		教 職 員	場 所
9:15-10:15	Discussion in English⑧ (ILAS)		企業の技術革新	IS-1
	発表準備講座⑧ (KUASU)			IS-2
10:30-12:30	Academic Lecture⑨		【学術研究展開センター】 石川冬木 (ISHIKAWA Fumiya) センター長/名誉教授 Why are we destined to senescence? An approach from chromosome telomere biology (なぜ私たちの寿命は有限なのかー染色体テロメアからの考察)	ILAS Bldg. Room32

13:30-15:30	Academic Lecture⑩		【国際高等教育院】 湯川志貴子 (YUKAWA Shikiko)准教授 The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature (日本古典文学に見る日本人の美意識)	ILAS Bldg. Room32
15:45-17:45	Academic Lecture⑪		【人と社会の未来研究員】 熊谷誠磁 (KUMAGAI Seiji) 教授、 亀山隆彦 (KAMEYAMA Takahiko) 特定准教授 The Past, Present, and Future of Japanese Buddhism (日本仏教の過去、現在、未来)	ILAS Bldg. Room32
8月8日(木) Conversation with KU Students in Japanese④/ Academic Lecture⑫/ Discussion Session among Students/ Preparation for Final Presentation				
時 間	カリキュラム／イベント		教 職 員	場所
9:15-10:15	Conversation with KU Students in Japanese④		(ILAS)(KUASU)(京大受講生)	IS-1+2
10:30-12:30	Academic Lecture⑫		【京都産業大学/京都大学】 落合恵美子 (OCHIAI Emiko)教授/京都大学・名誉教授 Representations of Women in Japan in the Latter Half of the 20th Century (20世紀後半の日本における女性像の変遷)	ILAS Bldg. Room32
13:30-16:30	Discussion Session among Students	ILAS	【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授	ILAS Bldg. Room32
		KUASU	【国際高等教育院】 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特定准教授	ILAS Bldg. Room31
16:45-18:15	Preparation for Final Presentation	ILAS	【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授	IS-1~6
		KUASU	【国際高等教育院】 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特定准教授	IS-1~6

8月9日(金) Preparation for Final Presentation/ Final Presentation/Completion Ceremony/ Farewell Party				
時 間	カリキュラム／イベント		教 職 員	場所
10:00-11:30	Preparation for Final Presentation	ILAS	【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授	IS-1~6
		KUASU	【国際高等教育院】 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特定 准教授	IS-1~6
12:45-15:45	Final Presentation	ILAS	【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授	ILAS Bldg. Room32
		KUASU	【国際高等教育院】 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特定 准教授	ILAS Bldg. Room31
16:30-17:30	Completion Ceremony	【国際高等教育院】 國府寛司 (KOKUBU Hiroshi)理事 大嶋正裕 (OSHIMA Masahiro)院長 安里和晃 (ASATO Wako)ユニット長 河合淳子 (KAWAI Junko)教授 韓立友 (HAN Liyou)准教授 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特定 准教授 大島美花 (OSHIMA Mika)職員 野澤結衣 (NOZAWA Yui)職員 溝口有美 (MIZOGUCHI Yumi)職員		ILAS Bldg. Room32
18:00-20:00	Farewell Party	【国際高等教育院】 河合淳子 (KAWAI Junko)教授、 韓立友 (HAN Liyou)准教授 若松文貴 (WAKAMATSU Fumitaka)特定 准教授		IS-5+6

3.4 アカデミックレクチャー担当教員一覧

Academic Lectures 2024 as of June 11

Date	Photo	Lecturer	Affiliation	所属	氏名	Lecture title	Language
1 7/27 (Sat) [13:30-15:30]		Mayuko SANO	Professor, Graduate School of Education, Kyoto University	京都大学 大学院教育学研究科 教授	佐野 真由子	Diplomatic ceremonial in the last decade of the Tokugawa Shogunate: Japan's first step into modern diplomacy before the Meiji Restoration —Ver. 5 (幕末の外交儀礼から、日本の近代外交の 幕開けを考える—その5)	English
2 7/31 (Wed) [13:30-15:30]		Takashi SEKIYAMA	Professor, Graduate School of Advanced Integrated Studies in Human Survivability, Kyoto University	京都大学 大学院総合生存学館 教授	関山 健	Political Economy of Japan's Economic "Lost Decades" (日本経済「失われた30年」の政治経済)	English
3 8/3 (Sat) [13:30-15:30]		Taro IEMOTO	Associate Professor, Education Center for Japanese Language and Culture, Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University	京都大学 国際高等教育院 附属日本語・日本文化 教育センター 准教授	家本 太郎	日本語の社会言語学的諸相 (Sociolinguistic aspects of Japanese)	日本語 Japanese
4 8/3 (Sat) [15:45-17:45]		Junko KAWAI	Professor, Education Center for Japanese Language and Culture, Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University	京都大学 国際高等教育院 附属日本語・日本文化 教育センター 教授	河合 淳子	学校教育にみる日本文化の諸相 (Cultural Aspects of Education in Japan)	日本語 Japanese
5 8/5 (Mon) [10:30-12:30]		Naoshi KONDO	Professor, Graduate School of Agriculture, Kyoto University	京都大学 農学研究科 教授	近藤 直	Sustainable Food Production with Environmental Issues and Animal Welfare (環境・動物福祉を考慮した持続的食料生産)	English
6 8/5 (Mon) [13:30-15:30]		Tetsuo KITANI	Program-Specific Professor, Institutional Advancement and Communications, Kyoto University	京都大学 成長戦略本部 特定教授	木谷 哲夫	Innovation and Entrepreneurship (イノベーションとアントレプレナシップ)	English
7 8/6 (Tue) [10:30-12:30]		Fumitaka WAKAMATSU	Program-Specific Associate Professor, International Academic Research and Resource Center for Language Education (I-ARRC), Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University	京都大学 国際高等教育院 附属国際学術言語 教育センター 特定准教授	若松 文貴	Whaling in Japan: Cultural Politics of Food and Conservation (日本の捕鯨・食と保護を巡る文化政治学)	English
8 8/6 (Tue) [13:30-15:30]		Shinya YAMAMOTO	Associate Professor Institute for Advanced Study& Wildlife Research Center, Kyoto University	京都大学 高等研究院 野生動物研究センター (兼任) 准教授	山本真也	Exploring "humanity" by comparative studies with animals (「ヒトとは何か」を探る動物研究)	English
9 8/7 (Wed) [10:30-12:30]		Fuyuki ISHIKAWA	Vice President, Director of Kyoto University Research Administration Center (KURA) Professor Emeritus	京都大学 副学長 学術研究展開 センター長 名誉教授 特定教授	石川 冬木	Why are we destined to senescence? An approach from chromosome telomere biology (なぜ私たちの寿命は有限なのか — 染色体テロメアからの考察)	English
10 8/7 (Wed) [13:30-15:30]		Shikiko YUKAWA	Associate Professor, Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University	京都大学 国際高等教育院 准教授	湯川 志貴子	The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature (日本古典文学に見る日本人の美意識)	English
11 8/7 (Wed) [15:45-17:45]		Seiji KUMAGAI assisted with Takahiko KAMEYAMA	Professor, Kyoto University Institute for the Future of Human Society (Divisional Director of Uehiro Reserch Division) / Program-Specific Associate Professor, Kyoto University Institute for the Future of Human Society Uehiro Research Division	京都大学 人社会の未来研究院 教授 (上廣倫理財団 寄附研究部門長) / 京都大学 人社会の未来研究院 上廣倫理財団 寄附研究部門 特定准教授	熊谷 誠慈 亀山 隆彦	The Past, Present, and Future of Japanese Buddhism (日本仏教の過去、現在、未来)	English
12 8/8 (Thu) [10:30-12:30]		Emiko OCHIAI	Professor, Faculty of Sociology, Kyoto Sangyo University Emeritus Professor, Kyoto University Founding Director of Kyoto University Asian Studies Unit	京都産業大学 現代社会学 部・教授 京都大学・名誉教授 京都大学アジア研究教育ユ ニット・初代ユニット長	落合 恵美子	Representations of Women in Japan in the Latter Half of the 20th Century (20世紀後半の日本における女性像の変遷)	English

4. 成績評価

4.1 成績評価の概要

海外学生に対し京都大学から単位付与は行われていないものの、成績表及び参加証を交付している。協定校によってはそれに基づき、単位を認めているところもある(北京大学、延世大学校)。海外学生については、出席・参加態度 30%、日本語クラス 30%、最終発表と最終レポート 40%の合計で評価することとし、素点及び評語による成績評価を行った。また 2020 年度より、条件を満たした本学学生の受講生に対しても参加証を発行することになった。2022 年度より、本学学生の修了条件を精緻化し、プログラムの講義およびその他のプログラムの正規活動への出席・参加態度 30%、小レポート 10%、Discussion Session among Students への貢献 30%、最終レポート 30%の合計で評価することとした。また、今年度から本学学生向けの全学共通科目「多文化教養演習：見・聞・知@京都」としての単位付与が実現し、本学の全学共通教育における位置づけがより明確なものとなった。

4.2 参考資料

本学学生成績評価基準

成績評価基準

本学学生対象

京都大学国際高等教育院
京都大学アジア研究教育ユニット

京都サマープログラム 2024 の成績評価は以下の基準に沿っておこなわれます。

評価対象

必修活動を含む、合計 40 時間以上の参加者を評価対象とする。

【必修活動（25 時間）】

本学学生向けオリエンテーション 2 session の内 1 session（1 時間のみ）

日本語教授準備講座 3 session の内 1 session（1 時間のみ）

Academic Lecture 12 コマの内 8 コマ（24 時間中 16 時間）

KU. Introduction 2 コマの内 1 コマ（1 時間のみ）

Discussion Session among Students（3 時間のみ）

Final Presentation（3 時間のみ）

- | | |
|--|-----|
| (1) プログラムの講義およびその他のプログラムの正規活動への出席・参加態度 | 30% |
| (2) 小レポート（日本語教授準備講座・実習又は学外研修・文化体験等） | 10% |
| (3) Discussion Session among Students への貢献 | 30% |
| (4) 最終レポート | 30% |

※ 海外学生とは評価基準が異なります。

The assessment for “Kyoto Summer Program 2024”

Institute for Liberal Arts and Sciences (ILAS)
Kyoto University Asian Studies Unit (KUASU)

The assessment of “Kyoto Summer Program 2024” will be carried out in the following manner.
Participants will receive a certificate of participation. The academic transcript will be awarded only when the following conditions are met. The academic transcript will be sent to each university after the program.

[Certificate of participation ・ Academic Transcript]

Requirements: Participants must attend required 54 hours of lectures and activities to receive the transcript.

Assessment:

- | | |
|--|-----|
| (1) Attendance and participation in lectures and activities | 30% |
| [44 hours of lectures and activities, including participation in | |
| Kick-off Rally (2h) | |
| Opening Ceremony & Orientation (1h) | |
| Campus Tour (1h) | |
| KU introduction (1h) | |
| Academic Lectures (16h) | |
| Fieldtrip (6h) | |
| Cultural Experience (6h) | |
| Graduate School/ Lab Visit (1h) | |
| Discussions Session among Students (3h) | |
| Presentation for Final Preparation (3h) | |
| Final Presentation (3h) | |
| Completion Ceremony (1h)] | |
| (2) Japanese language class | 30% |
| [2 hours × 5 days = 10 hours] | |
| (3) Presentation and Final report | 40% |



京都大学

September 18, 2024

ACADEMIC TRANSCRIPT

Name:

Home University:

Course: Kyoto Summer Program 2024

Period: July 25– August 9, 2024

Evaluation: Attendance and participation in lectures and activities (30%),
Japanese language class (30%), Presentation and final report (40%).

This certifies that XXX has completed the above-named program and received the following evaluation:

Attendance and participation in lectures and activities	/30
Japanese language class (Assigned Level)	/30
Presentation and final report	/40

Overall	/100

For Reference:

The grading scale of the Kyoto University Institute for Liberal Arts and Sciences (ILAS) and Faculty/Graduate School of Letters is as follows:

A*: 100–96	A: 95–85	B: 75–64
C: 74–65	D: 64–60	F: below 60

Note: This document does not officially certify academic credits awarded by Kyoto University.

Masahiro OHSHIMA

Director,

Institute for Liberal Arts and Sciences,
Kyoto University

5. プログラムの概要

5.1 実施方法

昨年度に引き続き、今年度のプログラムも対面で実施され、京都大学に海外学生が集まった。ILAS と KUASU で履修する科目は異なる部分はあるが、参加者全員が同時間に同じ活動を行った。9:15 に設定し、最長 18:15 まで様々な活動を組み込んだ。会場は主に KUINEP 講義室、国際高等教育院棟、吉田国際交流会館を使用し、出席は IC カードを参加者に配布し、データで管理した。

5.2.カリキュラムの概要

5.2.1.カリキュラムの内容

今年度プログラムのカリキュラム内容は、おおむね表 1 のようにまとめることができる。大きく分けると、(A) 日本語学習、(B) 学術的学習、(C) 体験学習、(D) 共同学習の 4 つのパートから構成されている。(B) 内のアカデミックレクチャーに関しては選択制である。A・B・C・D の配分は以下の通りになる。

表 1 本プログラムのカリキュラムの概要(時間数)

分類	項目	時間数	割合	内容	
A 日本語学習	日本語講義	10	16%	6 クラス (初級 3 クラス、中級 2 クラス、上級 1 クラス)	
B 学術的学習	アカデミック レクチャー 研究室訪問	27	43%	食糧問題、ジェンダー、企業と将来展望、日本経済、仏教学、日本古典文学、文化政治学、外交史、日本の教育、社会言語学、細胞生物学、昆虫学・霊長類学(選択制)	
C 体験学習	文化体験	6	9.5%	日本文化体験 (KUASU)	日本文化体験 (ILAS)
	学外研修	6	9.5%	Fieldtrip 琵琶湖・近江八幡	
D 共同学習	討論・発表	9	14%	討論、発表準備、発表	
	その他	5	8%	Kick-off Rally, Opening/ Completion Ceremony, Orientation, Campus Tour	
	計	63	100%		

本プログラムは国際的に活躍できる留学生／日本人大学生の育成を目的としており、受入・派遣の両プログラムが密接に連携している。双方向型の学生の受入・派遣をより円滑にするため、学生間の交流が最も盛んとなる「D 共同学習」に質的な重点を置いてきた。京都サマープログラム 2024 では正規の時間としては 9 時間の共同学習を設けた他、授業の合間

に自由参加の「Discussion in English」や「海外学生と日本語で話そう（Conversation with KU students in Japanese）」などの学生交流の時間を多く設けた。

本プログラムの内容は、以下の4つの部分に分けられる。

5.2.2 アカデミックレクチャー

毎年講義を担当する教員は代わるが、国際関係、歴史、文学、農学、社会学など、各教員が専門とする講義を依頼している。教授言語は主に英語(10 講義)、英語と日本語(1 講義)、主に日本語(1 講義)で提供された。

今年度のアカデミックレクチャーは12種のレクチャーを用意した。最低8種類受講することを評価対象の条件にし、関心があれば、8科目を超えての受講も可能とした。

アカデミックレクチャーの内容も担当教員の間で検討を重ねた。選定の際の観点は、日本・日本社会を理解することに資する内容であること、又は本学のユニークな学究成果に触れられる内容であること、そして専門外の学生にも理解でき且つ表面的な理解にとどまらない内容を含むことである。今年度も、特定の分野・テーマに焦点をあてるのではなく、幅広いトピックを扱い、参加学生がこれまで触れることのなかった分野に触れ、分野を問わず物事を捉える際に生かせる視点を提供することを重視した。後掲の学生の報告文からは、この趣旨はよく理解されており、非常に高い満足度が示されている。

今年度の12のアカデミックレクチャーの担当教員、タイトルは次の通りである。後掲の写真、学生のコメントも参照されたい。

- ・佐野 真由子（教育学研究科）Diplomatic ceremonial in the last decade of the Tokugawa Shogunate: Japan's first step into modern diplomacy before the Meiji Restoration－Ver. 5
（幕末の外交儀礼から、日本の近代外交の幕開けを考える－その5）
- ・関山 健（総合生存学館）Political Economy of Japan's Economic "Lost Decades"
（日本経済「失われた30年」の政治経済）
- ・家本 太郎（国際高等教育院）日本語の社会言語学的諸相
（Sociolinguistic aspects of Japanese）
- ・河合 淳子（国際高等教育院）学校教育にみる日本文化の諸相
（Cultural Aspects of Education in Japan）
- ・近藤 直（農学研究科）Sustainable Food Production with Environmental Issues and Animal Welfare
（環境・動物福祉を考慮した持続的食料生産）
- ・木谷 哲夫（成長戦略本部）Innovation and Entrepreneurship
（イノベーションとアントレプレナーシップ）
- ・若松 文貴（国際高等教育院）Whaling in Japan: Cultural Politics of Food and Conservation
（日本の捕鯨:食と保護を巡る文化政治学）
- ・山本 真也（高等研究院、野生動物研究センター）Exploring "humanity" by comparative studies with animals
（「ヒトとは何か」を探る動物研究）
- ・石川 冬木（副学長、学術研究展開センター長）Why are we destined to senescence?

An approach from chromosome telomere biology

(なぜ私たちの寿命は有限なのか ― 染色体テロメアからの考察)

- ・湯川 志貴子 (国際高等教育院) The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature
(日本古典文学に見る日本人の美意識)
- ・熊谷 誠慈/亀山 隆彦 (人と社会の未来研究院) The Past, Present, and Future of Japanese Buddhism
(日本仏教の過去、現在、未来)
- ・落合 恵美子 (京都産業大学現代社会学部 教授、京都大学 名誉教授)
Representations of Women in Japan in the Latter Half of the 20th Century
(20 世紀後半の日本における女性像の変遷)

5.2.3 日本語教育

本プログラムのうち、ILAS プログラムは、募集の段階では日本語能力を要求しておらず、すべて英語で受講できる。しかし、以前のプログラム参加者から、日本語学習を希望する学生が少なくなかったため、2016 年度(平成 29 年度)より、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターに講師紹介を依頼し、初級日本語のクラスの提供を開始した。日本語学習は非常に好評で、その後も継続されただけでなく、中級以上の学生も参加するようになってきた。そのために KUASU プログラムと乗り入れ、毎年 4 レベルの日本語クラスを提供してきた。それでも日本語クラスの更なる充実を求める声が大きかった。

一方、KUASU プログラムは、教授言語は原則として日本語であり、日本語能力試験 N3 以上の日本語能力を有することが望ましいと募集要項に記載している。

以上の状況を踏まえ、今年度は、5 レベルの日本語クラスを提供した。また、プレイスメントテストをオンラインでプログラム前に実施した。これにより、初回からスムーズに授業に入ることができた。重ねて Consultation for Japanese Language level の時間を設け、微調整が必要な学生への対応もしやすくなった。履修者構成は以下の通りとなった。どのレベルも、語学学習に適正な人数で構成されていることがみてとれよう。

さらに今年度より、本学受講生の希望者を各日本語クラスに配置し、担当講師の指示の下、海外学生の日本語学習を補助する役割を担わせた。海外学生にとっては、クラス内で習った事柄をその場で練習する相手となり、本学学生にとっても、日本語を教える難しさを認識し、その方法を学ぶ貴重な経験となった。

日本語クラスのレベル別受講者(2024)

ILAS_ 33	大学名		初 級 IA	初 級 IB	初 級 II	中 級 I	中 級 II	中 級 II ～ 上 級
特別枠 _26	Peking University	5	1	1	1	2		
	Chinese University of Hong Kong	5	2	1	2			
	Yonsei University	4	1	2	1			
	National Taiwan University	3	1	1	1			
	University of Vienna	2	1	1				
	Heidelberg University	2	1		1			
	University of Barcelona	2		2				
	University of California, San Diego	2			2			
	University of Florida	1	1					
個人応募 枠_7	Charles Darwin University	1			1			
	University of Warwick	1		1				
	Erasmus University Rotterdam	1					1	
	King's College London (KCL)	1	1					
	Newcastle University	1				1		
	University of Bristol	1	1					
	University of Hong Kong	1					1	

KUASU_ 16	大学名		初 級 IA	初 級 IB	初 級 II	中 級 I	中 級 II	中 級 II ～ 上 級
	Vietnam National University, Hanoi	5					2	3
	Chulalongkorn University	5				1	1	3
	University of California, San Diego	1					1	
	National Taiwan University	3					1	2
	Chinese University of Hong Kong	1					1	
	Heidelberg University	1				1		

5.2.4 課内の特別活動

[Fieldtrip]

当プログラムの一つの軸は、日本社会への理解を深める実地研修であるが、昨年度までのオンラインプログラムでは、動画視聴と議論を中心に行ってきた。対面開催に復帰した今年度は、受講生が文字通り「フィールド」に赴き、現地での研修を行うことができた。

今年度のフィールドトリップではバスをチャーターし、滋賀県の近江八幡市・琵琶湖博物館へ出かけた。はじめに国の重要伝統的建造物群保存地区である近江八幡市八幡伝統的建造物保存地区を訪れた。受講生たちは小グループに分かれて自由に散策しながら、リーダーが様々な名所に待機しているポイントを巡り説明やクイズに答えながら歴史や文化を学んだ。

[KU intro.]

KU intro.とは Kyoto University Introduction の略であり、京都大学の紹介である。前述の通り、本プログラムは、本学学生はさらなる国際的活動への、そして海外学生は将来にわたる本学ひいては日本との関係への礎を築くことを目的としている。日本語・英語で説明する会場をそれぞれ作り、担当教員 1 名ずつが説明を行った。その中には、日本留学や奨学金の情報も含めた。その後、学生による京大の学生生活の紹介が行われた。

[Cultural Experience]

ILAS プログラムは日本・京都らしさや季節を重視した体験として、午前に友禅染体験、午後には京都府京北地域で活動されている団体 K-bond さんの協力を得て盆踊り体験、落語家の桜 法楽さんにお越しいただき英語落語鑑賞を行った。

KUASU プログラムは午前に友禅染体験で巾着の型染を行い、午後には漢字ミュージアムで 1 漢字のハンコ作成、国の重要文化在である清風荘にて茶道体験を行った。呈茶は本学の茶道部が協力してくれた。

詳細については、各プログラムの報告を参照のこと。

[Discussion among students ディスカッション]

プログラム 15 日目には、3 時間にわたる Discussion session among students が行われた。これは全ての受講生に参加が義務付けられている。ILAS のディスカッションでは、自由参加のディスカッションの時間を計 8 回とってきたが、Discussion session among students ではそれぞれのテーマのまとめを各代表者に発表してもらい、その後いくつかの話題について希望するメンバーでさらに 60 分間議論を行い、その後全体でアイデアの共有、意見交換をした。各テーマの発表者と、扱った話題を記しておく。

8 月 6 日(土) 8:30-11:30 ILAS プログラムのディスカッション

各テーマの発表者

- ・ Artificial intelligence & society…Sena
- ・ Sustainable energy…Dora
- ・ Standardization of English…Ruka, Juri
- ・ Food security issues…Shoma, Watermelon, Nayuka
- ・ Gender Issues…Sakura, Sena
- ・ Regional disparities…Shoma, Watermelon, Macky
- ・ Innovation…Runa, Atsushi
- ・ Globalization & Movement of People…Saho, Jasmine, Haru

当日ディスカッションテーマ

- ・ Should we promote the global adoption of English?
- ・ Should we promote centralization?
- ・ Should we promote genetically modified organisms?
- ・ Should large corporations drive technological innovation?

KUASU のディスカッションでは、担当教員とリーダーがテーマ(「生成 AI と社会」「ジェンダー」「英語の共通言語化」)を設定した。ディスカッションでは、各グループ内で議論おこない、その後、各グループごとに発表をおこなった。

8 月 8 日(木) 13:30-16:30 KUASU プログラム(ディスカッションは 15:30-)

- ・ グループ①テーマ「生成 AI と社会」

- ・グループ②テーマ「ジェンダー」
- ・グループ③テーマ「英語の共通言語化」

[Final Presentation 最終プレゼンテーション]

ILAS プログラムでは、4 分間の個人発表、KUASU プログラムは海外学生と本学学生で構成されるグループでの発表を行った。詳細については、各プログラムの報告を参照のこと。

5.2.5 課外の活動

[Discussion in English・発表準備講座/ 海外学生と日本語で話そう (Conversation with KU students in Japanese)]

プログラム中の朝と夕方の時間帯に開催された。Discussion in English は ILAS の学生・英語で議論したい本学学生向けで、KUASU の発表準備講座と同じ時間に行われた。発表準備講座は KUASU 学生が最終発表に向けグループで準備を進める時間である。本学学生もグループ発表に参加することができるが、一度参加を決めたら最終発表まで継続して参加する必要がある。また、海外学生と日本語で話そう (Conversation with KU students in Japanese) では、海外学生と本学学生が 1 対 1 になって日本語を話す機会を作った。後掲の報告書からは、この時間の自由な議論を高く評価する記述が少なくない。

[研究室訪問]

昨年度に引き続き、京都大学でどのような研究がおこなわれているのか、より具体的に知ることができる「研究室訪問」を行った。文学研究科、アイセムス、そして人間・環境学研究科の協力を得て、研究紹介や各大学院への進学案内を行い、好評を博した。

8 月 1 日(木)				8 月 1 日(木)	
15 : 00-16 : 00				16 : 45-17 : 45	
Joint Degree Master of Arts Program in Transcultural Studies Graduate School of Letters 文学研究科 国際連携文化越境専攻		Center for Cancer Immunotherapy and Immunobiology がん免疫総合研究セ ンター		The Graduate School of Human and Environmental Studies 人間・環境学研究科	
海外学生	34	海外学生	17	海外学生	28
本学学生	15	本学学生	14	本学学生	14
合計	49	合計	31	合計	42

6. 展望

各プログラム固有の展望については各章に譲るが、ILAS プログラム、KUASU プログラム共通の観点から、(1) 地域の拡大、(2) 運営体制の充実、(3) 広報について、展望を述べておきたい。

(1) 現在、ILAS プログラム、KUASU プログラムは、それぞれの個性を生かしつつ、両者に共通する部分については協力して提供している。共通部分は、英語を教授言語とした学術講義(アカデミックレクチャー) 群、日本語授業、京大紹介講義(日本語、英語の 2 か国語で提供)、学外研修である。これにより、多様な背景を持つ学生が一同に会して学ぶ機会を提供できており、京都大学学生に対する教育的効果も大きい。とくに今後もこの方針を継続したい。

(2) 引き続き体制の強化が必要である。プログラムの経験を蓄積し、継続的なプログラム運営が可能となる体制を一層強化していかなければならない。学部生を受け入れるこうしたプログラムは、京都大学全体を見渡してもユニークなものであり、参加者、協力教員の評価も高い。現在、受入を実施していない協定校の学生からの参加希望の連絡を受けることもある。中・長期的実施を可能にする運営体制の構築が求められる。また、学外組織との連携は、両プログラムにとって重要な要素である。今年度は、盆踊り保存を行う学生団体 K-Bond と、英語落語家 桜 法楽氏の協力を得た。KUASU 側では学内の茶道部の協力を得た。

(3) 広報も課題である。本プログラムは海外パートナー校では一定の認知度があるが、むしろ学内での認知度は向上の余地がある。今年度は本学学生向けの受講申込フォームに「どこで本プログラムを知ったか」という問いを入れ、統計をとった。複数回答を許可したが、総数に占める割合で一番大きいのは KULASIS で 42.9%にのぼった。次は授業中の紹介 26.2%で、ポスターが次いで 11.9%であった。上位 3 位で全体の 81%を占めることが分かった。72 人の応募があり、40 人を受講生として受け入れた。授業中の紹介では、プログラム担当教員が学生リーダーと共に、プログラムと特に親和性の強い授業を訪問して広報を行わせていただいたほか、本学の共通英語科目でも多数のクラスで紹介をいただいた。広報にご協力いただいた先生方に深く謝意を申し上げる。今後も学内外と連携し、海外学生、本学学生双方に資する研修内容の開発を行っていく。

7. 資料集

アカデミックレクチャーの様子と報告

アカデミックレクチャー①; “Diplomatic ceremonial in the last decade of the Tokugawa

Shogunate: Japan’s first step into modern diplomacy before the Meiji Restoration —Ver. 5

(幕末の外交儀礼から、日本の近代外交の 幕開けを考える－その 5) ”

[Mayuko SANO]

During the Edo period (1603-1867), the Edo shogunate, under a diplomatic system known as “seclusion,” established diplomatic relations only with China (Qing Dynasty), Korea, Ryukyu Islands, and the Netherlands. Diplomatic ceremonies included a ceremony called the “credential granting ceremony. This ceremony was held to hand over credentials from the sovereign to diplomats and to show that the diplomat was a representative of the diplomatic mission and that the two countries were on equal footing. Records of foreigners visiting Japan at the time provide a glimpse into the diplomatic rituals of the time. In this class, several writings and records were discussed. One is Mitford's Japan : the memoirs and recollections, published in 1985, which is a record of Arjano-Mitford's (English) experiences in Japan during the 1860s and 1870s. Here, the topic of the clothing worn by the samurai class was mentioned. Townsend-Harris, who visited Japan as the U.S. envoy for the conclusion of the Japan-U.S. Treaty of Amity and Commerce, was also discussed. It is sometimes believed that such rituals in Japan began after the Meiji era (1868-1912) under Western influence. Harris also had this perception, but this is not the case.

Conclusion:

1) Facts: Modern diplomatic rituals were already developed by the early modern Japanese government prior to the Meiji Restoration.

...the possibility to reconsider the existing understanding of the encounter between the West and the non-Western world and the beginning of modernization in the non-Western world.

2) Attitude in research: to face historical sources without prejudice and to examine them with the utmost objectivity.

3) People: the importance of careful observation of people and their experiences.

Cultural History of Diplomacy

⇒To shed new light on diplomacy as a human act

⇒Points from the perspective of the individual, different from what can be grasped through state-to-state analysis

i) That individuals are fundamentally equal.

ii) That individual life continues beyond artificial periodicity.

(京都大学生リーダー Shohei)

アカデミックレクチャー②; “Political Economy of Japan’s Economic “Lost Decades”
(日本経済「失われた 30 年」の政治経済)”

[Takeshi SEKIYAMA]



The lecture, titled "Political Economy of Japan’s Economic ‘Lost Decades’," covered the economic system and Japan's economy over the past thirty years. It began with an explanation that the economy consists of production and consumption activities, with three essential inputs on the production side: labor, capital, and land. Three methods to achieve economic growth, defined as an increase in total output value, were then presented: quantitative and qualitative increase in inputs, and process optimization through innovation. Based on this background knowledge, students discussed how changes in population, education, and AI impact economic growth. Some suggested factors for positive growth included population increase, higher education, and production process optimization through AI. However, others highlighted the complexity of the issue, noting data that shows a lower birth rate among women with higher educational backgrounds. In conclusion, the lecturer explained that Japan's prolonged period of low economic growth is due to a declining and aging population, a deficiency in educational budgets, and decreased company investment in R&D.

(京都大学生リーダー Mayu)



アカデミックレクチャー③；“日本語の社会言語学的諸相
(Sociolinguistic aspects of Japanese)”

[Taro IEMOTO]



初めに、「日本」という単語について様々な国の発音の違いと、その発音の歴史的変遷について学んだ。次に、日本語の書記体系についてだ。言語の数は世界に 3000 個、文字を持っている言葉は 300 個、いま世界で使われている文字の種類は 30 個ある。日本語には漢字、ひらがな、カタカナの三つの体型があり、これは珍しいことだ。さらに言語相対論について。言語相対論とは、「言葉が違えば世界が違ってくるように見えているのではないか」という理論である。しかし言語相対論には翻訳、多言語使用者の問題などがあるため、現在見直されている。そして人称詞についてだ。女性の方が明らかに人称詞の選択肢が少ない。また、日本語では一人称と二人称が変化するが、これは他の言語ではありえないことである。



最後に敬語についてだ。

敬語には尊敬語、謙譲語、丁寧語の 3 種類があるが、日本には敬語の無い方言も存在する。

(京都大学生リーダー Ayumi)

アカデミックレクチャー④；“学校教育にみる日本文化の諸相
(Cultural Aspects of Education in Japan)”

[Junko KAWAI]



まず、日本文化とは何かについて問われ、参加者からは寿司、着物、時間を守るなど様々な意見が出た。本講義のテーマは、日本の学校でどのように日本文化が教えられているかを考えることである。まず、基礎知識として、①日本の学校制度、②「教育」を観察するということ、③学校のカリキュラムには、学習に関する顕在的カリキュラムと生活態度・社会生活に関する隠れたカリキュラムがあることの3点が紹介された。特に②に関しては、先生から参加者それぞれの国での教育問題が問いかけられた。アジア圏の学生が主たる参加者であったためか、学歴競争や地域による教育格差、仕事の大変さや低賃金による教職員不足など共通した課題が見られた。その後、教育は誰にでも経験がある身近な話題であるが、だからこそ見えにくい側面を持つこと、そのために比較の視点が大事であることが説明された。次に、日本とアメリカの小学生のビデオを視聴した。アメリカの小学生に比べると、日本の小学校教育は平等教育、社会性・道徳教育、集団の中での個の役割、「がんばる」ことに重きをおかれていることが特徴であることがわかった。さらに、日本の高校生の部活動のビデオを視聴した後、どのような文化・価値観を部活動で学んでいるか、参加者自身の国でその価値観は強調されているかをグループで議論した。海外学生からは、負けても個人の責任にするのではなく集団として反省し

さらなる努力を積む点は自国にはないという意見がでた。日本人学生からは、身に覚えがある組織文化だという感想がある一方で、映像内に出てくるほどに集団としての個が強調される組織に身を置いたことがない、映像自体がやや古く、自分が経験した教育とは乖離しているなどの意見も散見された。最後に、現在は生活の多くの時間を学校で過ごす学校化社会であることが示された。これには、人々は学校に多くのことを求めるようになってきていること、それゆえに教職員の忙しさが増していること、学校に居場所がないと生活のほとんどに居場所がなくなってしまうことなどの問題点が指摘された。

(京都大学生リーダー Rina)



アカデミックレクチャー⑤; “Sustainable Food Production with Environmental Issues and Animal Welfare
(環境・動物福祉を考慮した持続的食料生産)”

[Naoshi KONDO]



The lecture explored the causes of global warming, focusing on the roles of carbon dioxide (CO₂) and methane (CH₄) emissions. It began by highlighting the significant environmental impact of population growth and agriculture, which contributes to half of the world's methane emissions and 80% of nitrous oxide (N₂O) emissions. The natural nitrogen cycle was discussed, explaining how it is disrupted by the excessive use of chemical fertilizers, leading to increased N₂O emissions, air pollution, and acid rain. In Japan, rice paddies and cattle farming are major sources of methane emissions due to the anaerobic conditions in which they operate. The lecture also addressed the challenge of feeding a growing global population while minimizing environmental damage. It emphasized the importance of cultivating crops in suitable regions and discussed the issue of soil degradation caused by excessive fertilizer use in ASEAN countries, the Middle East, and Eastern Europe. The trade-off between increasing food production and preserving the environment was a central theme.



The lecture compared small-scale intensive farming in Asia with large-scale extensive farming in the West, discussing the efficiency, safety, and technological advancements in agricultural practices, including the development of agricultural robots and autonomous vehicles. Food loss was another key topic, with a focus on the differences in food waste among countries. Advanced technologies, such as spectroscopic machines and fluorescence imaging, were discussed as methods for detecting flaws in fruits and vegetables, potentially reducing food waste. Finally, the lecture considered the future of agriculture, including the potential use of nanotechnology, and discussed the ethical and environmental challenges associated with various protein sources, particularly in chicken farming.

(京都大学生リーダー Shuta)

アカデミックレクチャー⑥; “Innovation and Entrepreneurship

(イノベーションとアントレプレナーシップ)”

[Tetsuo KITANI]

The title of this lecture was “Innovation and Entrepreneurship”. It was shown that the pace of change is accelerating because transforming information much easier to spread today, in digital information age and one innovation leads to other innovation and the other innovation leads to more multiple innovation. Then, it was explained that the definition of innovations is combining new ideas with economic value.

Next, it was described why we need Entrepreneurship. The definition of Entrepreneurship is the pursuit of opportunities beyond resources controlled. Some people were introduced as entrepreneurs such as Bill Gates and so on. Then, it was mentioned that those people are necessary for society because in case of start up, they cannot forecast how many people will buy it. So, animal spirit is important to try completely new things.

Some examples of new business ideas were also introduced such as synthetic meat and anti-aging technology by recreating or reactivate zombie cell.

In the latter part of the class, group work was conducted, and international students and Japanese students worked together to write down about microtrends and think about new business ideas.

(京都大学生リーダー Mariko)



アカデミックレクチャー⑦; “Whaling in Japan: Cultural Politics of Food and Conservation
(日本の捕鯨:食と保護を巡る文化政治学)”
[Fumiaki WAKAMATSU]



At the beginning, religion was raised as an example of food taboos, and two ideas were introduced that they cause food taboos: Cultural Structuralism, Cultural Materialism. Then, whaling history in Japan was introduced which has deeply affected by international conditions. After the WWII, anti-whaling movement took place, whale meat consumption in Japan decreased drastically, where whaling had been thriving since ancient times. However, whaling was positively introduced totally in this lecture in that Japan aims at another species which is endangered, and whale meat is nutritious with irons and proteins, and so on. Finally, opinions were requested regarding explanations of whaling from two ideas from beginning, and it was exaggerated that multicultural society can be achieved by seeing things from various perspectives.

(京都大学生リーダー Natsuko)



アカデミックレクチャー⑧; “Exploring "humanity" by comparative studies with animals
(「ヒトとは何か」を探る動物研究)”

[Shinya YAMAMOTO]



Professor Yamamoto began the lecture by asking the participants three questions: “What is human uniqueness?” “Why do humans have uniqueness?” and “When and how did uniqueness emerge?” and allowed time for free discussion. Although so-called “meta-cognition” and literacy are abilities unique to humans, various methods are currently being used to investigate what differences exist between the cognitive abilities of humans and other animals. One of these is an experiment on apes.

Chimpanzees and bonobos, human evolutionary neighbors, have symmetrical characteristics in every respect. Professor Yamamoto conducted experiments on both to determine whether they can hand over tools necessary for their peers to benefit, and to examine how they behave in situations in which their behavior allows the other to benefit. The results showed that chimpanzees initially showed reciprocal corporation, but it did not last long, while bonobos consistently helped each other to some extent. Professor Yamamoto points out that this is due to the difference in the environment in which they live. He concluded that the meddlesome behavior of helping others without any benefit to oneself, as it is called in Japanese, is unique to humans.

At the end of the lecture, he showed that the structural society of horses is very suggestive for the study of the evolution of animal sociality. He also outlined studies on the effects of oxytocin inhalation in companion animals such as horses, dogs, and cats, and mentioned the problems surrounding companion animals in contemporary Japan.

(京都大学生リーダー Michi)



アカデミックレクチャー⑨; “Why are we destined to senescence?”

An approach from chromosome telomere biology

(なぜ私たちの寿命は有限なのかー染色体テロメアからの考察)”

[Fuyuki ISHIKAWA]



An approach from chromosome telomere biology.” First, it was shown that DNA has double helix structures and James Watson and Francis Crick discovered that. It was also explained that four kinds of bases are tied in a definite rule.

Next, the lecturer started to explain about telomeres which Eukaryotes have after Eukaryotes and Prokaryotes were introduced. Telomeres protect the end of DNA and are essential for stable DNA maintenance. It was explained how telomeres relate to cell division and how the phenomenon that telomeres shorten has a role in the prevention of cancer. Then, sexual reproduction and the difference between no sexual reproduction and sexual reproduction were also explained concerning that shortening DNA only occurs in somatic cells.

Finally, it was time for question and answer.

(京都大学生リーダー Chihiro)



アカデミックレクチャー⑩; “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through
Classical Japanese Literature
(日本古典文学に見る日本人の美意識)”

[Shikiko YUKAWA]



This lecture, held on August 7th, began with an introduction that today marks the beginning of autumn (Risshū). The associate professor explained why this day, amid summer, is called "Risshū" by discussing the structure of the Japanese lunisolar calendar. She then introduced Japanese poems (waka) that capture the arrival of autumn, which is not visible but can be sensed through the sounds of the wind, such as "Autumn has come, though the eye does not see it, I am startled by the sound of the wind." It represented the Japanese aesthetic sense regarding seasonal changes. Furthermore, she showed how the Japanese had a deep sensitivity to the passage of time, using waka that included terms like "akatsuki (dawn)," "shinonome (sunrise)," "Akebono (early morning)," and "asaborake (bright morning)."

The topic then shifted to the names of the moon, introducing terms such as "Izayoi-no-tsuki" (the hesitant moon), "Tachimachizuki" (the moon that one stands and waits for), "Imachimazuki" (the moon that one sits and waits for), and "Nemachimazuki" (the moon that one lies down and waits for). After posing the question of what each moon is waiting for, she explained that the moon seems hesitant to rise, by showing the actual times of moonrise. Finally, the lecture introduced a poem that reflects on how, with the coming of longer nights after Risshū, spending a long night alone can be lonely, but if with a loved one, the night seems to pass quickly.

It was shown that love letters were also expressed in relation to the seasons.

(京都大学生リーダー Yurika)



アカデミックレクチャー⑪：“The Past, Present, and Future of Japanese Buddhism
 (日本仏教の過去、現在、未来)”
 [Seiji KUMAGAI assisted with Takahiko KAMEYAMA]



The lecture was made by Professor Kumagai, who is a specialist in Buddhist, Tibetan and Bhutanese studies, titled “Past, Now, Future of Buddhism” As one of the researchers of Buddhism, he realized that the aim of Buddhism can be one of the ways to deal with the current situation in Japan, which more and more people are struggling to mental problem, leading suicide in the worst case. Buddhism aims to remove a suffer and to help people form suffering. In the lecture, he explained a brief history of Buddhism and Buddology which research Buddhism from the academic perspective. Buddhism is originated in India, sometimes used as a kind of weapons of the nation and widely prevailed in the early Edo period, with the storing connection to the Japanese government, however, after the Meiji restoration or WW2, it started to be considered as “BAD”, becoming less popular today. To enhance general peoples mantal well-being, the professor is trying to tell the Buddhist teaching to them. For example, Buddhobot, which is the AI chatbot as a counselor. With the combination of Chat GPT4, people will understand the Buddhist teaching more easily, since it adds extra explanation to compensate the teaching. He is also thinking to create cyber space where people can visit shrines and temples whenever they want, mainly to cope with the sever issue that more and more temples and shrines are closed due to the poorness.



In the last of the lecture he introduced a project called, Japanese Moonshot Goal 9, which he belongs to. Professionals in the project aim to enhance people’s mental state by the use of technology. In the Q&A section, he mentioned that Buddhism is one of the way to deal with mental problems but there may not be so for those who believe in another religion.

(京大学生リーダー Kaho)

アカデミックレクチャー⑫：“Representations of Women in Japan in the Latter Half of the 20th Century
(20 世紀後半の日本における女性像の変遷)”

[Emiko OCHIAI]



The title of the lecture was "Representations of Women in Japan the Latter half of the 20th Century " and the lecture was about the changing roles of women in Japan from the post-war period to the end of the 20th century. Ochiai-sensei posed a question about the differences in female images between Japan and the United States, specifically contrasting the “Cute girl” and “Sexy woman” archetypes, and explained the historical context in which contemporary Japanese female images emerged. This was done by analyzing three women’s magazines and dividing post-war Japan into four distinct periods.



The key magazines discussed were “Housewife’s friend”(Post-war to 60s), “Women’s own“(60s70s), and “non-no” (70s90s). During the lecture, Ochiai-sensei analyzed the characteristics of the photos in each magazine from these periods to interpret the female images of the time and explained the context surrounding these images. Additionally, Professor Ochiai discussed the changes in the employment rates of Japanese women over these periods, highlighting how these rates evolved alongside the formation of female images and the trends that emerged in each era. (京都大学生リーダー Shota)

科目名 Title	日本語初級 IA Japanese Elementary IA	講師 Instructor	柏木 美和子 Kashiwagi, Miwako	
〔授業の進め方 Contents of the class〕				
かい 回	がっぴ 月日 (曜日) Date	じげん 時限 Time	じゅぎょうないよう 授 業 内 容 Contents of the class	びこう 備考 Notes
	きょうしつ 教室 Classroom			
1	7月27日 (土) Jul.27 (Sat) 国際交流会館1階 講義室1 IS-1	10:30 -12:30	にほんごたんぽう はつおん めいしぶん 日本語探訪1: 発音、名詞文、 じこしょうかい 自己紹介、あいさつ	
			• Exploring Japanese Language 1: Pronunciation, Noun sentences • Self-introduction, Must-know phrases	
2	7月29日 (月) Jul.29 (Mon) 国際交流会館1階 講義室1 IS-1	10:30 -12:30	にほんごたんぽう ぶんぽう どうしぶん かいわ 日本語探訪2: 文法、動詞文1、会話	たんご 単語クイズ
			• Exploring Japanese Language 2: Japanese Grammar, Verb sentences 1 • Conversation for shopping	Vocabulary quiz
3	7月31日 (水) July.31 (Wed) 国際交流会館1階 講義室1 IS-1	10:30 -12:30	にほんごたんぽう もじ けいようしぶん かいわ 日本語探訪3: 文字、形容詞文、会話	たんご 単語クイズ
			• Exploring Japanese Language 3: Japanese letters, Adjective sentences • Conversation for eating out	Vocabulary quiz
4	8月1日 (木) Aug.1 (Thu) 国際交流会館1階 講義室2 IS-2	10:30 -12:30	にほんごたんぽう どうしぶん かいわ 日本語探訪4: 動詞文2、会話	たんご 単語クイズ
			• Exploring Japanese Language 4: Verb sentences 2 • Conversation for going out	Vocabulary quiz
5	8月3日 (土) Aug.3 (Sat.) 国際交流会館1階 講義室1 IS-1	10:30 -12:30	にほんごたんぽう にほんごしょうはつびよう 日本語探訪5: 日本語小 発表、まとめ	たんご 単語クイズ
			• Short Presentation in Japanese • Wrap-up	Vocabulary quiz
〔教科書 Textbook〕 ひつよう しりよう はいふ 必要な資料を配布する。Teaching materials will be provided.				
〔その他の注意 Miscellaneous〕 PandA に宿題を入れますから、定期的に PandA を見てください。 Your homework will be posted on PandA, so please check PandA regularly.				
Continuous Assessment 100%				
1. Daily Assignments 20%				
2. Quizzes 30%				
3. Final Presentation in Japanese using PPT 40%				
4. Class Participation. 10%				

〔京大生に求めること〕初めて日本語を学ぶ留学生たちです。彼らの日本語使用を後押しするとともに、日本語の興味深さも伝えたいと思います。各クラスの後半で「京大生10分ツアー」という時間を設けますので、できるだけ彼らが習った日本語を使い、簡単な PPT(クラス内で各自作成)を使い、キャンパス(7/27)、京大周辺(7/29)、京都市内(7/31)、京都の夏(8/1)、京都の春・秋・冬(8/3)の楽しみ方を案内、ワクワクドキドキ体験を演出してください。PPT で使用していただくローマ字表記の一覧を PandA に入れておきますので、ご参照の上、統一してください。授業についての注意事項等、PandA に入れますので、授業前にご確認ください。よろしくお願いいたします。

Schedule

10:30-12:30	Elementary IA Kashiwagi sensei
July 27 (Sat.)	IS-1
July 29 (Mon.)	IS-1
July 31 (Wed.)	IS-1
August 1 (Thu.)	IS-2
August 3 (Sat.)	IS-1

15:45-17:45	Elementary IA Kashiwagi sensei
August 5 (Mon.)	No class
August 6 (Tue.)	No class

IS-1: Room 1, 1st floor, Yoshida International House 吉田国際交流会館 1階 講義室1

IS-2: Room 2, 1st floor, Yoshida International House 吉田国際交流会館 1階 講義室2

科目名 Title	日本語初級 IB Elementary IB		講師 Instructor	高橋 旬子 Takahashi, Junko
〔授業の進め方 Contents of the class〕				
かい 回	月日（曜日） Date	時 限 Time	授 業 内 容 Contents of the class	備 考 Notes
	教室 Classroom			
1	7月27日(土) Jul.27 (Sat.) IS-5	10:30-	どうぞよろしく、ひらがな①	
		12:30	Nice to meet you, Hiragana①	
2	7月29日(月) Jul.29(Mon.) IS-5	10:30-	なんですか、ひらがな②	
		12:30	What is this?, Hiragana②	
3	7月31日(水) Jul.31(Wed.) IS-5	10:30-	かいもの、カタカナ①	
		12:30	Shopping strategies, Katakana①	
4	8月1日(木) Aug.1(Thur.) IS-5	10:30-	～にいきます、カタカナ②	
		12:30	I am going to ～, Katakana②	
5	8月3日(土) Aug.3(Sat.) IS-5	10:30-	たべもの、まとめのかつどう	
		12:30	Talking about food	
〔教科書 Textbook〕 資料を配布する。Teaching materials will be provided.				
〔その他の注意 Miscellaneous〕				
・学生のニーズや能力 によって内容を 変えることがあります。 Contents may be modified based on the needs and abilities of the students.				
・採点基準：出席・参加態度60%、課題など 40% Grading Criteria: Attendance and Participation 60%, Assignments, etc. 40%				
〔京大生に求めること〕				
グループで活動するとき、留学生とやさしい日本語で話してください。 明るく楽しい授業になるようにご協力ください。				

Schedule

10:30-12:30	Elementary IB Takahashi sensei
July 27 (Sat.)	IS-5
July 29 (Mon.)	IS-5
July 31 (Wed.)	IS-5
August 1 (Thu.)	IS-5
August 3 (Sat.)	IS-5

15:45-17:45	Elementary IB Takahashi sensei
August 5 (Mon.)	No class
August 6 (Tue.)	No class

IS-5: Room 5, basement floor, Yoshida International House よしだこくさいこうりゅうかいかん 吉田国際交流会館 ちか 地下 こうぎしつ 講義室5

科目名 Title		日本語初級Ⅱ Japanese Elementary II		講師 Instructor	中澤 まゆみ Nakazawa, Mayumi
〔授業の進め方 Contents of the class〕					
かい 回	がっぴ 月日 (曜日)	じげん 時限 Time	じゅぎょうないよう 授 業 内 容 Contents of the class	びこう 備考 Notes	
	きょうしつ 教室 Classroom				
1	7 月 27 日 (土) Jul.27 (Sat.) IS-6	10:30	希望・願望表現練習／会話		
		-12:30	(～たい・ほしい ～んです)		
2	7 月 29 日 (月) Jul.29 (Mon.) IS-6	10:30	様態・伝聞表現練習／会話		
		-12:30	(～そう)		
3	7 月 31 日 (水) Jul.31 (Wed.) IS-6	10:30	可能表現練習／会話		
		-12:30	(～ことができる・potential form)		
4	8 月 1 日 (木) Aug.1 (Thu.) IS-3	10:30	条件表現練習／会話		
		-12:30	(～たら・～なら)		
5	8 月 3 日 (土) Aug.3 (Sat.) IS-3	10:30	受身表現練習／会話		
		-12:30	(～れる・～られる)		
〔教科書 Textbook〕 教材配布。Teaching materials will be provided.					
〔その他の注意 Miscellaneous〕 時間厳守。 採点基準： 出席・参加態度 40% 授業内での課題 60%					
〔京大生に求めること〕 学習者との会話は日本語だけで行ってください。学習者は初級前半の文法・語彙は理解できますので、既習の文型・語彙を使うように心がけてください。					

Schedule

10:30-12:30	Elementary II Nakazawa sensei
July 27 (Sat.)	IS-6
July 29 (Mon.)	IS-6
July 31 (Wed.)	IS-6
August 1 (Thu.)	IS-3
August 3 (Sat.)	IS-3

15:45-17:45	Elementary II Nakazawa sensei
August 5 (Mon.)	No class
August 6 (Tue.)	No class

IS-6: Room 6, basement floor, Yoshida International House よしだこくさいこうりゅうかいかん 吉田国際交流会館 ちか 地下

こうぎしつ
講義室6

IS-3: Room 3, basement floor, Yoshida International House よしだこくさいこうりゅうかいかん 吉田国際交流会館 ちか 地下

こうぎしつ
講義室3

科目名 Title		にほんごちゅうきゅう 日本語 中 級 I Japanese Intermediate I		こうし 講師 Instructor		しもはし みわ 下橋 美和 (SHIMOHASHI, Miwa)	
〔授業の進め方 Contents of the class〕							
かい 回	がつ 日 (曜日) Date	じげん 時限 Time	じゅぎょうないよう 授 業 内 容 Contents of the class			びこう 備考 Notes	
	きょうしつ 教室 Classroom						
1	7 月 27 日 (土) Jul.27 (Sat.) IS-2	10:30-	さそ 誘う				
		12:30	ことわ 断る				
2	7 月 29 日 (月) Jul.29 (Mon.) IS-2	10:30-	いらい きょか もと 依頼する、許可を求める				
		12:30	メールを か 書く				
3	8 月 1 日 (木) Aug.1 (Thu.) Room 40, Yoshida- South Campus Building. No.4	10:30-	話し合う、1 分スピーチ (1)				
		12:30	しょたいめん ひと はな 初対面の人と話す				
4	8 月 3 日 (土) Aug.3 (Sat.) IS-2	10:30-	まとまった ぶんしょう 文章を読む (1)				
		12:30	話し合う、1 分スピーチ (2)				
5	8 月 6 日 (火) Aug.6 (Tue.) IS-2	15:45-	まとまった文章を読む (2)				
		17:45	話し合う、1 分スピーチ (3)				
〔教科書 Textbook〕 ひつよう しりよう はいふ 必要な資料を配布する。Teaching materials will be provided.							
〔その他の注意 Miscellaneous〕 評価：30% 出席・参加度 70% ロールプレイ・提出物・1 分スピーチ (各タスクの最後の発表や提出をチェック)							
〔京大生に求めること〕 ロールプレイをするときや話し合うとき、留学生の会話のパートナーになってください。 留学生がメールを書くとき、1 分スピーチの準備をするときのお手伝いをお願いします。 中級レベルの日本語を使ってくださいとありがたいです。							

Schedule

10:30-12:30	Interm-I Shimohashi sensei
July 27 (Sat.)	IS-2
July 29 (Mon.)	IS-2
July 31 (Wed.)	No class
August 1 (Thu.)	Room 40, Yoshida-South Campus Building. No.4
August 3 (Sat.)	IS-2

15:45-17:45	Interm-I Shimohashi sensei
August 5 (Mon.)	No class
August 6 (Tue.)	IS-2

IS-2: Room 2, 1st floor, Yoshida International House よしだ こくさいこうりゅうかいかん 吉田国際交流会館 こうぎしつ 講義室2

Room 40, Yoshida-South Campus Building. No.4 よしだ みなみ ごうかん 吉田南4号館 かい 4階 こうぎしつ 40講義室

科目名 Title	日本語中級Ⅱ Japanese Intermediate II	講師 Instructor	浦木 貴和 (Uraki, Norikazu)	
〔授業の進め方 Contents of the class〕				
かい 回	がっぴ　ようび 月日（曜日） Date	じげん 時限 Time	じゅぎょうないよう 授　業　内　容 Contents of the class	びこう 備考 Notes
	きょうしつ 教室 Classroom			
1	7 月 27 日（土） 10：30～12：30 IS-4	10:30- 12:30	自己紹介で相手に印象づける	
			性格、日本語や趣味を始めたきっかけ、住んでいる町やふるさとの町についてやり取りをする	
2	7 月 29 日（月） 10：30～12：30 IS-4	10:30- 12:30	学部や専門、研究内容についてわかりやすく説明する	
			専攻と自分が行っている研究、その動機やきっかけについて話す、研究の目的は何か、専門用語についてわかりやすく説明する、自分の専門（研究）と社会との関係について話す	
3	8 月 1 日（木） 10：30～12：30 Room 41, Yoshida-South Campus Building. No.4	10:30- 12:30	グラフや表を説明しよう	
			具体的な数値を示して社会の動きを説明する、目的に応じてグラフや表をわかりやすく説明する、データの分析が適切かを考えながら聞く	
4	8 月 3 日（土） 10：30～12：30 IS-4	10:30- 12:30	ステレオタイプを打ち破ろう	
			他の人とは異なる視点から意見を述べる、決めつけない話し方をする、互いの捉え方の違いを理解する	
5	8 月 5 日（月） 15：45～17：45 IS-5	15:45- 17:45	日本語のニュースを聞こう	
			日本で今起こっていることや問題になっていることを聴き取り、それに対する自分の意見を話す	
〔教科書 Textbook〕　必要な資料を配布する。Teaching materials will be provided.				
〔その他の注意 Miscellaneous〕 成績評価基準は以下の通りです。 出席・参加態度：40%、クラス内での課題：60%（課題の評価方法については授業中に説明します） 学生のニーズや能力によって内容を変えることがあります。 授業で使用する資料は PandA にアップロードします。授業に参加するときは、パソコンを持ってくるください。				

〔京大生に求めること〕

できるだけ媒介語を使わず、留学生が理解できないと思ったら簡単な表現などに直して説明してください。

また、外国から来る学生たちの日本語を手助けしながら日本および出身国の文化や社会などについて学び合い話し合ってください。

Schedule

10:30-12:30	Interm-II Uraki sensei
July 27 (Sat.)	IS-4
July 29 (Mon.)	IS-4
July 31 (Wed.)	No class
August 1 (Thu.)	Room 41, Yoshida-South Campus Building. No.4
August 3 (Sat.)	IS-4

15:45-17:45	Interm-II Uraki sensei
August 5 (Mon.)	IS-5
August 6 (Tue.)	No class

IS-4: Room 4, basement floor, Yoshida International House 吉田国際交流会館 地下 講義室4

Room 41, Yoshida-South Campus Building. No.4 吉田南4号館 4階 41講義室

IS-5: Room 5, basement floor, Yoshida International House 吉田国際交流会館 地下 講義室5

科目名 Title	にほんご じょうきゅう 日本語 上 級 Japanese Advanced		こうし 講師 Instructor	しらかた よし か 白方 佳果 (Shirakata, Yoshika)
〔授業の進め方 Contents of the class〕				
かい 回	がっぴ ようび 月日 (曜日) Date	じげん 時 限 Time	じゅぎょうないよう 授 業 内 容 Contents of the class	びこう 備考 Notes
	きょうしつ 教室 Classroom			
1	7 月 27 日(土) Jul.27 (Sat.) IS-3	10:30- 12:30	ガイダンス 京都に関する文章 を読む①	
	2	7 月 29 日(月) Jul.29(Mon.) Seminer Room 4, B1F, Yoshida-South Campus Bldg. 1	10:30- 12:30	京都に関する文章 を読む② 京都に関する文章 を読む③
3		7 月 31 日(水) Jul.31(Wed.) Seminar Room 24, 2F, ILAS Bldg.	10:30- 12:30	京都に関する文章 を読む④ 京都を舞台にした文学作品を味わう①
	4	8 月 1 日(木) Aug.1(Thur.) Seminar Room 21, 2F, ILAS Bldg.	10:30- 12:30	京都を舞台にした文学作品を味わう② 京都を舞台にした文学作品を味わう③
5		8 月 3 日(土) Aug.3(Sat.) IS-6	10:30- 12:30	京都を舞台にした文学作品を味わう④ 京都を舞台にした文学作品を味わう⑤
	〔教科書 Textbook〕 ひつよう しりょう はいふ 必要な資料を配布する。 Teaching materials will be provided.			
〔その他の注意 Miscellaneous〕 採点基準は一回目の授業で知らせます。 受講者の理解度・授業進度によって、授業内容を多少変更する場合があります。				
〔京大生に求めること〕 1. 「京都の大学に通う大学生」という立場から、自分の経験や感想について述べること。 2. グループワークに参加し、留学生とコミュニケーションを取ること。 3. 留学生からの質問に、可能な範囲で答えること (特別な知識は必要としません)。				

Schedule

10:30-12:30	Advanced Shirakata sensei
July 27 (Sat.)	IS-3
July 29 (Mon.)	Seminer Room 4, B1F, Yoshida-South Campus Bldg. 1
July 31 (Wed.)	Seminar Room 24, 2F, ILAS Bldg.
August 1 (Thu.)	Seminar Room 21, 2F, ILAS Bldg.
August 3 (Sat.)	IS-6

15:45-17:45	Advanced Shirakata sensei
August 5 (Mon.)	No class
August 6 (Tue.)	No class

IS-3: Room 3, basement floor, Yoshida International House よしだ こくさいこうりゅうかいかん 吉田国際交流会館 ちか 地下 こうぎしつ 講義室3

Seminer Room 4, B1F, Yoshida-South Campus Bldg.1 よしだみなみ ごうかん 吉田南1号館 ちか 地下 えんしゅうしつ 演習室4

Seminar Room 24, 2F, ILAS Bldg. こくさいこうとうきょういくいんとう 国際高等教育院棟 かい 2階 えんしゅうしつ 演習室24

Seminar Room 21, 2F, ILAS Bldg. こくさいこうとうきょういくいんとう 国際高等教育院棟 かい 2階 えんしゅうしつ 演習室21

IS-6: Room 6, basement floor, Yoshida International House よしだ こくさいこうりゅうかいかん 吉田国際交流会館 ちか 地下 こうぎしつ 講義室6

フィールドトリップの様子



Cultural Experience



ILAS
友禅染体験



ILAS
盆踊り

ILAS
英語落語



KUASU
友禅染体験



KUASU
茶道体験

前期集中講義

京都サマープログラム 2024

受講生募集要項

開催日程：2024 年 7 月 27 日（土）～8 月 9 日（金）

受講必須の事前授業が 6 月下旬、7 月上旬に各 1 回ずつ予定されています。

（海外学生は 7 月 25 日よりプログラム開始）

科目名	多文化教養演習：見・聞・知@京都 受容から発信へ （本学 学部生、大学院生 対象）
Course Title	Seminar for multicultural studies: Watch, Listen and Learn @Kyoto -From Accepting Various Cultures to Transmitting Your Own
群	キャリア形成科目群
分野	多文化理解分野
使用言語	英語及び日本語
単位数	2 単位
週コマ数	その他
授業形態	ゼミナール
開講期	2024 年前期集中
曜時限	その他
配当学年	全回生
対象学生	全学部
受講料	無料 Fieldtrip、Cultural Experience にかかる参加費・交通費は個人負担

プログラム紹介

Introduction of this program

本プログラムは京都大学協定校の海外学生と本学学生の共学を軸としたサマープログラムです。毎年世界トップレベルの学生と本学学生が共に本学の学風および先端研究に触れ、日本の文化、社会、科学、環境問題などを学び、理解する機会を設けています。また、本プログラムへの参加を通じて、本学学生はさらなる国際的活動への礎を築くことを目的としています。

プログラム期間は試験期間、フィードバック期間と重複しますが、活動を選択して参加することが可能です。

13 回目の開催となる本年度は対面形式で実施し、修了者には 2 単位が付与されます。本プログラムに参加する受講生を募集します。世界の学生と共に国際的な学びを作り上げていける、意欲ある学生の応募をお待ちしています。

プログラム構成 Program Configuration

学術講義	共学を軸として学際的なプログラムを象徴する講義群を提供します。
日本語教授実習準備・実習	日本語教授に関する準備講座を受講後、海外学生が学ぶ日本語学習科目において日本語教授実習を行います。
共同学習、討論会、最終発表	海外学生との共同学習を通して準備を行い、様々なテーマについて討論会を行います。
実地研修、文化体験	地元企業や各種組織の協力を得て、実体験に基づいて学術講義で学んだ点を確認し、日本文化、社会状況、日本的組織の特徴等への理解を深めます。

海外学生は二つのサブプログラムに分かれます。

■ ILAS プログラム（主に英語使用。東アジア+欧米地域大学生等対象）

■ KUASU プログラム（主に日本語使用。日本語を学習する（アセアン諸国+北米地域）大学生等対象）

本学学生はサブプログラム毎には分かれませんが、活動によっては ILAS/KUASU をそれぞれ選択することができます。

■ ILAS・KUASU 共同実施セッション ■

- KU Introduction
- 海外学生と日本語で話そう
- Academic Lectures
- Japanese Teaching Practice
- Graduate School/ Lab Visit
- Completion Ceremony
- Farewell Party

■ ILAS・KUASU 選択可能セッション ■

- Fieldtrip（同一内容・別行動）
- Cultural Experience（別内容・同時刻開催）
- Final Presentation（別内容・同時刻開催）
- ILAS のみ開催 □
 - Discussion in English（KUASU 発表準備と同時刻開催）
 - Discussion Sessions among Students（英語）
- KUASU のみ開催 □
 - 発表準備（ILAS Discussion in English と同時刻開催）
 - Discussion Session among Students（日本語）
 - Preparation for Presentation

[illegible]

	必修活動名	必修 session 数 (相当時間数)	40 時間 カウント
事前授業	本学学生向けオリエンテーション	1 (1h)	○
	日本語教授準備講座	1 (1h)	○
プログラム中	学術講義 (Academic Lecture)	8 (16h)	○
	大学紹介 (KU Introduction)	1 (1 h)	○
	Discussion Session among Students	1 (3h)	○
	Final Presentation	1 (3h)	○
必修 session 数 13 (相当時間 25h)			

③2024年7月9日(火) 12:10-13:05

– 64 –

応募について Application Procedures

- プログラム期間** : 2024 年 7 月 27 日 (土) ～2024 年 8 月 9 日 (金)
受講必須の事前授業が 6 月下旬、7 月上旬に各 1 回予定されています。
- 募集人数** : 京都大学に在籍する正規学部生、大学院生 35 人
(申込人数が上限に達した場合は選考(書類選考の後、面接)を行います。)
- 締切** : 2024 年 6 月 10 日 (月) 正午
- 成績評価の方法・観点** : 出席・参加態度 30%
小レポート 10% (日本語教授準備講座・Japanese Teaching Practice または Fieldtrip・Cultural Experience 等から選択)
討論会への貢献 30%
最終レポート 30%
上記の必修活動(25 時間)を含む合計 40 時間以上の参加が確認できた学生を評価対象とします。従って自由選択は最低 15 時間です。
- 受講申込み** : 以下の Google form より行ってください。
- 受講申込み「京都サマープログラム 2024」
<https://forms.gle/dJ9xh5ie3d6cr1zTA>
- 
- 語学力について** : 講義等は原則英語で行われますが、英語力は問いません。
海外学生に対する日本語教育実習がありますので、日本語を母語とする方、または日本語能力試験 N2 相当以上の方に限ります。
- プログラム紹介** : プログラムの魅力をお伝えするプログラム紹介を開催します。
5 月 20 日 (月) 12:10-13:00 / 6 月 6 日 (木) 12:10-13:00 (両日同一内容)
ハイブリット開催(教室会場、Zoom から参加が可能です。)
教室会場: 吉田南国際交流会館 地階 講義室 5
Zoom URL : <https://x.gd/5HMP4>
※プログラム紹介に参加していなくても、申込可能です。
- 本件問合せ** : 京都大学 京都サマープログラム事務局 (問い合わせのみ。申込先ではありません。)
kyoto_summer@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
- 主催** : 京都大学国際高等教育院 (ILAS: Institute for Liberal Arts and Sciences)
京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU: Kyoto University Asian Studies Unit)

プログラム紹介 開催決定！

2日とも同一内容です。

日時 ~~5月20日（月）12:10-13:00~~

6月 6日（木）12:10-13:00

場所 吉田南国際交流会館B1階 講義室5
Zoom、教室会場から参加が可能です。

ZoomURL: <https://x.gd/5HMP4>

※説明会に参加していなくても申込可能です。

留学したい、
世界を知りたい、
日本を理解したい、挑戦したい、
その第一歩となるプログラム

京都サマープログラム2024 受講生募集

選択参加制（一部必修活動を含む）・2単位付与・無料

開催期間

2024.7.27（土）— 8.9（金）14日間 [対面実施]

プログラム期間が試験期間・フィードバック期間と重なっていますが、活動を選択して参加が可能です。

プログラム内容

1. 多彩な講義群
2. 世界トップ大学の学生との学び
3. 日本語教授実習
4. フィールドトリップ、文化体験 等

○環境、世界情勢、日本の歴史と文化...その道の第一人者から、世界と、世界の中の日本を知る、多彩な講義が提供されます。

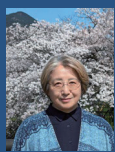
2024年度講師予定者例（全12科目）



石川 冬木氏

京都大学副学長 学術研究展開センター長 名誉教授

[Why are we destined to senescence? An approach from chromosome telomere biology
(なぜ私たちの寿命は有限なのか — 染色体テロメアからの考察)]



落合 恵美子氏

京都産業大学現代社会学部教授 京都大学名誉教授 京都大学アジア研究教育ユニット初代ユニット長

[Representations of Women in Japan in the Latter Half of the 20th Century
(20世紀後半の日本における女性像の変遷)]



山本 真也氏

京都大学高等研究院・京都大学野生動物研究センター准教授

[Exploring "humanity" by comparative studies with animals
(「ヒトとは何か」を探る動物研究)]



○世界の15を超える国と地域のトップ大学から、50名近い学生が参加。京大受講生はプログラム内の講義やディスカッションに参加する他、海外学生を対象とした日本語学習科目において日本語教授実習を行ったり、共同学習や実地研修、文化体験を海外学生と共にします。

海外参加大学例

【東アジア】北京大学、国立台湾大学、香港中文大学、延世大学校

【北米】カリフォルニア大学サンディエゴ校、ジョージ・ワシントン大学、フロリダ大学

【欧州】ウィーン大学、ハイデルベルク大学、パルセロナ大学

【ASEAN】インドネシア大学、チュラロンコーン大学、ベトナム国家大学ハノイ校

募集概要

京都大学からの受講生を募集中です。詳細はサマープログラムHPをご確認ください。

<https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/for-internal/summer-spring-program-for-internal>

英語力は不問です。申し込みは右記Google Formから受け付けます。

締切

2024年6月10日(月) 正午

受講申込み「京都サマープログラム2024」→

<https://forms.gle/dJ9xh5ie3d6cr1zTA>



主催：京都大学国際高等教育院/京都大学アジア研究教育ユニット

第一部
京都サマープログラム 2024
(ILAS)

《主催》



京都大学
国際高等教育院

《共催》



KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT
京都大学アジア研究教育ユニット

8. 京都サマープログラム 2024(ILAS プログラム)

8.1 設立の経緯と目的

今年度(2024 年度)、本プログラムは 13 回目の実施を迎えた。特別枠である北京大学、香港中文大学、国立台湾大学、延世大学校、バルセロナ大学、ウィーン大学、ハイデルベルク大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校、フロリダ大学、合計 9 大学より選抜された 27 名と、個人応募枠としてキングスカレッジロンドン、ニューキャッスル大学、ブリストル大学、ワーウィック大学、香港大学、チャールズダーウィン大学、エラスムス大学ロッテルダムの 7 名が参加し、計 34 名を短期交流学生として受け入れた。同時開催の KUASU プログラムでは 6 大学より 16 名を受け入れており、合わせて 18 大学より 50 名の参加となった。

本プログラムは例年、夏に開催されてきたが、2020 年度は新型コロナウィルスの影響で開催期間を 2 月に移動し、京都スプリングプログラムとして、オンラインで開催した。2、3 回目の開催となる 2021~2022 年度は従来通り夏に開催し、オンラインプログラムの利点を活かして、京都大学からの受講生という枠を引き続き設けた。今年度は昨年度に引き続き、対面開催が実現した。本学学生 55 名(内、受講生 40 名、ILAS 学生リーダー 8 名、KUASU 学生リーダー 7 名)が参加した。以下、本来の本プログラムの設立の経緯と目的を今一度省み、検証の一助としたい。

本プログラムは、前身の北京大学学生のための「京都サマースクール」(2012 年開始)が学生 15 名を受け入れたことに遡る。当初、担当者らには次の問題意識があった。「日本と中国は、歴史的・文化的に深く交流してきた大切な隣国であるとともに、経済的にも補完し合う相互依存度の高い関係を築いてきた。しかし、近年は政治的な影響から双方の国民感情は悪化の一途を辿っているといえる。・・・(中略)・・・その根底には日中の人的な相互交流が十分に行われず、互いの差異への理解の乏しさ、対話の基礎となる、国を超えた個々人の信頼関係の希薄さが見え隠れする。一方で、隣国である日本に対する関心は必ずしも低いものではない。本稿の報告者らが中国のトップ大学で行った調査においても、日本留学に関心を持つ学生が一定数存在することが分かっている。しかし、彼らの多くは奨学金、学費、言葉などの問題から、最終的に日本への長期留学を選択肢から外してしまうことが多い[原文注：韓立友・河合淳子(2012)「日本の大学における留学生受入れ体制の問題点及び解決策の探索：京都大学におけるアドミッション支援オフィス導入の背景と効果」『京都大学国際交流センター論攷』第 2 号：37-55.]。こうした現状から、両国関係を永く維持・発展させるために、将来を担う中国の若い世代に少しでも日本の実像に関する理解を深めてもらいたいと考え、まずは短期受入れプログラムを実施するようになった」⁴。上記の引用に見られる状況は、一時の政治的関係に左右されない、人的な相互交流の必要性そして個々人の信頼関係の構築の重要性を示している。そのような中で、2019 年度までの本取組(第 1 回~第 4 回北京大学サマープログラム、規模を拡大し改称して実施した第 5 回~第 8 回「京都サマープログラム」)は大きな成功を収めてきた。参加学生たちは、日本への理解を深めると共に、ソーシャルネットワークキングサービス(SNS)等を通じて、周りの人々にもその情報を発信し、参加学生や彼らの情報に触れた学生の中から、日本への長期留学を志す学生が出てきていた。

⁴ SEND プログラム 2015 年度受入実施報告書「京都サマープログラム二〇一五」p.6.

その後、より充実したプログラムを実現すべく、2016 年から募集先を拡大し、北京大学と同じく大学間学生交流協定校である延世大学校(韓国)、国立台湾大学、香港中文大学の計4校を対象大学とした。2018 年には、東アジアから全世界に範囲を拡大する端緒として、ドイツのハイデルベルク大学を対象校に加え、初めて2名の学生を東アジア以外から受け入れた。2019 年度はハイデルベルク大学の事情によって派遣学生の推薦が行われなかったため、本学のドイツの協定校に対して本学の欧州拠点を紹介して参加者を募り、ゲッティンゲン大学、ミュンヘン工科大学、ボン大学からの参加を得た。そして2020 年度春に4大学—ジョージ・ワシントン大学2名、カリフォルニア大学サンディエゴ校5名(ILAS2名、KUASU3名)、タイ・マヒドン大学5名、ウィーン大学2名—を迎えることができた。北米にはこれまで拡大できていなかったが、北米拠点の尽力によりこれが実現した。また、ウィーン大学は2019 年10月に戦略的パートナーシップ⁵を締結した大学であり、学部レベルから研究者まで交流の一層の活性化が望まれている。当プログラムは、戦略的パートナーシップの包括的な交流の基礎ともいえる学生交流を担うプログラムとしての役割を果たしたいと考え、前回からの受け入れとなった。また、タイ・マヒドン大学は数年前に本学学生約20名を派遣したが、先方からの受け入れが実現していなかった。双方向交流の準備として2020 年度のスプリングプログラムから5名の学生を受け入れた。2021 年度は新規大学として欧州2校、アフリカ2校、KCJS 加盟大学の4大学が参加、合計16大学より選抜された48名を短期交流学生として受け入れた。2022 年度はさらに、カールスルーエ工科大学、フロリダ大学、スタンフォード大学から学生を受け入れたほか、新たに個人応募枠を設け、インド工科大学グワハチ校、トロント大学からの学生参加があった。第1回から第12回の今年度まで、ILAS プログラムに参加した海外学生は合計321名にのぼる。

当プログラムでは、多様な文化的背景を持つ学生が集うことにより、海外学生はもちろんのこと、本学学生にとってもより豊かな教育環境の実現を目指している。このことは、将来、京都大学が国際的な短期留学の拠点、ないしはアジアの文化、社会に通じ、その発展に寄与できる人材の育成拠点としての存在感を高めることにも繋がると考えるためである。2021 年度より、これまでサポーターに限られていた本学学生の参加を、受講生枠を設けたことで、より一層促進することができた。なお、オンラインプログラム時は本学受講生の人数制限を設けなかったが、今年度は40名とし、選拔を行った。また、本プログラムの特徴の一つに、地域との連携がある。第一回プログラム開始前の2011年に京都府に対し、短期留学生受け入れ事業を京都大学と協働で行うプログラムの提案を行った。こうした経験から、地域との緊密な協力体制は、本プログラムに「京都ならではの」の要素を加える非常に重要なものであると捉えてきた。

3回にわたるオンラインプログラムを成功裏に挙行し、今年度の対面開催に復帰することが出来たのは、以上に述べたこれまで培ってきた各大学とのネットワークと、プログラム実施に係る経験があったためである。

⁵ 戦略的パートナーシップとは、京都大学の大学間学術交流協定校の中から、これまでの研究交流のさらなる活性化に加え、新たな学術分野での共同研究や人材の流動性の促進等を目指して両大学の連携の強化を学長レベルで約束して締結されるものである。本学は2019 年10月に、ウィーン大学とボルドー大学と戦略的パートナーシップを締結している。

8.2 ILAS プログラムの特徴

前述の通り、京都サマー/スプリングプログラムでは、2つのサブプログラム(ILAS プログラムと KUASU プログラム)を共同で実施してきた。多くの共通部分があるが、ここでは ILAS プログラムに特徴的な点について述べる。それらは、(1) 理系を含む多様な専門分野の学生の受入れ、(2) 教授言語が英語であること(3) 最終プレゼンテーション(個人発表)(4) 学生交流である。

まず(1) についてであるが、ILAS プログラムでは、海外学生の出身国・地域や専門分野の多様性を確保することに努めている。募集要項には、日本語・日本学専攻以外の学生、日本への留学経験がない学生、日本語学習経験がない学生を優先する旨、明記している。また(2) の通り、設立当初より教授言語は英語である。(1) とも関係するが、英語でプログラムを実施することで、これまで日本に留学する機会がなかった、あるいは日本留学を深く考えることのなかった世界のトップ大学の学生に、それへの関心を喚起するためである。結果的に(1)(2) により、多様な背景を持つ学生の受入れにつながっていると評価している。

また(3) 最終プレゼンテーションは、グループで行う KUASU プログラムとは異なり、個人での発表となる。各学生がプログラムの中で学んだことのうちに関心を持った題材について、本学学生との議論や個々で文献調査などを行い、理解の深化に努め、それを発表するスタイルをとっている。今年度のプログラムにおける発表タイトルは以下のとおりである。(発表順)

KSPNo.	ニックネーム	大学	Final presentation title
201	Michelle	King's College London (KCL)	Celestial imagery in Romeo and Juliet
202	Amelia	Newcastle University	The Cognitive Abilities of Crows
203	Emily	University of Bristol	Bon Odori: cultural traditions and how they relate to intergenerational relationships & communication: a comparison between Japan and the UK
204	Ironman	University of Warwick	How Japanese Tea ties into sustainability
208	Joe	University of Hong Kong	The meaning(s) of failures: some reflections on Japan's high school sports culture
209	Amadeus	Charles Darwin University	Exploring innovations through entrepreneurship
210	Kai	Erasmus University Rotterdam	Seishun: The Conceptualisation of Youth
101	Radon	Peking University	Special museum designs for education

102	Alex	Peking University	Kyoto Summer: A travel of Knowledge, Culture and Natural Scenery
103	KvQ	Peking University	Path to Gender Equality in Education: Special Quota and Scholarship
104	Patrick	Peking University	The stories of Japan's semiconductor industry
105	Minami	Peking University	Differences and Similarities between Chinese and Japanese Temples
106	Jasmine	Chinese University of Hong Kong	Exploration of Japanese Culture through Temples and Shrines
107	Darian	Chinese University of Hong Kong	Comparing societal orientations on food taboos in Hong Kong and Japan
108	Pauline	Chinese University of Hong Kong	The Revival of Old Tradition, The Mission of New Era
109	Jimmy	Chinese University of Hong Kong	The academic insight for history students
110	Jenny	Chinese University of Hong Kong	Kyoto: Traveling or Living
111	Yejin	Yonsei University	Sustainable food production and Kyoto
112	Yunha	Yonsei University	The Ripple Effects of Gender Bias
113	Watermelon	Yonsei University	Unique Identity, Bright Future of Kyoto
115	Jacqueline	Yonsei University	Contemporary Japanese Writer: Murakami Haruki
116	Jennifer	National Taiwan University	KSP2024
117	Elena	National Taiwan University	The style of living in Kyoto and Taipei
118	Randy	National Taiwan University	The exploration of humanity.
119	Moritz	Heidelberg University	Medaka (<i>Oryzias latipes</i>)
120	Renni	Heidelberg University	The BAUMKUCHEN - and how it came to Japan
121	Tim	University of Vienna	Political Economy of Japan: Incentivizing Research and Development

122	Elza	University of Vienna	Vegetarianism in Japan (Referring to Lecture Food Safety by Professor Kondo)
123	Nano	Universitat de Barcelona	The Art of Yuzen: Tradition and Technique in Japanese Textile Painting
125	Allen	Universitat de Barcelona	Yen Carry Trade since the Lost Decade
127	Tyler	University of California, San Diego	American Individualism, Japanese Collectivism & Transportation
128	MidnightFerret	University of Florida	Cultural experience - Bon odori dance

最後に(4)の学生同士の交流についてである。プログラムの柱の一つとして学生同士の議論の機会、特にできる限り対面に近い環境で密度の濃いコミュニケーションの場を提供することを重視しているのは ILAS プログラムも KUASU プログラムも同じである。KUASU プログラムは、本学学生と海外学生が日本語で共同発表を行うという目標があり、それに向かって準備する機会が重要な位置を占めているが、ILAS プログラムでは、主に Discussion in English を通じ、インフォーマルにもフォーマルにも、対話と議論の機会を毎日提供している。今年度も、このインフォーマルな議論の部分を、教員の指導の下、学生リーダーが中心となって企画・運営を行う体制をとった。8名の学生リーダーが分担し、40名の本学学生の協力を促しながら、連日活気のある活動を展開した。

Final Report

Radon

KSP Number: 101

Peking University

1. General impression about the program

This project is the activity I look forward to most this summer! During the two weeks I spent in Kyoto, I took classes and went out with students from all over the world, as well as teachers and students from Kyoto University, and gained valuable friendships.

The Japanese class was the one that I gained the most from. I was assigned to the Intermediate 1 class. The teacher in charge, Shimohashi-sensei, was very serious and responsible, and would take care of everyone's progress. There were also many conversation exercises with Kyoto University students in each class, which was very helpful for improving my oral level. The speech in the last few classes also benefited me a lot. After class, I also had a lot of exchanges with Kyoto University students I met in Japanese class. Everyone was very enthusiastic and touched me.

I learned so much from each lecture; they were truly enlightening experiences that expanded my understanding in profound ways. The topics covered were incredibly diverse, touching on various aspects of human existence and the world around us. From the intricate nuances of culture to the complex structures of society, the lectures explored a wide-ranging collection of ideas and themes.

Specially, I was very happy during the field trip and cultural experience. Under the guidance of Kyoto University, I experienced things that are difficult to experience when traveling by myself. Especially the English Rakugo, I have heard of rakugo in animations before, and I have always wanted to hear a real performance. Even though the language used was English, the content of the joke was still conveyed very well and I enjoyed listening to it. I really hope to master Japanese as soon as possible so that I can enjoy the original rakugo.

In conclusion, I am very grateful to Kyoto University for hosting this program, and I think it will become a precious memory that I will never forget in my life.

2. Special Museum Designs for Education

The topic is inspired by The Field Trip. At Lake Biwa museum, I saw many elementary school students visiting the museum. They all showed great interest, which was different from what I have seen in many museums in other countries. So, I want to figure out that how to attract students in the museum and how to educate them.

First, in Lake Biwa Museum. There is a room called "discovery room" for kids to discover something themselves. It provides numerous hand-on activities using the senses designed to provide diverse ways to explore the local nature and culture. Through hands-on experience, children can have a clearer understanding of nature.

I also went to the Kanji Museum during my free day, although it is not included in the ILAS schedule. At the Kanji Museum, you will be given a booklet upon admission, which contains some information about the exhibition. You need to complete these tasks through the layout of the

exhibition hall. I think this is a very interesting design. Also, on the second floor of the Kanji Museum, there are many interactive games. It let people play, learn, and have fun.

At Nara National Museum, I saw an interesting exhibition called "The Wonders of Japan's Gods and Goddesses". This exhibition introduces ways that Japanese have viewed and worshipped their deities through the generations, revealing the wonders of such art and beauty, through hands-on learning experiences for visitors of all ages. When you enter the door, you will still be given a booklet to complete the questions on it by reading the descriptions of the exhibits. At the exit, the staff will also score you. This exhibition is designed specifically for children, but adults can also gain a lot from it.

In my country China, museums are always professional. The introductions are always difficult for students to read. I think it's better to have more easier introductions for kids to read. To conclusion, I think there are many ways to attract kids in the museum. It is very good for education and I want to be aware of it.

Final Report

Alex

KSP Number: 102

Peking University

General impression:

My journey in Kyoto and in Japan is a magic travel of knowledge, culture and natural scenery.

First and foremost, this is a travel full of knowledge. I have learn more about social and natural sciences, humanities and Japanese language. In these courses, I learned the basics of Japanese, including pronunciation, grammar, and common phrases. I also gained insights into the scientific research methods and key achievements at Kyoto University. Additionally, I explored Japanese literature, Buddhism, and anthropology, which enriched my understanding significantly. Through these lectures, I have a deeper understanding in Japanese culture, science and technologies.

Secondly, this is also a travel of culture. As we all know, Kyoto is a city full of temples and shrines. Japanese Buddhism originate from Chinese dynasty Tang and has a long history. I visited 4 famous temples: Sanzen-in, Kinkakuji, Kyomizu-dera in Kyoto and Todaijitemple in Nara. I'm shocked about these grand ancient architecture and exquisite Buddha. I also visited Kifune Shrine, there are so many beautiful lamps. They are magnificent in the evening. Delicious food is also an important part of culture. I have tasted various Japanese traditional food such as Katsudon, omelette, Udonnoodles, Sushi and Ramen. There are also some delicious parfaits in Japan. These foods are also a reflection of Japanese culture. In addition, I visited thisfamous Ukiyoe in Osaka and tried YUZEN dyeing. These cultural experience expand my horizon.

Finally, this is also a travel of natural scenery. I visited the beautiful Biwa lake and Biwa lake museum. In Nara, there are so many cute deers every where. We can also take a walk along the Kamo river or climb the Inari mountain. It is very comfortable to contact with the nature.

In summary, I gained a lot from KSP 2024. This is a very precious experience.

Topic

Among these lectures, I have a great interest in Japanese economy, particularly the decades-long period marked by economic stagnation and recession. The root causes of this phenomenon are multifaceted and complex, intertwined with domestic policies, demographic shifts, and global economic trends.

One of the primary reasons for Japan's economic decline lies in its 'lost decades' following the burst of the asset price bubble in the late 1980s. This led to a prolonged period of deflation, where prices consistently fell, dampening consumer spending and investment. Coupled with high levels of corporate debt and an inflexible labor market, businesses struggled to grow and create jobs, perpetuating the slowdown.

Demographic changes, notably an aging population and declining birth rates, also played a significant role. As the working-age population shrunk, the burden on social security and healthcare systems increased, while consumption declined due to a smaller and more conservative consumer base. This demographic shift challenged Japan's traditional growth model reliant on mass production and consumption.

In response, the Japanese government implemented a series of policies aimed at revitalizing the economy. These included monetary easing measures by the Bank of Japan to stimulate lending and increase liquidity, as well as fiscal stimulus packages to boost public spending and infrastructure investment. Additionally, structural reforms were undertaken to address rigidities in the labor market and corporate sector, aiming to enhance productivity and competitiveness.

More recently, Japan has focused on promoting innovation and technological advancements, fostering startups and encouraging foreign direct investment. The 'Abenomics' policies introduced by Prime Minister Shinzo Abe emphasized monetary easing, fiscal stimulus, and structural reforms collectively known as the 'three arrows' strategy, aimed at ending deflation and restoring economic growth.

While progress has been made, Japan's economic challenges remain formidable. Overcoming the inertia of decades of stagnation requires continued commitment to reform, adaptation to demographic realities, and fostering a dynamic, innovation-driven economy.

Final Report

KvQ

KSP Number: 103

Peking University

1. General impression about the program

In the course of the 16-day Kyoto Summer Program, I've learned a lot from various and abundant courses, the most important one being the Japanese Elementary Course. With the 10-hour long course and revision after class, I've *to some degree* mastered the very basics of frequently-used sentences in daily life, got more familiar with hiragana and katakana, and known how to count, etc. Despite being incapable of having conversations with any Japanese speaker as of now, I can have an educated guess on broadcasts. Another part is the academic lectures, served as a platform on which I found my interest in gender issues and wished to do research incorporating feminism and economics (if there's any topic worth discussing). Linguistics is another field that I am into, and the lecture related introduced me to phenomena in Japanese wording and translating, intriguing me. Comments on some other lectures – the first lecture on foreign affairs had its contents set too professional, and made audiences hard to catch up and *slleeeeeeeepy*; the following one about Japan's lost decades, on the other hand, spent too much time on students' s discussion in groups, thus lacking detailed explanation on the issue itself. Better lectures were expected.

Activities not moderated by professors amazed me a lot. I found myself enjoying several cultural activities, from Yuzen Dyeing to English Rakugo; the field trip to Omihachiman and Lake Biwa enabled me to learn Japan from different perspectives; every discussion in English provided me with new issues to focus on and different perspectives to analyze & solve them. Last but not by importance, off-list events directly organized by student leaders always surprised me, notifying me there were more things to explore regarding the Kyoto city and Japanese culture.

In conclusion, I've had a deeper insight into cutting-edge academic topics and Japan itself, thanks to the resources provided by Kyoto University and the hard work of Kyoto-U students. My scholarly interests got clearer and I regained interest in research on economic-relevant topics. I'm more aware of Japanese culture's uniqueness, its similarities, connections and differentiation to Chinese culture. I'd be very pleased to say, that my horizons are truly broadened, and the whole experience is unforgettable.

2. Gender Quotas in University Entrance Exam in Japan

I was stricken to know that there would be a special entrance exam for female applicants wishing to engage in STEM studies at Kyoto University, starting from 2026, at the *Discussion in English: Gender Issues*. I became interested in topics about gender equality recently, including feminism and the rights of LGBTQ+ people; disparities, of all kinds, are an important issue discussed in economics. Another thing is that setting gender quotas in education is uncommon worldwide, since not so many precedents existed to my knowledge.

I was informed by Google that despite being “strange” to most foreigners, setting special exams for female students is becoming a trend in Japan. As of now, 33 universities in Japan have introduced similar exams to get more excellent female students, with Tokyo Institute of Technology among them. Most of them started doing this in recent years, namely 2023 and 2024, due to the new suggestion of ensuring diversity in universities mentioned by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology in 2022.

There is no sufficient data or research to prove that this works *quite* well in Japan, however a satisfying effect is expected (and witnessed, in a few universities that have implemented the special quotas for years). Acts to alleviate disparities between the majorities and the minorities by directly giving incentives to the less represented, first proposed and implemented in the United States, are called “affirmative actions” and are proved to be useful in helping people get access to education. Ratio-quotas implemented in the United States and gender quotas implemented in Afghanistan are two of the cases.

It's not possible to answer any of the following questions due to limited data, time and research, but I'm interested in answers to them and they may be worth discussing:

- How do these affirmative actions affect girls' career paths from secondary school to potential employers;
- How to ensure students are treated equally, whether they are selected by the special exam; and
- For LGBTQ+ people, how their rights in education can be protected.

Final Report

Patrick

KSP Number: 104

Peking University

General impression:

Participating in the summer program at Kyoto University has been an enriching and transformative experience that has left an indelible mark on my understanding of Japanese culture and fostered meaningful connections with both local and international students. From the moment I stepped foot on campus, I was enveloped by a sense of intellectual curiosity and cultural immersion that is unique to this prestigious institution.

Kyoto, being a city steeped in history and tradition, served as the perfect backdrop for delving into the nuances of Japanese culture. The program thoughtfully curated a blend of academic lectures, cultural excursions, and hands-on workshops that allowed me to gain a holistic view of the country's heritage, contemporary society, and its place in the global context. The lectures, delivered by esteemed professors and experts, not only expanded my knowledge base but also sparked debates and discussions that challenged my preconceived notions.

One of the highlights of the program was the opportunity to engage in in-depth conversations with students from diverse backgrounds. The international cohort brought a wealth of perspectives

and experiences, fostering an environment conducive to cultural exchange and mutual learning. Meanwhile, interacting with local students provided invaluable insights into the daily life and mindset of young Japanese people. These interactions transcended linguistic barriers, fostering friendships that I believe will endure beyond the program's duration.

The cultural excursions were particularly memorable. From visiting ancient temples and shrines that encapsulate Kyoto's spiritual essence to participating in traditional arts and crafts workshops, every activity was a testament to Japan's rich cultural heritage. These experiences not only enriched my sensory palette but also deepened my appreciation for the intricate details and meticulous craftsmanship that characterize Japanese aesthetics.

Moreover, the program emphasized the importance of community building and personal growth. Group projects and collaborative tasks encouraged us to work together, fostering teamwork skills and a sense of camaraderie. The supportive environment created by the faculty and staff ensured that everyone felt included and empowered to reach their full potential.

In conclusion, my experience at the Kyoto University summer program has been nothing short of extraordinary. It has broadened my horizons, enriched my cultural awareness, and forged lasting relationships. I leave with a deeper understanding of Japan, a renewed sense of curiosity about the world, and a heart full of gratitude for the opportunities this program has presented. I am confident that the lessons learned and memories made will continue to inspire and guide me in my future endeavors.

One specific topic:

After delving into the lecture on Japan's Lost Decades and conducting a focused study on the rise and fall of its semiconductor industry during this period, I have gained profound insights that have not only enriched my understanding of economic history but also sparked a fascination for the intricate interplay between technological advancements, policy decisions, and global market dynamics.

What I Have Learned:

The Lost Decades, spanning roughly from the late 1980s to the early 2000s, marked a significant turning point in Japan's economic trajectory. During this time, the country's once-thriving semiconductor industry, which had dominated global markets in the 1980s, suffered a dramatic decline. Through my studies, I learned that this decline was a multifaceted phenomenon, rooted in a complex interplay of factors.

Initially, Japan's semiconductor sector flourished due to strategic investments, government support, and a culture of innovation that prioritized technological excellence. However, the industry faced challenges in the form of the US-Japan trade frictions, notably the Semiconductor Agreement of 1986 and the Plaza Accord of 1985, which led to the appreciation of the yen and hurt Japanese exports. While these external factors certainly played a role, the decline was also driven by internal factors such as a rigid industrial structure, overreliance on vertically integrated manufacturing models (IDM), and a lack of adaptability to shifting market demands and technological advancements.

Why I Am Interested in This Topic:

My interest in this topic stems from a fascination with the interplay of economics, politics, and technology in shaping global industries. The story of Japan's semiconductor industry serves as a cautionary tale for other economies seeking to compete in high-tech sectors. It highlights the importance of flexibility, adaptability, and strategic decision-making in the face of rapidly evolving market conditions and technological disruptions.

Moreover, the case of Japan's semiconductor decline offers valuable lessons for policymakers and industry leaders worldwide. It underscores the need for a nuanced understanding of global trade dynamics and the potential consequences of protectionist measures. Additionally, it emphasizes the importance of fostering a culture of innovation and continuous improvement, while also being mindful of the risks associated with overreliance on specific technologies or market segments.

Additional Insights and Explorations:

In my exploration of this topic, I discovered several additional insights that deepened my understanding of the phenomenon. Firstly, the Japanese semiconductor industry's decline was not a sudden event but a gradual process that unfolded over several decades. This underscores the importance of recognizing early warning signs and taking proactive measures to address potential challenges.

Secondly, I gained a deeper appreciation for the role of government policies in shaping industrial development. While Japan's government was instrumental in fostering the initial growth of its semiconductor industry, its subsequent policies and interventions may have inadvertently contributed to the industry's decline. This highlights the need for a delicate balance between government support and market forces.

In conclusion, my study of Japan's Lost Decades and the rise and fall of its semiconductor industry has been a rich and rewarding experience. It has not only expanded my knowledge but also sparked a passion for understanding the complex dynamics that shape global industries. The insights gained from this exploration will undoubtedly inform my future studies and professional endeavors.

Final Report

Minami

KSP Number: 105

Peking University

General impression about the program:

I'm very glad to have participated in this program, and even a week after returning to China, I still feel the same way. I've always been interested in Japanese literature and film, but this program marked my first visit to Japan, where I could personally experience Japanese culture and make Japanese friends for the first time. The two weeks of study and life at Kyoto University allowed me to immerse myself in the rich cultural and natural environment here. The diverse Japanese language lectures provided me with a preliminary understanding of the academic research at Kyoto University, and the cultural experience journey gave me firsthand insight into Japanese culture and the

underlying spirit of the Japanese people. What impressed me the most was the lecture on Japan's economy. As an economics major, I found the professor's insightful presentation particularly impactful. After the lecture, I had the opportunity to engage in a more in-depth discussion with the professor, where we exchanged ideas on various economic issues, including some challenges facing China's economy.

After the program ended, if given the opportunity, I would love to return to Kyoto, to once again stroll through this ancient and elegant city, walk down the familiar streets, and if I could meet my friends from Kyoto again, it would be a great blessing. I also hope that my encounters with Kyoto, Kyoto University, and the friends I've made there will be even more fulfilling in the future.

Specific topic: Japanese Temple:

What I Have Learned

Japanese temples are primarily associated with Buddhism, which was introduced to Japan from China via Korea in the 6th century. These temples serve as places of worship, meditation, and community gathering, playing a central role in the spiritual lives of the Japanese people. Over the centuries, Japanese temples have evolved to incorporate various architectural styles and religious practices, reflecting the influences of different Buddhist sects such as Zen, Shingon, and Pure Land Buddhism.

The architecture of Japanese temples is particularly captivating. Temples often feature beautifully crafted wooden structures, intricate carvings, and serene gardens designed to enhance meditation and contemplation. Famous temples like Kyoto's Kinkaku-ji (Golden Pavilion) and Todai-ji in Nara, home to the Great Buddha statue, are exemplary of the grandeur and spiritual ambiance these sacred sites offer.

Reasons for Interest

My interest in Japanese temples stems from a broader fascination with how architecture and religion intersect to create spaces of profound cultural and spiritual significance. Japanese temples, with their blend of natural beauty and human craftsmanship, represent a perfect harmony between nature and spirituality—a concept deeply rooted in Japanese aesthetics and Shinto beliefs.

Moreover, the way Japanese temples have preserved ancient traditions while adapting to modern times intrigues me. For instance, the practice of temple pilgrimages, where people visit a series of temples to earn spiritual merit, continues to be popular today. This continuity of tradition offers insights into the resilience of cultural practices in the face of modernization.

Additional Investigation

To deepen my understanding, I have delved into the history of specific temples and their role in Japanese culture. I have studied the evolution of temple architecture, particularly how it reflects different periods of Japanese history, such as the influence of Chinese Tang Dynasty architecture during the Nara period and the development of unique Japanese styles during the Heian period.

I have also explored the role of temples in Japanese festivals and rituals, such as Obon, where temples play a central role in honoring the spirits of ancestors. Visiting local temples during these festivals has given me firsthand experience of their living cultural significance.

Additionally, I have researched the conservation efforts undertaken to preserve these ancient structures. With many temples being centuries old, understanding the challenges of maintaining their integrity against natural disasters and the passage of time has been an area of significant interest.

Final Report

Jasmine

KSP Number: 106

The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

This 16 day program was an eye-opening and rewarding experience for me. I love that the program provides a perfect balance between academic lessons (such as lectures and Japanese classes) and cultural immersion (such as field trips and cultural experience sessions).

Through the language course, I realized we can learn about a country's culture and history through understanding its language. It surprised me that a lot of Japanese terms have similar pronunciation as English and Chinese equivalents. For example, library in Japanese can be called as 'toshokan' (which is similar to the Chinese term '圖書館') or coffee in Japanese is 'Kōhī' (which is similar to the English term 'coffee'). It is a reflection of how Japanese culture are influenced by Chinese and Western cultures, which blend well with the native Japanese culture to give the Japanese culture we see now.

I attended 8 academic lectures that ranged from a wide variety of topics, including poetry, medicine, religion, and many more. Among them, I am most interested in the lecture related to medicine. The medical lecture is related to telomere length on our chromosomes. I have always known that telomere shortening is one of the contributing factors for aging, and I have also heard about research trying to reverse this in an attempt to lengthen our life spans. But I am not sure about the detailed mechanism causing this to happen. Professor Fuyuki Ishikawa explained the reasons behind in great detail and also talked about how abnormal activity of the telomere is linked to the ability of cancer cells to divide uncontrollably. He also explained the necessity of telomere shortening to normal functioning of the human body. This is an aspect that I have never thought of and his lecture gave me great inspiration to investigate more on this topic myself.

The cultural immersion part also allowed us to learn more about the traditional art and crafts of Japanese culture. For example, by participating in Bon Odori dance, I learnt more about the history and cultural backgrounds of the customs and the summer festivals in Japan.

In addition, the student leaders and other participants from KU are also very friendly and demonstrated great hospitality to all of us. They invited us to a lot of local activities in Kyoto such as playing with Hanabi near the Kamo River, organizing karaoke nights, and bringing us to Shiga Prefecture for the firework festivals. These are definitely wonderful experiences that make my stay here much more wonderful and allow me to know more about the life of a student in Kyoto University.

Overall speaking, I enjoyed this program a lot and it exposed me to a new field that is very different from the contents I was studying in my major – medicine in Hong Kong. It broadened my horizons and I have established friendships with classmates from all over the globe. It is a truly amazing and unforgettable experience.

0. Exploration of Japanese Culture through religions

Temples and shrines are a representation of the 2 largest religions in Japan — Buddhism and Shintoism respectively. During my stay in Kyoto, I visited quite a lot of temples and shrines, and I love the peaceful and religious atmosphere there. In addition, when the student leaders brought us to the summer festival in Nishi-honganji temple, I was amazed by the strong sense of community through the celebrations and I could feel how Japanese people value. Therefore, I would like to explore the Japanese religion and traditions reflected through temples and shrines

I would like to discuss the religious beliefs of Buddhism and Shintoism and how it affects the values of the Japanese. With both being an important religion in both past and present day Japan, Shintoism is a native Japanese religion that originated from Japan, while Buddhism originated from India, next passed to China, then passed to Japan through Korea. The values of these 2 religions reflect the Japanese's culture. Shintoism stressed more on the love and respect for nature, and they worship spirits (known as kami). This reflects how Japanese people value nature. On the other hand, Buddhism sees life as suffering and pain, and they emphasize more on moral codes and ethical conduct. This way of philosophy, together with some other political theories and family values are passed from the Chinese community to Japan. However, instead of competing, they complemented each other. Shintoism was generally flexible about human conduct and focused on life and surroundings. Meanwhile, Buddhism had abundant scripture and rigid ethical code that fill the gaps of areas that Shintoism left vague. The fact that both Kami and Buddhas attach to some shrines and temples showcase the harmonious religious atmosphere in Japan.

In conclusion, religions are a crucial part of Japanese culture. They contribute to shaping the beliefs and cultural values of the Japanese. I hope that these traditions and rituals could be well preserved and passed on to the next generation, and hope that more tourists traveling to Japan can understand these values through their visits to temples and shrines.

Final Report

Darian

KSP Number: 107

Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the programme

In general, I had a good impression on this programme, from the aspects of academics and interpersonal relationship building.

For academics, some lectures have provided me an opportunity to understand topics I had not explored on before. For example, I had never thought about issues such as diplomatic culture and food taboos before, as they are non-existent in Hong Kong. Hong Kong as a Special Administrative Region, it does not have power upon establishing international diplomatic relationships, and there is no concurrent stringent moral debates on food taboos. Therefore it is hard to come across and develop opinion on these issues before. This programme's lectures provided me with the facts and history of these issues, such that I could develop independent and critical opinions on topics.

Also, some lectures provided me with new insights on known topics. For example, the lecture on Japanese literature provided me with new insights on how writers express their feelings based on conditions of celestial objects on specific days of the calendar. For years of reading Japanese literature, I had never picked up this line of thought before. This lecture provided me inspiration on finding and analyzing the hidden meaning in literatures.

For interpersonal relationship building, this programme provided me with ample opportunities to communicate with other participants, hence make new friends with both Japanese students and international participants. In particular, the Japanese language class sessions. Japanese students had taken the role as an educator and introduced their mother language to us, who only had basic understanding on it. Their passion and effort amazed me, hence encouraged me to face these classes seriously. I enjoyed the process of learning, where I could feel me and other international participants got better at this language every session. This created a special bond between us students, hence easier to strike up conversations.

2. Food taboos

I have been particularly interested in the topic of food taboos. Before the lecture 7 on Whaling in Japan, I had never came across this issue, as awareness in Hong Kong upon such is not high. In the lecture we learnt about the underlying anthropological theories of why there are food taboos, food taboos in Japan (whales), history and issues revolving whaling and its industry.

This intrigued me to dig deeper into the topic, trying to find out about the conflicts on whaling. I came across the movie 'The Cove', which was a movie about some westerners capturing the scene of whaling in Taiji village. The scenes were bloody and violent, portraying the evil and empathetic image of the Japanese. However, I think it was too shallow and one-sided, trying to evoke emotions. The movie only pointed out the bloody nature of whaling and health risks of whale meats, but never came to understand why Japanese continue whaling despite international criticism: the history, cultural, and social aspects of whaling. Afterall, most societal problems arise from fixed beliefs of individuals, when they are unwilling to listen and think about the reasons and arguments of the

opposing side, not to mention the underlying history and social issues of the problem. Therefore I tried to further my understanding on this topic by making this the topic of my final presentation, comparing the issue of food taboos in Hong Kong and Japan.

This issue is unique and particularly complex in the context of Japan's society, which could not be found in other societies. This investigation gave me new understanding in the Japanese society, involving concepts of sovereignty, nationalism and moral debates. It also enriched my understanding in Japanese history. I am glad for the opportunity to acknowledge and understand social and cultural issues of Japan through this programme, providing me with the ability to compare, distinguish and find similarities, hence learning in the process.

Final Report

Pauline

KSP Number: 108

The Chinese University of Hong Kong

1. General impression about the program

I would like to express my utmost gratitude to Kyoto University for the invaluable experience I had during my summer exchange program. I feel incredibly fortunate to have created such wonderful memories during this summertime in my life. Since its inception, this program has kept inviting students from various countries and regions around the globe, which, in my view, is one of its greatest strengths and merits.

As a student majoring in history, engaging with friends from diverse backgrounds allowed me to truly appreciate the richness of the multicultural development of recent centuries. I realized that the historical and cultural insights we can glean from personal interactions often rival, if not exceed, those learned from history textbooks.

The summer courses at Kyoto were meticulously designed to integrate multicultural exchanges, with each lecture and extracurricular activity fostering dialogue among global participants. This study environment and atmosphere encouraged us to share our different perspectives and experiences, making it a precious learning opportunity. I believe these interactions not only enhanced my understanding of global history and culture but also broadened my horizons, instilling a deeper appreciation for the nuances of cultural diversity.

On the other hand, during this summer program, the unique cultural exchange experiences left a lasting impression on me. I have always deeply appreciated Japanese culture; however, my exposure has largely been limited to social media portrayals and historical textbooks. I feel incredibly fortunate to have had numerous opportunities to engage with authentic Japanese culture during this program.

One standout experience was the Yuzen dyeing session, where I had the chance to create my own unique piece of Yuzen art. The students from Kyoto University were exceptionally helpful, taking the time to explain the historical and cultural background of Yuzen dyeing in English. This firsthand engagement was infinitely more valuable than any online introduction I had encountered.

Moreover, I found out that students from various regions brought their own distinctive aesthetic perspectives to the activity. As a result, our Yuzen dyeing creations not only reflected the richness of local Japanese artistry but also incorporated elements from diverse global aesthetics. This fusion truly embodied a rare and enriching cultural exchange. The immersive experience of learning and creating alongside fellow international students deepened my understanding of Japan's artistic heritage while demonstrating the beauty of cross-cultural integration.

Overall, my time at Kyoto University was not merely an academic endeavor; it was a transformative journey that highlighted the importance of learning from one another in an increasingly interconnected world. This experience has undoubtedly enriched my personal and academic life, and I will forever cherish the lessons learned and the friendships forged during this remarkable summer.

Final Report

Jimmy

KSP Number: 109

The Chinese University of Hong Kong

General Impression

The wind from the Kamogawa River dissipates the summer heat, and the people and things of Kyoto are like finely brewed matcha, with a lingering sweetness.

"We don't know who discovered water, but we know it wasn't a fish." As a history student, my initial motivation for participating in the overseas program was to use different cultures to reflect on the characteristics of my own. Japanese literature class taught me that Japanese poets excel at capturing the beauty of the fleeting moments of seasonal change, and I also learned that the Japanese language has many more words for the moon than for the sun. Japanese class made me reflect on my own biases towards language. I once thought that Chinese and Japanese were closer to each other than English, but the SVO sentence structure of Chinese and English is actually closer than Japanese SOV. However, the lack of verb tenses in Chinese can be found in Japanese. The three language families give a feeling of "you are in me, and I am in you."

In addition, courses on shogunate diplomacy and whaling culture also inspired me to think about the possibility of applying the same framework to the study of Chinese history. Japan's diplomatic etiquette has long been understood as a product of Western influence, but it actually originates from Japanese tradition. Considering that certain universal values are shared by all humanity, could there

be more elements classified as "Western culture" that actually have roots in our own culture? The whaling culture class provided two frameworks, "cultural structuralism" and "cultural materialism", which can be used to explain more social and moral rules.

More sparks were ignited through interactions with people. Perhaps because of the interdisciplinary and cross-cultural nature of the program, I gained more from conversations with everyone than I did from interactions within the history department circle. Every night, I would chat with my roommates about different topics, from politics, economics, society, philosophy, law, and culture, to interpersonal relationships, education, language, music, childhood, life, and the future. This feeling of being able to talk about anything was very comfortable.

This trip also gave me the opportunity to rediscover and define myself. In class discussions, I tried to break down the topic into two parts and use more abstract frameworks like "necessity" and "feasibility" to summarize classmates' arguments. This should be the result of combining my history's inductive ability with my philosophy's logical analysis ability over the past four years. Later, while having a drink with friends, we concluded that the underlying logic of various humanities disciplines is actually very similar. Put specific materials in, and it becomes the theory of a particular discipline.

Writing a reflection is a process of coloring memories. Years later, when I open my dusty photo album, starting from the first page, I will turn to the Nara deer, the Uji temple, and the photo with the party professor. I will remember the shyness of our first meeting, the struggle between Uber and public transportation before school, the beer in the early morning, and the farewell on the last day.

I hope that when I turn to the last page and see the photo of everyone in front of the clock tower, the camphor tree in my heart will still be green.

The academic insights for history students

This program provides various academic lectures. For history students, it can equipped us with the ability to conduct Interdisciplinary Research.

the lecture about Japanese diplomatic ceremonial showed that studying history is the process of removing stereotypes. It encourages me to reflect if China also has some cultural heritages that was wrongly regarded as the result of the influence of the West. In fact, some human natures such as the pursuit of fairness are shared by all human-beings, no matter what culture you come from. I am curious that if some so-called western value can be found in the Asian history.

And the lecture about Japan's economy encourages us to think like economists. It makes me notice the complicated relationships between the social change and the economy's up and down. For example, The professor asked us to consider how the change in population affects the input of economy, and influences the output consequently. The economist's theory and clear logic could be applied in the history research.

In addition to this, the lecture of Whaling in Japan inspires me to combine history and anthropology. I believe that not only can the cultural-structuralism and cultural-materialism be applied to analysing food taboos in Japan, but also the norm of Confucian throughout Chinese history. Take the filial piety that Confucian emphasis as an instance, if we take the cultural-structuralism approach, we may find that the son's filiality to his parents is similar to the subject's loyal to the king. If we take the cultural- materialism approach, we may find that this type of moral norm can promote the stability among society which is beneficial to the economic growth.

In conclusion, I believe that in the future, if historians want to create a breakthrough in their field, it is necessary to absorb the paradigm from other disciplines. I am looking forward to seeing a more colourful academic world.

Final Report

Jenny

KSP Number: 110

The Chinese University of Hong Kong

1 General impression of the program

I think this summer programme is very good. It gave me a first-hand experience of what it is like to study at Kyoto University in many ways, and I benefited from the exposure and knowledge of different subjects and the unique culture of Japan. In addition, the participation of university students from different universities around the world allowed me to meet more people from different countries and learn about their lives and cultures, which made me a great friend. The most impressive part of the programme was to talk with students from Kyoto University, discussing different issues and "learning through dialogue". I am very grateful to Kyoto University for giving me another opportunity to participate in the summer programme and to learn from it and add value to myself.

2 One specific topic that you have been particularly interested in during this program

When I visit museums in Japan, I always find that most of the exhibitions in the museums in Kyoto are related to Buddhism. In the classroom of Kyoto University, there was a class on Buddhism-related topics, which made me think about the relationship between Buddhism and Japanese society. I learnt about different types of Buddhas and noticed that different gestures of Buddhas mean different things. I think the fact that there are so many Buddhist exhibitions also proves that Buddhism is very important in Japan. But why are there so many exhibitions on Buddhism and so few on shrines? I think there are too many types of shrines and different shrines worship different deities, whereas Buddhism has a more focused target audience.

Final Report

Yeojin

KSP Number: 111

Yonsei University

1. General impression about the program

First of all, I would like to express my gratitude to the professors and staffs who hosted and conducted the program. Thanks to you, I was able to make unforgettable memories in Kyoto. Participating in the Kyoto Summer Program was a remarkable experience. I had the opportunity to interact with students from diverse backgrounds and engage in meaningful discussions. This experience allowed me to broaden my perspective on important global issues. For instance, during a discussion session on AI and technology, I learned about the concerning use of AI to create fake images and videos aimed at politically manipulating public opinion from a group member. It brought a big alert to my optimistic attitude toward the usage of AI and made me put more weight on the dark side of AI.

Additionally, I could attend insightful lectures by distinguished professors from Kyoto University, which deepened my understanding of societal and technological issues. This exposure sparked new interests in areas I had not previously explored, allowing me to connect these topics to my original passion for environmental issues. After participating in the Kyoto Summer Program, I expanded my interest to include sustainable food production and the whaling problem.

The program also offered a rich cultural experience. From daily university life to local festivals and traditional dyeing methods, I connected with Japan's past, present, and future through interactions with Kyoto University students. Their intelligence and openness made me feel Japan more familiar and I miss them now. Thanks to their efforts, I could engage in various cultural activities, for instance, I learned a traditional dance and enjoyed festival foods, creating unforgettable memories.

Moreover, the Japanese language classes were invaluable. Although I initially did not know Japanese, my professor and KU students helped me navigate my daily life in Kyoto and gain a deeper appreciation for Japanese culture. I learned polite ways to communicate and express my thoughts in Japanese, enhancing my overall experience. I hope to learn Japanese more and talk to KU students in fluent Japanese when we meet again someday.

2. Sustainable Food Production

Professor Kondo's lecture on sustainable food production and environmental issues was the most memorable and impressive part of the lectures from the Kyoto Summer Program. Given my existing interest in ecological issues and sustainable development, I had eagerly anticipated his lecture. It exceeded my expectations, despite being my first exposure to the topic of food production. I was impressed by how passionately he delivered his insights and could feel how much he loves and concerns this topic.

The lecture highlighted the urgent need to enhance food production due to the upcoming population growth of two billion. While food distribution involves complex negotiations between countries, which requires a long time, increasing food production is a prior issue to be concerned.

However, Professor Kondo emphasized that the focus should not solely be on producing more food but on improving the efficiency of food utilization. For example, he discussed technologies like using UV light to identify slightly damaged fruits to prevent the spoilage of other produce. This approach is about optimizing the use of food after production rather than simply increasing the quantity harvested. I thought this approach was attractive from the perspective of sustainable food production. Professor Kondo's emphasis on these methods underlines the dual benefits of protecting the environment and increasing food availability since expanding food production is linked to environmental degradation and animal abuse.

Based on this argument, the professor also states the need to decrease the food waste that we make. I deeply agree with his concern and observed a practical solution for this problem at the Kyoto University cafeteria. Compared to Yonsei University, Kyoto University had noticeably less food waste. This difference was partly due to their system, which allows students to select the exact amount of rice and small portions of side dishes they want. Although this system may require additional effort from staff, it is a worthwhile investment to reduce food waste. I hope that more restaurants adopt similar practices, benefiting both the environment and their operations.

Final Report

Yunha

KSP Number: 112

Yonsei University

1. General impression about the program

I am incredibly lucky to have gotten to participate in this program. At first, I didn't know what to expect, because I had never participated in such a program with such internationally diverse participants. I did not know that this would end up being the happiest 2 weeks I would have spent in a very long time. Participating in KSP changed how I viewed and enjoyed the world, and I am immensely thankful for it.

First of all, the people were so kind and genuine. I have never met so many wonderful people at the same time. The professors were very inspiring, showing great passion for the work that they did and possessing a respectable attitude of heartiness and composure, wanting to share with us the beauty of the field they studied. Students from KU were unimaginably kind, and they had especially pure, giving hearts that made them offer the most they could to us. So many KU students have inspired me with their kindness and friendliness, plus curiosity of wanting to know more about us participants and making us feel welcomed. Their passion in their respective majors also surprised me and motivated me to study harder and dream big like them.

And most of all, I feel so grateful to have been in such an amazing community of bright, smart, and loving students from all around the world. It would be a lie to say that I came having no prejudices about people from other countries, but participating in this program and talking with students from such diverse backgrounds made me realize that even though we are so different in many ways due

to our nationalities, we are actually practically the same 20-somethings trying to figure out life. This experience of bonding with other students shattered my stereotypes about the world and people from other nations, and I believe I came out of this program with a much wider view and a bigger heart for the world. I was especially motivated by how attentive, hardworking, and positive the students were, and I learned so much just by spending time with them on how I can become a better person. I also learned a lot from students from other countries who had the same major (which is economics) as I did from looking at how they were able to view the world through their major knowledge and apply what they learned in university to any new information they encountered. It certainly motivated me to study harder and made me realize that the purpose for which I am studying is not just to get a job through my degree but to develop my gaze in interpreting the world and coming up with solutions that can contribute to worldly affairs.

Lastly, I greatly enjoyed the program itself. Being able to get a glimpse into each professor's professional field was a great privilege, and I found it fascinating how someone can devote their time and effort to a certain focus and get a bigger lesson out of studying it. I also really appreciated the English discussions and I am thankful that I got to participate in all of them. Talking about global affairs heightened my knowledge and my curiosity about why such social problems happen and endure, and the opinions that the other participants offered helped me realize the core of the problems and details related to other fields that I did not know about. These discussions also taught me that all problems are not just limited to one cause but the reasons and consequences are all linked through various fields, and in order to understand the world, I must look at everything from holistic perspective.

Overall, participating in this program drastically changed the way I view life and the world, and I came out of it a better person and a more motivated student. Getting to travel and learn in Kyoto was the biggest luck I have had this year. Thank you so much to everyone who worked to make this program possible.

2. The Ripple Effects of Gender Bias

I was interested in the English discussion we had about gender bias and our second academic lecture where an Economics professor talked about Japan's 'Lost Decades'. Through the discussion, I was surprised at how the gender bias across university majors is existent across borders. Talking about this made me realize how serious the problem is across many sectors, and how many countries live permeated with stereotypes. Through the lecture, I was intrigued at the professor's statement about how there are only 3 ways to achieve economic growth, and I wanted to link the discussion and the lecture together when the professor mentioned Japan's aging society and low birth rate as the factors of Japan's 'Lost Decades'. Hence, I decided to research about the correlation between Japan's gender bias and their economy.

Researching for this topic, I learned that in Japan, men are considered the breadwinners of the family. This leads to men marrying and having children less when they feel as if they are not economically

stable enough to maintain a household. And because the ratio of ‘irregular jobs’, which refers to jobs with less job security, is increasing, there are fewer people who feel economically capable of supporting a family, which leads to them likely not having a family. The effects of the stereotype “men earn the money” don’t stop here. The ripple effects of it leads to gender roles where when a child is born in a family, women are typically the ones who take the responsibility of childcare. This is because under such a stereotype, it is difficult to imagine men stopping work to take care of their child. This means women take more maternity leave when they have a baby, and in order to continuously balance childcare and work, some women would also take up irregular work, which means there is a gender bias in the ratio of women working in high, managerial positions in addition to a general lack of women in the workplace. If women don’t want to put a stop on their careers, they will just not have children at all.

All of these aftereffects lead to economic repercussions, as they directly link to the factors of economic development; the amount of input and the quality of the input. Less kids means less input for Japan’s economy, and less women in certain fields or positions means that valuable female workforce get lost and it perpetuates a vicious cycle that goes on forever.

In order to solve this problem, I believe that the government should figure out the roots of the problem and support families for sustainable and equal work. Individuals should also recognize that what we think as ‘right’ is actually just an artificial construct and that a simple thought may be lagging our positive development in many aspects of life. Conclusively, we, the people who are aware of it, should have the responsibility to try to fix it.

Final Report

Watermelon
KSP Number: 113
Yonsei University

1. General impression about the program

My favorite part of this program was that I can enjoy and experience daily life of Kyoto University students with other international students and feel the Japanese culture through those times. During the Japanese conversation session, I can meet a lot of Kyoto University students and talk freely about various topics. Even if my Japanese skill is not perfect, Kyoto University students helped me a lot to use correct expressions and when I asked them about Japanese words, they also explained very well for me to understand the exact meaning of the words. Through that conversation I can not only enhance my Japanese conversation skill but also exchange each other’s different culture. Especially, I was glad that many students are interested in Korean culture, and I can explain them about my culture. At the same time, I can get a lot of information about Japanese culture that I cannot know through the internet or any other places. Also, student leaders helped us a lot to experience Japanese culture even after the lecture time. Karaoke, watermelon crush, and playing firework at Kamogawa all became unforgettable memories at Kyoto. In addition, all Kyoto University participants of this

program answered my question very kindly even if it is very small and simple question. For example, I asked one student about the location of Japanese class, and he walked with me in front of the classroom. I was so impressed by that kindness of Kyoto University student. Lastly, academic lecture and English discussion sessions were also good opportunity to talk and share ideas with different students from different cultural background. I really liked the point that in some lecture, we had enough time to discuss about certain topic with other students and it became good insights for me to deeply and broadly understand about that topic. Also, I like the ways that discussion session held. I did not have to feel burden about fierce atmosphere of discussion, but I can freely share ideas with other students and talk about different ideas and specific examples about each country. And I can learn a lot through those conversations.

2. Unique Identity, Bright Future Kyoto

Urbanization, centralization, and provincial extinctions are serious problems for some countries including Japan. More people are leaving rural areas and going to the city for many reasons. Especially in countries like Japan and South Korea, along with problems related to aging society, many cities in those countries are endangered to disappear. What is the reason that people leave rural areas? There are several reasons for people to leave from rural areas. Lack of Job opportunities in rural areas, lack of public service due to lack of infrastructure, and less opportunities for better educations are main reasons that makes people to leave rural areas.

However, I think the most important thing that makes people to remain in that city is the unique identity of the city. Even if people have their job in certain city and all good infrastructures are in the city, they will not live there anymore without their own identity. They have to make people to remain in that city, not the points that make people that just come to city for that certain purpose. Making the city to the city that people want to spend their whole life is the most important thing. And I think Kyoto has that kind of attractive unique identity. As I was spending time at Kyoto for about two weeks, I can feel that Kyoto is wonderful city that I can feel the past, present, and future of the city at once. There are many heritages that I can feel the past of Kyoto, but at the same time, there are all infrastructures that can make our current life convenient like big hospital and department store. In addition, I can also see many people who is working hard to preserve those tradition who can ensure the future of Kyoto. Also, preserving nature is one of the most important things in this world where many environmental problems occur. And in Kyoto, I can feel a lots of nature with the city, just like kamogawa and trees in the city. In addition, the limitation of height of the building is also one of the uniqueness and preservation for the city. The last point that I want to mention is the unique identity of Japanese education that can make people have their own identity. This is actually not limited to the Kyoto city, but it is also true for all Japanese students. It is important to have their own identity along with their life. Through professor Kawai's lecture, I could find the answer of that individual identity. I think "Bukatsu" is the best educational activity for people to find their own identity. Through Bukatsu, people can seriously think about their future and have enough time to think about what they really want to do throughout their life. To sum up, I think that the combination of city atmosphere of Kyoto and Japanese educational environment can give people their own's identity which can lead Kyoto to maintain its city.

Final Report

Jacqueline
KSP Number: 115
Yonsei University

1. General Impression about the program

I really enjoyed participating in the Kyoto Summer Program. Perhaps, I think I will appreciate it more and discover the meaning of it as time passes. By being in Kyoto, I gained, learned, and felt a lot of things. I ate a lot of good food—not a single Japanese cuisine disappointed me—and saw beautiful sights including the daily magical skies. Running into cafes taught me how Japanese people decorate their unique aesthetic interior. And by looking at Japan, I reflected on my own home country—how similar and different we are.

It feels like a fever dream that all of this happened so quickly. At first, two weeks felt long enough to experience Japan, also because of the extremely hot weather. But I remember, towards the end of the program, with around two to three days left, my friends and I talked about how everything passed so fast. In that short time, I think I met many people. Sometimes, talking about a common Asian experience was something to laugh about during lunch together. Other times, I felt that I met friends that I wouldn't have met otherwise.

The topics of the lectures throughout the program were really interesting. I enjoyed that there was a wide variety of topics from biology to entrepreneurship. Even though I am a literature major, I was drawn more to the lectures on biology or zoology. I was glad that I had the chance to listen to all the lectures that I was interested in. The 'discussions in English' were also quite interesting. I think the KU students chose good topics that were worthy to talk about. On the other hand, it was undeniable that the discussions remained on a shallow level, because we didn't have enough time and chance to dive in deeply. I think if the program was structured to discuss the things we learn in the lectures, we would've been able to discuss more deeply. What I thought could also be improved in the schedule was 'conversation with KU students in Japanese'. It was nice that it was a quite relaxed session, but because of the freedom, I often didn't know what to talk about, especially considering my short level of Japanese. Other than those things, I enjoyed the relaxed atmosphere of the program. I liked that there was enough space for me to rest and look around Kyoto. Overall, I am glad that I participated in this program, and I would like to savor the good memories from time to time I made in Kyoto.

2. My thoughts on sustainable food production

The most interesting topic for me was the lecture on "Sustainable Food Production with Environmental Issues and Animal Welfare." Even though I already had knowledge that food consumption causes a lot of environmental problems, the lecture taught me how and what specifically causes these problems. The professor mentioned that excessive chemical fertilizers have been breaking the balance of certain nutrients. It made me think about how humans have broken the sustainable cycle of nature. Perhaps we are still in the process of learning how to coexist with the environment. Yet, under systems such as capitalism, humans will only weigh the amount of

money they make instead of taking the environment under consideration. Global boiling, as the professor mentioned, is a serious problem that humans have caused.

The professor also mentioned how the production of Wagyu (Japanese beef), in fact, involves ethical issues. To produce Wagyu, there has to be precise feeding with vitamin A control in cattle barn. This involves a lot of stress and labor for the cattles. Also, the cattles have to consume only brown hay, which contains less vitamin A than green hay. In other words, humans cause a lot of stress and malnutrition of the animals for the pleasure of people who consume beef. I found this unethical. I was really surprised to find out such popular, and gourmet food turned out to involve ethical issues in the process of producing them. I thought about how animals are not mere products to consume. They are also creatures that have the right for well-being. After learning about this, I considered not only avoiding the consumption of Wagyu, but also being careful of what I consume in general, for the sake of animal well-being.

Another problem was induced in the process of producing eggs. To select potential hens out of fertile eggs, all the male eggs are killed. This amounts to around 7 billion chickens a year. On the other hand, to select broilers out of fertile eggs, all the female eggs are killed. I thought that this was not only a huge economical loss, but also it seemed too unethical to kill so many creatures every year. I felt really bad for the loss of their lives, and the chickens that mass produce eggs in inhumane conditions. This lecture was meaningful in that it made me think about the daily consumptions I make and the impact it has on the environment. I think I became more conscious of the food I choose to eat. I think education on such topic is essential, because we often consume things without thinking much deeply. Therefore, I appreciated the opportunity to look into this issue together.

Final Report

Jennifer

KSP Number: 116

National Taiwan University

1. General impression about the program

I think in this program, I am fearless and brave. This is my first time doing a lot of things. First time taking an airplane by myself, first time having roommates, first time hanging out with others in other country... Having so many first times, I should be afraid. But surprisingly, I was not. And I really enjoyed the trip. I think it's because the people in KSP are so nice. They won't judge others English, they are always willing to teach others about their countries, they hold some activities and everyone can join, etc. This place is just too good to be true. My summer vacation was sparked by everyone in the program.

I want to thank my roommates the most. This is my first time having roommates. Actually I was quite nervous at the beginning. I just ate my food in the corner. But turned out by roommates are all so nice. And we really have a lot of fun staying together. We went to school together, ate lunch together, and laughed together. I really like them a lot. They let me had a good experience of having roommates.

Then, I would like to thank all the student leaders and teachers from Kyoto University. The program was well designed. And I can tell every staff in this program are always adjusting. Because they want to let the program be better and also want to give us a good experience. And we also have lots of activities after school. I think this really lets people feel included. And we also enjoyed a lot of Japanese festivals in sixteen days.

Time past so fast. Now I already come back to Taiwan and start to miss everything happened there. I really enjoy different ideas from different culture. I would say, I would like to join some similar program in the future because this experience was so nice that I want to experience again.

2. Kyoto Self-saving Pod 2024

In the lecture 6, the professor talked about entrepreneur ship is new idea and economic value. And he also let us come up with some business ideas. So after the class, I was thinking to invent one product. So I came up with the KSP2024. This product's target customer is all the international students in KSP. So first I find some small problem during our stay in Kyoto. First is the google map wasn't very well. Especially in some basement places. We would easy to get lost. And then is the Japanese being too hard. We didn't learn Japanese for a long time. So although we learned a lot, most of the time we still don't understand what is others talking about. Then, is the small talks. In this program, everyday there are so many small talks. Sometimes we just don't know what to say. Finally, is the alarm problem. Once you set an alarm, you have to wake all your roommates up.

Due to the problems mentioned above. I invented a Kyoto Self-saving Pod. This is a one-sided ear pod. So you can hear other people talking while using the ear pod. And this ear pod has multiple functions. First, which is the most important one. It can play music. Life is boring without music. Then, we have the function of guiding. It can guide you the right road. And in the same time, you don't have to keep looking at your phone. Then, is translate. It can translate what others are talking about. So no matter how hard the Nihongo is, you can always overcome it. Then, is about new topics. If you are talking and you are out of new topics. You can just tape on the pod, and it will give you new topics. Then, is the function of recall. I believe (maybe just me) some people have difficulties in remembering others information. So when you have this pod. It will tell you the name, grade, hobby... of this person. Finally, it has quite alarm. The alarm only plays through your ear pod. So it won't bother your roommates.

And that's the basic idea of my invention. Hope it's useful for every international students in the KSP!

Final Report

Elena

KSP Number: 117

National Taiwan University

1. General impression about this program

Traveling to Japan for a period of time, or even studying in Japan, has long been of my lifetime dreams. This summer, in Kyoto Summer Program 2024, I think I realized my dream with three elements: learning atmosphere, cultural environment and sincere friendships

Recall the memory of the kick off rally, I was amazed by the mystery of mathematic, the speech given by Professor Tokieda brought me to world of math discovered in daily life. That was a glimpse of the academic and researching atmosphere, which boosted mine interest of joining more academic lectures to see how scholars and researchers viewpoints would be. One of the most impressive part of all lectures was the Q&A section. Compared to the courses I had in my department, students have more initiative to raise question or comments to lecturers. I was surprised, enjoyed, and appreciated these opportunities to know more about each topics.

It was not my first time to Japan, but the first time I was immersed so much into Kyoto's daily life and traditional culture of this country. From the cultural activities held by KSP student leaders, we experienced the Bon dori dance, which I surprised found that dancing really can cross the border of language; the Yuzen Zome Dyeing, which I explored the traditional icons and color of Wa culture; and the Rakugo performance that I enjoyed so much, as Mr.Sakura Houraka was such a wonderful story teller!

We also went to the summer festivals in Nishihongan Ji. I had never been to any occasion like that, which people would celebrate the coming of season, and spend their time with beloved ones dancing, eating, chatting together. The atmosphere of joyfulness attracted me, especially after residents from Keiho area taught us Bon Dori dance, I saw how traditional cultures can still exist and known by people nowadays.

Last but not least, the friendship I experienced was undoubtedly memorable and extraordinary. Frankly speaking, I didn't expect any of it before I joined. However, as days went by, I had more and more conversation with students from all over the world by the discussion sessions, as well as daily meet up and meals we had. I discovered the difference between countries, but found more similarities. During these 17 days, we shared our opinions with each others and created numerous beautiful memories including boating on the river of Arashiyama, going up to Kyoto Tower, and sang out loud in Japanese karaoke. I wanted to know more about these people with my heart because of every participants' sincereness, it's all the great people I met that made me became extroverted.

2. The living atmosphere in Kyoto— discussion of “儀式感”

In the lecture of Japanese Classical Literature by professor Yukawa, she introduced us lots of proprieties about different time period of midnight to morning, and also the names of various lunar phases. After having this course, I started to pay attention to the moon every night, and wanted to watch to the sunset everyday, because of the various color the sky could become; or to buy a cone ice cream on my way back to hotel after class, just to enjoy the evening atmosphere.

With these moments, I connected it to a phrase I saw in Taiwan, which is “儀式感”, which can be translated into “the sense of ceremony” in English, but may be better interpreted to that the respect for everyday life. It is commonly used to described the situation when there’s no big days or events to celebrate, but we can still deliberately do some small changes to make the moments special.

Japan is one of the countries that I would put the phrase into lots of scenes, for instance, products sold in Japan are usually packed neatly and complicatedly, and meals will be served in small plates separately. Therefore, I did a small survey to know whether Japanese student would know more about this concept. However, the result came up to be that there might not be a certain word for it, the most similar phrase would be” 敬虔な気持ち“. Out of curiosity, I also asked one of my roommate who was from the UK, she said that there also wasn’t a certain word for the concept, but soon understand what I wanted to convey!

Although the result of my tiny survey wasn’t accurate and could largely biased because of my description to two people and the lack of samples, it lead me thinking of Sapir-Whorf hypothesis. This hypothesis was mentioned in one of the English discussion sessions in our program which I found very interesting, supporting that language element such as structure, vocabulary can greatly influence one’s thoughts. In the case of “儀式感“, the understanding of this concept may not fit Sapir-Whorf hypothesis.

Final Report

Randy

KSP Number: 118

National Taiwan University

First of all, I want to talk about my general impression of the program. Actually, it’s my first time to study aboard, so I hesitated and didn’t know whether I should join the program or not. However, now I can surely say that the program indeed worth the time and I don’t regret it at all! In the program, I learn a lot academic knowledge through the lectures. Since I’m a medical student, I’ve never gotten exposure to those topics before, for examples, economics, whaling, and Buddhism. These lectures even sparked my interest in delving into these realms. What’s more, I’ve always had the thought to learn Japanese, and the program gave me a wonderful opportunity to learn it and use Japanese in my daily life. Every time when I applied the Japanese conversations which I learned on the class, I felt a sense of achievement, and it made me willing to keep learning Japanese in the future! Besides, I also experienced the Japanese culture in the program. What impressed me the most is the summer festival at Nishihonganji. I always want to visit the festival in Japan, and the cultural experience really fulfilled my wish. I could watch the performances and activities that blended traditional arts with modern energy. Last but not least, the most valuable treasure I gained in the program is the people I met. I made many friends, including students from Kyoto University and other countries. I also heard their life stories and different outlooks on life, which are very thought-provoking and provide me with another way to see the world. I still kept in contact with some of them, and I think the only disadvantage of the program is that it’s too short and I start to

miss the people and the daily life there! To sum up, participating the program is the best choice I've made recently. I'm honored to be able to experience the culture and the academic atmosphere in Kyoto University, and I'll definitely come back here someday to relive this two-week-long dream!

In the program, I'm especially interested in Mr. Yamamoto's Exploring "humanity" by comparative studies with animals. He mainly talked about the cooperative behaviors in animals. Since I'm also interested in the ethical aspect of humanity, I did further study of it. Human nature can be seen as the natural behaviors and instincts exhibited by humans as a species. However, human nature also involves deeper levels of thought, including aspects such as morality, free will and cultural influence. Morality is the main topic I'm talking about here, it's a set of values, beliefs, and norms used by individuals or societies to judge whether behaviors are right or wrong. It guides how people should act, how they should treat others, and how they should live within society. The sign of morality can be seen in some animal behaviors. Firstly, Robert Trivers' theory of reciprocal altruism suggests that animals increase their chances of survival by helping each other. For example, when ground squirrels encounter predators, they make sharp sounds to alert other members of the group to nearby danger. However, this behavior risks exposing their own location. They use self-sacrifice to increase the chances of survival and reproduction for the group. Secondly, in some highly socialized animal groups, certain forms of social norms and punishment mechanisms exist. For instance, wolf packs have strict social systems and structures. For example, if one wolf attacks a pack member, it may be exiled. They maintain group harmony through these social systems. Thirdly, research indicates that some animals possess highly developed emotions and empathy. In one case, when an old female elephant fell ill, another female elephant in the herd gently tried to help her stand up and walk. This elephant stayed by her side until she passed away. From observing these animals, we can understand that morality is not without its benefits for survival and holds evolutionary significance. Knowing the evolutionary meaning of humanity can not only help we know us better but also aid future development.

Final Report

Moritz

KSP Number: 119

Heidelberg University

1. General impression

When I arrived at the accommodation, after being grilled by the sun, hauling my luggage, and getting the announcement that I would have to share a room with three strangers, I was mortified. Little did I know that these three strangers were going to become some of my best friends and that the coming program would fundamentally change me as a person.

Before arriving in Kyoto, I thought the famous sights like the Gion district or Kinkakuji would make me fall in love with the city. While exploring famous sights was something I enjoyed, sharing experiences with my friends is truly what made me fall in love with Kyoto and Kyoto University.

In this final report, I would love to share the experiences I had attending the Kyoto Summer Program in 2024.

My first challenge of the program came at the kickoff rally. My mission was to find out the favorite food of other students and to socialize with them. To make a long story short, I failed miserably and was not able to find out a single favorite food of other students. I did, however, find out a lot more about the other students beyond their favorite foods, which marks this experience as a success for me.

Another part of the program was attending language classes. Speaking in a foreign language, which you know you are bad at, is a scary experience. But with the energetic personality of my language teacher and the patience of the KU students helping us, we were able to learn more about the language and gain confidence in speaking. Additionally, we would often go to the cafeteria together to speak more and to become friends.

The program itself was not completely about socializing. Through the academic lectures and discussions with the students, I was able to learn much more about different areas of study and the mindsets and methods these different areas use. I hope I can apply this knowledge in the future.

My favorite part of this program was actually not the program itself. It was the different activities planned by the student leaders. Among these, I remember these experiences vividly: the summer festival after the cultural day, a night hike to Mount Daimonji, a gym session in Kyoto University's sports facilities, Suika-wari, and a small Hanabi at the Kamogawa Delta on the final day. These experiences truly made an impact on me, and I will treasure these memories all my life. Saying goodbye to all the friends I made and the city I fell in love with was truly heartbreaking. Yet it made me realize how grateful I am for this opportunity and that I truly want to make Kyoto and Kyoto University part of my future.

2. Biodiversity in Japan

In this second half of my report, I would like to discuss the biodiversity of plants and animals in Japan, a topic that has piqued my interest through various experiences. My first encounter with Japan's rich biodiversity was through the numerous signs warning about dangerous wildlife like boars and monkeys at Fushimi-Inari Shrine. This was followed by a hike up Mount Daimonji, where I observed a variety of wildlife, including crabs, frogs, and deer. Additionally, during a day trip to Lake Biwa, I had the opportunity to learn about the local marine population, including the common rice fish, Medaka, on which I based my final presentation.

Japan, as an island nation, boasts a unique set of climatic conditions that create an ideal environment for the development of a wide array of flora and fauna. The country's diverse landscapes, ranging from subtropical in the south to temperate in the north, support a rich variety of ecosystems. These include lush forests, mountainous regions, rivers, and coastal areas, each home to distinct species that contribute to Japan's overall biodiversity.

One notable feature of Japan's biodiversity is its high level of endemism, meaning that many species found in Japan are not found anywhere else in the world. This is particularly evident in the country's plant life. Japan is home to more than 7,000 species of plants, many of which are endemic. The country's forests, which cover approximately 67% of its land area, are particularly rich in biodiversity. These forests are dominated by various types of trees, such as the Japanese cedar (*Cryptomeria japonica*) and the Japanese beech (*Fagus crenata*), which provide habitats for numerous species of animals.

Japan's animal life is equally diverse. The country is home to a variety of mammals, birds, reptiles, and amphibians. The Japanese macaque, or snow monkey, is perhaps one of the most iconic animals in Japan. These monkeys are known for their ability to live in some of the coldest regions of Japan, and they have even been observed bathing in hot springs to stay warm during the winter. Other notable species include the Japanese giant salamander, one of the largest amphibians in the world, and the Japanese serow, a goat-antelope that is native to the country's mountainous regions.

Japan's coastal and marine biodiversity is also remarkable. The country's extensive coastline provides habitats for a wide variety of marine species. The waters surrounding Japan are home to numerous species of fish, mollusks, and other marine life. During my field trip to Lake Biwa, Japan's largest freshwater lake, I observed the Medaka, a small fish that is native to Japan and often used in scientific research due to its adaptability and resilience.

In conclusion, Japan's biodiversity is a reflection of the country's unique geography and climate. From its dense forests to its diverse marine life, Japan is a hotspot of biodiversity that supports a wide range of species, many of which are found nowhere else in the world. My experiences observing Japan's wildlife have deepened my appreciation for the country's natural environment and the importance of conserving its biodiversity.

Final Report

Renni

KSP Number:120

Heidelberg University

1. General impression about the program

After being quite excited in the beginning of our program, I am glad to say, that the last few weeks have surely been some of the most interesting, enriching, and valuable of my life so far. Not only did I get to know the country and people of Japan at first hand but also students from all over the world. Vivid memories shared together strongly define my picture of Japan now and will surely make me return for academic or personal aims someday.

I believe by combining academic lectures, language classes, cultural activities, and direct interaction with local students there is no better introduction to Japan than the Kyōto summer program. I would like to emphasize the commitment of the Kyōto University students and student leaders, who not

only accompanied us in the academic program, but also joined our free-time activities and became true friends – showing genuine interest in each other’s background we experienced an unparalleled exchange. I am grateful that I got to know Japan in this personal way for I don’t see any other opportunity to gain such insights.

The whole organizational aspect was well done – on the one hand there was a clear structure for a balanced program, on the other hand there were many options to discover Kyōto on our own. The whole team seemed very committed and was always available for questions. As said by Prof. Kawai their aim was to provide a safe framework in which we could interact and shape the program on our own.

As an absolute beginner I was genuinely surprised by how much I enjoyed the Japanese language classes: Due to the small class-size and the professors stirring type of teaching I gained quite a lot of knowledge in only five lessons and was even able to give a brief talk in our final session. This fun experience has encouraged me to take Japanese classes at my home university.

The fieldtrip, cultural experience and lectures provided deeper insight into selected parts of Japanese culture and society. Whereas the first lecture was very (maybe too) specific for a start, the others were easy to follow and full of new insights. The opportunity to try Bon-Odori dances at the summer festival lined up perfectly with the cultural experience and was one of the most memorable moments for me.

At first, I thought participants would share rooms, working- and discussion-groups with students from their respective countries until we were split up for every activity – in retrospective I am grateful, because this way I got to know almost every student in the program and formed many new relations to diverse individuals connected by our interest in Japan.

Summarizing it is to be determined that the Kyōto summer program 2024 was a truly unique experience – academically and personally enriching, full of memories and first impressions of Japan that will last a lifetime. I am grateful to be given the opportunity of participation and would like to thank everyone who made this program possible.

2. The Baumkuchen – and how it came to Japan

Before I departed to Japan I had once heard that Baumkuchen, the traditional German cake, is known and even sold in some places in Japan. I must admit I was skeptical and had no idea to which extend this myth should prove itself well-founded. During our program’s field trip I gained insight in the manufacturing process at La Collina and began research on the spit cake, its popularity and how it came to Japan. I also tasted many variations to determine differences – thereby I consumed more Baumkuchen in these three weeks than in the rest of my previous life.

During my investigations I learned that the concept of layer spit cake, baked on rotating sticks has existed since in the middle-ages and is believed to originate from Hungary or Greece. The first mention of “Baumkuchen” in German language dates back to the year 1682. Translating to “tree-cake” its name is to be explained by the tree-like layer-rings appearing when cut in slices. From my personal experience I can confirm, that Baumkuchen is well-known in Germany, but it is a special cake that is not available in most bakeries and pastry shops. In conversations with students and professors I learned that in Japan it is not only given as a usual gift but also eaten as an everyday

desert or snack. I was surprised, that some Japanese children even learn how to bake Baumkuchen over a campfire. The famous Baumkuchen-bakery in Salzwedel/Germany is frequently visited by Japanese tourists and pastry masters to study the cake's origin.

Reason for its popularity might be the refinedness, appealing symmetry, and circular ring-shape, which I read is considered a symbol of luck in Japanese culture.

The question, how Baumkuchen came to Japan can be answered with the story of Karl Juchheim, who worked at a pastry shop in Kiautschou in the early 20th century. This German colony in today's China was invaded by Japanese forces during World War I. Juchheim was taken prisoner of war and brought to a camp near Hiroshima. During an exhibition in 1919 he was allowed to present his profession and decided to show Baumkuchen as one of his sophisticated delicacies. The cake was received well and after the war Juchheim decided to stay in Japan and start a pastry shop. After his first attempt was destroyed by an earthquake, the second in Kōbe became a big success and was continued by Juchheim's coworkers. The brand has lasted today, so I bought Juchheim-Baumkuchen for my final presentation – no piece being left I was reported a delightful taste by my fellow students. In general, most Baumkuchen I tried in Japan was softer than in Germany, nonetheless the familiar taste still convinced.

Summarizing it is to be determined that Baumkuchen is indeed "*known*" in Japan. Since its introduction by a German prisoner during wartime it has become one of the most popular cakes in Japan, due to its iconic shape and delicate taste, which might differ from the original in terms of consistency.

Final Report

Tim

KSP Number: 121

University of Vienna

1. General impression about the program

After arriving in Kyoto on the 25th of July, the Kyoto Summer Program begun with the Kickoff Rally. I did not realize it at that time, but this introduction was emblematic of what the next two weeks of my life would be about. After being warmly welcomed, we were asked to guess the food that the other students wanted to try during their stay in Japan. Even though, at that point in time, we were all still strangers from vastly different backgrounds, we rapidly found ourselves laughing together and having fun. Following this up was a lecture by Professor Tokieda, who gave us a lecture on topology, engrossing us in a topic most of us most likely have never really even thought about.

From an academic perspective, the program gave me insight into a multitude of other disciplines. On the one hand I suddenly caught myself being captivated by talks about topic such as the anthropological reasons why we eat certain food or why cell senescence puts a limit on our lifespan and on the other hand I feel like I learned a lot through the discourse with other students, offering unique perspectives from their respective disciplines and cultures, during the discussion sessions.

Another aspect I want to highlight are the Japanese language lessons. It is astonishing how much you can learn in such a short timeframe, and we always had great fun speaking Japanese under the guidance of the motivating and supportive KU students and teachers. I honestly feel like starting to learn a language in such an environment has always pushed us to give it our all and has motivated many of us to continue working hard on our Japanese studies even after the program has ended.

The best thing about the Fieldtrip and the Cultural Experience, was that we were able to share and explore our curiosity in Japan's uniqueness and culture together. I have fond memories about running from one side of the Lake Biwa Museum to the other, desperately trying to find the last few answers to the quiz, having fun while struggling to replicate all the moves of the bon-odori dance together or just strolling around the Nishihonganji summer festival with friends, trying out all the traditional food the stalls had to offer. Adding on to this were the various different activities that were not officially part of the program but that the student leaders organized like the hike to Mt.Daimonji at night, the suika-wari or the hanabi at the Kamogawa-Delta.

The last and likely most important thing I want to mention are the people that took part in the program, which are the main reason the KSP was so memorable. Everyone, be it the KU students, the student leaders or the international students was really welcoming and open and I am truly grateful for the opportunity to meet and make memories with such a wonderful bunch of people. Even though this summer experience felt really short, I will cherish these memories forever.

2. Research and development in Japan

In this second part of the report, I would like to delve deeper into the state of research and development in Japan. I became interested in the topics after Professor Sekiyama's lecture about Japan's lost decade, in which he talked about the current state of Japan's economy and why it has been stagnant over the last few decades. After some further reading, the role of R&D piqued my interest in particular, with Japan being a leader in this domain and because of its key role in addressing the challenges posed by population decline.

Historically speaking, research and development has been one of the key reasons for Japan's economic success, particularly in the post-second-world war era, during which Japan's innovations in the automotive and electronics industry contributed to a particularly high level of GDP growth.

With a rate of R&D expenditure of about 3.59% of GDP and ranking third in total patent applications in 2021, at a first glance the key figures are still looking quite good, even today. If one takes a look at certain measures of disruptive research output however, the situation looks a bit more nuanced. Most research in Japan is currently being conducted by the private sector, most notably by large firms like Toyota, Sony and Fujitsu. The consequence of this, combined with Japan's work culture, valuing stability, is that most of the research that is actually being done tends to lead to a more slow yet steady, incremental technological advancement.

While Japan is still a world leader when it comes to sectors like robotics, electronics and semiconductors, there is growing concern that the current rate of innovation, especially with increasing competition from countries like South Korea and Israel, which also spend a large portion of their domestic product on R&D, is not fast enough to keep up with the shrinking population.

To fight these circumstances, the Japanese Government has begun to foster a more startup-friendly environment with programs like 'J-Startup'. By expanding the scope of its R&D tax credit system over the last years, that was first introduced in 1999, Japan is effectively trying to reduce the cost of research. By focusing the benefits mostly on small and medium-sized enterprises and basing the aid on recent-performance, not only the volume of R&D but also the quality of R&D is targeted. Another cornerstone of Japan's strategy is the incentivization of university-industry and international collaboration, aiming to hopefully not only increasing the quality of research, but also increasing the rate of commercialization of research.

In conclusion, while Japan's R&D landscape has been historically robust, it faces significant challenges in the 21st century. Despite government initiatives aimed at boosting innovation, the effects of a shrinking population and emerging global competitors make this issue increasingly pertinent for the decades to come.

Final Report

Elza

KSP Number: 122

University of Vienna

1. General impression about the program

My impressions about the program were generally positive. I value the opportunity to have received a comprehensive language course that gave us some basics of Japanese to get around in Kyoto well. Prof. Kashiwagi is a fantastic teacher who taught us with patience while making the class fun. As for the academic lectures, I found it refreshing to hear more about the professor's research that was outside of my degree or study focus. My favorite lectures included Prof. Kondos take on food security and Prof. Wakamatsu's lecture on Whaling and Food Taboos in Japan. As for the administration, I felt supported during the entire program with my questions and concerns which I deeply value. It was clear from the start of the program what the expectations are. Also, the guide and the campus tour were helpful throughout the stay. Although I was a bit skeptical about the discussion sessions in English at first, it turned out to be my favorite part of the academic program. I was surprised to see that although the participants come from various parts of the world including Japan our opinions were quite similar. One thing I would have wished for is for the moderators of the discussion to pick out some more controversial arguments and ask the class to give their opinion on that. Maybe then, a more engaging discussion would have been possible. The final end-discussion on 8/8/24 was perfectly executed. It was interesting to hear the arguments and focus on the main points due to time constraints of just a few minutes. I have one remark regarding the final presentations. Since

the presentation time was just 3 minutes, the preparation time planned was set for too long in my opinion.

As it was my first time, visiting Japan I was very much interested into immersing myself into the culture, trying out new foods and talking to the local students. The Kyoto University summer school program gave us plenty opportunities to pursue this endeavor. From receiving dance classes for Bon Odori, creating unique pieces with the traditional Yuzen dying technique to attending initiatives and fieldtrips organized by the student leaders – It was amazing to have this opportunity to experience Japan beyond the tourist experience and make life-lasting memories and friends around the world. I am very grateful to have had the chance to participate in the Summer School of Kyoto University.

2. Vegetarianism in Japan

The reason I chose this topic for my end-presentation and this report is because of my personal experience and the Food Security lecture by Prof. Kondo that inspired me to further investigate it. At home, I pursue a vegetarian diet. However, upon research for this trip, I learned that eating vegetarian in Japan, although possible, is hard. I figured I wanted to experience the unique food culture and try dishes I will be not able to eat at home. Also, I did not want to limit myself to less-nutritious food or miss out on social experiences. Therefore, I decided to make an exemption for my stay. However, I wanted to learn more about the reasons why Japan struggles with vegetarianism.

What I have learned about the topic:

I was surprised to learn that the population of Japan pursued a meat-free diet for centuries. As an Island nation it heavily relied on fish consumption. This meat-free past was due to religious and economic reasons. Buddhist teachings forbade the consumption of meat as it is believed that ancestors could be reincarnated into four-legged animals. Also, economically it was intended to promote the rice-plantation instead of hunting. This slowly changed with the Meiji government who changed the dietary taboos in 1872 when the Meiji emperor ate meat in public for the first time. After that companies for meat and dairy production opened and dishes from the West, China and Korea were adapted (Allen, 2024).

Additional investigations into the topic:

In 2023, 4,5 % of Japan's population reported to live vegetarian (Diep, 2023). During my research I learned that there have been initiatives driving vegetarian alternatives in supermarkets and restaurants. To attract foreign tourists with different eating habits, the Japanese Tourism agency will provide subsidies for the promotion of use of ingredient pictograms and the development of vegetarian menus. The number of vegetarian tourists in Japan in 2018 was estimated to be 1.67 million (Times, 2024). With this number to grow in the future Japan must consider offering vegetarian alternatives without sacrificing its unique food culture.

References

Allen, K. (2021, June 10). Why Eating Meat Was Banned in Japan for Centuries. Atlas Obscura. <https://www.atlasobscura.com/articles/japan-meat-ban>

Diep, C. (2023, December 19). Plant-based food in Japan - statistics & facts. Statista. <https://www.statista.com/topics/9128/plant-based-foods-in-japan/>

Times, J. (2024, May 3). Japan aims to attract more vegetarian and Muslim visitors. The Japan Times. <https://www.japantimes.co.jp/news/2024/05/02/japan/japan-tourism-vegetarian-muslims/>

Final Report

Nano

KSP Number:123

Universitat de Barcelona

1. General Impression about the program

Participating in the summer program at Kyoto University has been an incredibly enriching experience. From the moment I arrived, I was captivated by the beauty and culture of Japan, and the program itself has exceeded all my expectations. Not only have I expanded my knowledge of Japanese society, history, and language, but I have also forged meaningful connections with people from around the world. The shared experience of staying in the same hotel has allowed us to bond in unique ways, creating friendships that I believe will last far beyond the duration of this program.

Reflecting on the lectures, I was pleasantly surprised by the sessions that ended up being my favorites. Initially, I had certain expectations about which topics would interest me the most, but I found myself captivated by lectures I hadn't anticipated enjoying. This shift in my preferences was largely due to the professors' exceptional teaching methods. Their ability to make complex topics approachable, coupled with their engaging public speaking skills, made the learning experience truly enjoyable. The professors did not simply lecture; they interacted with us, encouraged discussions, and made the material come alive. Their passion for their subjects was contagious, and I found myself deeply engrossed in topics I previously had little interest in.

The university itself is remarkable, with its blend of traditional and modern architecture and its commitment to cutting-edge research. It was a disappointment, however, that the cancer research laboratory was under renovation during our visit. I was looking forward to seeing the innovative work being done there. Despite this, I am hopeful that I will have the opportunity to return in the future when the lab is fully operational. I am eager to witness firsthand the advancements that will undoubtedly emerge from such a prestigious institution.

The student leaders in the program also deserve special recognition. They went above and beyond to make our experience smooth and enjoyable. Their recommendations for events and places of interest in Kyoto were invaluable, and their constant support was greatly appreciated. It is clear that they take great pride in their roles, and their efforts contributed significantly to the success of the program.

Of course, no experience is without its minor drawbacks. I found the lunch breaks to be a bit too short, especially on days when lectures ran longer than expected. This sometimes left us with little time to eat, forcing us to rush through our meals. Additionally, during the field trip, I would have appreciated more detailed explanations of the sites we visited, rather than being left to explore on our own.

Despite these small inconveniences, they do not detract from the overall experience. My time in this program has been nothing short of transformative, and I will carry the memories of the people, the knowledge gained, and the beauty of Kyoto with me for a long time. I am incredibly grateful for this opportunity and will never forget this journey, the professors, my fellow participants, and the university that made it all possible.

2. Chosen Topic: The Yuzen Technique

The Yuzen technique is a traditional Japanese art form that captured my interest during the Kyoto Summer Program, where we had the opportunity to engage in this cultural experience firsthand. Practicing this technique, which involves painting on different fabrics, provided me with a deeper appreciation of Japanese craftsmanship and artistry. My fascination with Yuzen stems from its intricate process, its historical significance, and the way it embodies the delicate beauty of Japanese culture.

Yuzen dyeing, originating in Kyoto during the late 17th century, is named after Miyazaki Yūzen, a master fan painter who pioneered this method. The technique revolutionized textile art in Japan, allowing for elaborate designs on silk kimonos, the traditional Japanese garment. The meticulous process of Yuzen dyeing involves stretching silk fabric over a wooden frame, sketching intricate designs inspired by nature and traditional Japanese motifs, and applying a rice flour paste known as *nori* to create barriers for dye application. The colors are then carefully layered to create vibrant, detailed patterns that reflect the beauty of the natural world and the changing seasons.

During my experience with Yuzen dyeing, I learned how crucial precision and patience are in this art form. The technique requires not just artistic talent but also a deep understanding of the materials and processes involved. The application of the resist paste, the careful layering of dyes, and the removal of the paste to reveal the final design are all steps that demand careful attention to detail. This hands-on experience made me realize the dedication and skill that have been passed down through generations of Japanese artisans.

My interest in Yuzen goes beyond the technical aspects of the craft. I am drawn to how this technique represents a form of cultural expression that has endured for centuries. The designs created through Yuzen are not only visually stunning but also deeply symbolic, often reflecting themes of nature, harmony, and the passage of time. This connection between art and cultural identity is something that resonates with me, as it underscores the importance of preserving and understanding traditional practices in a rapidly changing world.

To further my understanding of Yuzen, I have conducted additional research into its historical context and contemporary relevance. I discovered that while modern technology has introduced new methods in textile production, traditional Yuzen remains highly valued in Japan. It is a symbol of the country's rich cultural heritage, embodying the timeless beauty of Japanese textile art. This exploration has deepened my appreciation for the craft and solidified my interest in continuing to study and engage with Japanese cultural practices.

In conclusion, the Yuzen technique is more than just a method of fabric dyeing; it is a living tradition that reflects the artistry, history, and cultural values of Japan. My experience with Yuzen has not only enriched my understanding of Japanese art but has also inspired me to continue exploring the cultural expressions that connect us to our past and shape our future.

Final Report

Allen

KSP Number: 125

Universitat de Barcelona

1. General Impression about the program

If I had to describe the KSP2024 in one word, it would definitely be **amazing**. One of the aspects I truly enjoy and find invaluable is the opportunity to engage in conversations with people from all over the world—Japan, China, South Korea, the U.S., Europe, and beyond. The Kyoto Summer Program has given me the chance to dive deep into discussions on various topics, exchanging ideas and perspectives with such a diverse group of individuals. This aspect of the program is something I absolutely love.

Moreover, the program has provided me with a firsthand experience of Kyoto University's unique educational approach. It's not just about cramming knowledge into your head; it's more about sparking your curiosity and inspiring you to explore further. The way they encourage learning is like bait on a hook—it draws you in and makes the knowledge stick. This method not only solidifies what you learn but also boosts your overall learning ability.

Through the lectures, I've delved into a wide range of subjects, from Japan's stance on whaling to its interpretation of Buddhism, and even the reasons behind the fragility of its economy. These topics have broadened my understanding in ways I hadn't anticipated.

The Japanese language classes have been another highlight of the program. The teachers are incredibly kind and approachable, which made the learning environment both comfortable and motivating. Their enthusiasm for teaching has really sparked my interest in learning Japanese.

The cultural immersion has been another highlight. Whether it was participating in traditional dyeing workshops or the Bon Odori dance, every cultural experience deepened my love for Japanese culture. And the program also gave us ample time to explore Kyoto, the cultural heart of Japan.

Visiting shrines and temples has enriched my understanding of Japan's religious traditions, making this journey even more meaningful.

Overall, the KSP2024 program has exceeded my expectations. It has not only expanded my academic horizons but also provided a unique platform for cultural exchange and personal growth. The experience has left me with a deep appreciation for Kyoto University's commitment to fostering global understanding and collaboration. I am leaving this program with a richer perspective on Japan and the world, and with memories that will undoubtedly last a lifetime.

2. Yen Carry Trade since the Lost Decade

One specific topic that really caught my attention during the KSP was the concept of the Yen carry trade, which was briefly touched on during Professor Sekiyama's lecture on the Lost Decade and its potential solutions. While the lecture provided a solid introduction to the topic, I found myself particularly intrigued by the economic phenomena that have emerged since the Lost Decade, especially how they relate to the Yen carry trade.

As an economics major, I'm naturally drawn to topics that intersect with my field of study, and the Yen carry trade is one of those fascinating areas where theory meets real-world application. The carry trade involves borrowing money from a country with low interest rates and investing it in a country with higher rates, pocketing the difference in the process. Since Japan has maintained ultra-low interest rates since the Lost Decade, it's been a ideal candidate for this kind of speculative strategy.

In essence, investors borrow in Yen, which has low borrowing costs, and then invest in higher-yielding assets abroad, like U.S. Treasury bonds. However, the carry trade isn't without its risks, and this is where things get really interesting. Exchange rates play a crucial role in determining whether these trades are profitable or not. For instance, earlier this August, the Yen suddenly appreciated, which led to a sharp decline in the volume of Yen carry trades.

This got me thinking about what caused the Yen to strengthen so unexpectedly. Digging deeper, I learned that the Bank of Japan had announced a rate hike to 0.25%, which, while still low, was the highest it had been in years. A higher interest rate generally boosts a currency's value, as investors seek out higher returns. At the same time, the U.S. had just released disappointing non-farm payroll data at the end of July, which didn't meet expectations. This, combined with a sudden downturn in U.S. tech stocks, led to a weakening of the dollar. The combination of a stronger Yen and a weaker dollar created the perfect storm for Yen carry traders, who suddenly found their positions much riskier.

What I found particularly fascinating was how these global economic shifts can have such immediate and dramatic effects on trading strategies like the carry trade. It's a clear reminder of how

interconnected our financial systems are and how changes in one part of the world can ripple across markets globally.

This topic has definitely sparked my interest in exploring the dynamics of carry trades further, particularly how central bank policies and global economic indicators can influence currency markets. It's an area I plan to continue researching, as it ties directly into my studies and could have significant implications for global financial stability.

Final Report

Danny Inoue

KSP Number: 126

University of California, San Diego

1. My experience in the Kyoto Summer Program was immensely enriching and broadened my understanding of various aspects of Japanese culture, history, and contemporary issues. The academic lectures were diverse and intellectually stimulating, offering deep insights into topics ranging from Japan's political economy during the 'Lost Decades' to the intricate rituals of the Tokugawa Shogunate. For example, Prof. Mayuko Sano's lecture on diplomatic ceremonial practices in the Tokugawa era provided a general exploration of Japan's history, offering a unique insight on Japan's transition into the modern era. Similarly, the discussions on Japan's current economic challenges, particularly those highlighted by Prof. Takashi Sekiyama, helped me understand the complexities of Japan's economic landscape, especially in comparison to other developed nations. The focus on sustainable food production and environmental issues by Prof. Naoshi Kondo was particularly relevant, given the global emphasis on sustainability, and it underscored the innovative approaches Japan is taking in this field. Japan's cultural aspects were also a significant part of the program. Prof. Fumitaka Wakamatsu's lecture on the cultural politics surrounding whaling in Japan was a profound exploration of how traditional practices can clash with modern conservationist perspectives. This lecture, coupled with Prof. Shikiko Yukawa's session on the aesthetics of Japanese literature, deepened my understanding of how deeply ingrained cultural practices and philosophies are in Japan, shaping both its past and present. Beyond the academic lectures, the cultural activities such as the Yuzen dyeing workshop and the Bon-Odori festival offered a hands-on experience of a few Japanese traditions, making the learning experience more holistic. The one-day trip to Omi-Hachiman city and Lake Biwa Museum further contextualized the lectures, providing a real-world connection to the historical and environmental topics discussed. Overall, the program was a comprehensive blend of academics and cultural immersion, which allowed me to gain a true practical understanding of Japan. Alongside the memories I've created with my peers, it was an intellectually fulfilling experience that broadened my perspective on both Japan and the interconnectedness of global cultures.

2. During the Kyoto Summer Program, the lecture by Prof. Fumitaka Wakamatsu on "Whaling in Japan: Cultural Politics of Food and Conservation" served as a thought-provoking case study for examining the concepts of ethnocentrism and cultural relativism, particularly between the United States and Japan. This topic captivated my interest as it highlighted the differences in cultural practices and values between these two nations and how these differences can lead to misunderstandings and conflicts on the global stage. Whaling, as discussed by Prof. Wakamatsu, is a practice deeply embedded in Japanese culture, with historical significance and cultural values attached to it. However, this practice has been met with significant opposition from many Western countries, particularly the United States, where animal conservation and welfare have become prominent ethical concerns. This clash of values exemplifies ethnocentrism, where one culture's norms and values are viewed as superior and are used to judge another culture. The United States, in this case, tends to view Japanese whaling practices through its own cultural lens, often disregarding the historical and cultural context within which these practices exist in Japan. On the other hand, the concept of cultural relativism encourages an understanding of these practices within their cultural context, without imposing external moral judgments. By applying cultural relativism, one can appreciate that whaling in Japan is not merely about the consumption of whale meat but is also a tradition that has cultural, economic, and scientific implications. This perspective fosters a more nuanced understanding of why certain practices persist despite global criticism. A similar cultural divide can be seen in the issue of gun culture in the United States. In contrast to Japan, where strict gun control laws reflect a societal consensus on the importance of public safety and harmony, the United States has a deeply rooted culture of gun ownership, often tied to ideas of individual freedom and self-defense. To many Japanese observers, this American gun culture may seem confusing or even dangerous, much like how whaling in Japan is perceived by many Americans. These examples underscore the importance of cultural relativism in fostering mutual understanding and respect between different cultures. By recognizing the historical, social, and cultural contexts that shape practices like whaling in Japan or gun ownership in the United States, we can move beyond ethnocentric judgments and towards a more empathetic and informed global discourse. In conclusion, the exploration of ethnocentrism and cultural relativism through the lens of Japan's whaling practices and American gun culture has furthered my understanding of the complexities of cross-cultural interactions. It has reinforced the importance of approaching cultural differences with an open mind, striving to understand practices from within their own cultural frameworks rather than imposing external values upon them.

References:

Carnegie Council. Retrieved August 8, 2024, from [Cultural Relativism](#).

Thomas F. Pettigrew, in Encyclopedia of Social Measurement, 2005. Retrieved August 8, 2024, from [Ethnocentrism](#).

Britannica. Retrieved August 8, 2024, from [United States](#).

Wikipedia. Retrieved August 8, 2024, from [Japan](#).

Fumitaka Wakamatsu. Retrieved August 6, 2024, from Lecture 7: Whaling in Japan: Cultural Politics of Food and Conservation.

Whale and Dolphin Conservation. Retrieved August 8, 2024, from [WHALING IN JAPAN](#).
Wikipedia. Retrieved August 8, 2024, from [Conservation in the United States](#).
Wikipedia. Retrieved August 8, 2024, from [Gun Culture in the United States](#).

Final Report

Tyler

KSP Number: 127

University of California, San Diego

General Impression:

Having visited Japan twice before and studied the language for nearly three years, I felt more excitement than nerves about the program. My only minor concern was whether I would get along with my roommates, but overall, I was looking forward to the experience. What I looked forward to the most was the opportunity to speak and interact with fellow Japanese college students. This is because when you are a tourist, talking and connecting with Japanese people is difficult if not possible. This program allowed me to be more than just a tourist.

Due to the COVID-19 pandemic, which reached its peak during my first year of university, I missed out on the traditional university dorm experience. However, the accommodation provided with the program gave me a second chance. Albeit the Ryokan being more like a hotel, the lifestyle was similar.

I was also thrilled to gain more practical experience with the Japanese language. Back in the United States, where Japanese is never encountered outside academic settings, my language practice was limited to online resources and interactions with classmates. The support from Kyoto University students and the program's language classes allowed me to make substantial progress in my language skills.

The program offered a wealth of cultural experiences, from field trips to a Yuzen dyeing workshop. However, my fondest memories are the people I met and the activities we shared. Highlights include bowling at 1 a.m., a night hike with both Japanese and international students, and attending a hanabi festival with my newfound Japanese friends. The Kyoto Summer Program provided me with memories that will be cherished for the rest of my life, and friendships that I hope will last my lifetime. I am very grateful to Kyoto University, the staff, and students for providing me with this invaluable opportunity, thank you.

2. Specific topic: Walkability and public transportation:

During the program, I developed a strong interest in Japanese walkability and public transportation, especially given the stark contrast to the car-centric lifestyle I'm accustomed to in the United States. At home, the lack of comprehensive public transit and walkable infrastructure makes driving the only practical option for getting around. Experiencing Japan's efficient public

transportation and pedestrian-friendly infrastructure made me realize how reliance on personal vehicles can limit daily experiences, impact health, and affect overall well-being.

During the whole program, I effortlessly walked to various destinations, ranging from my accommodation to local shops and cultural sites, without the strain of long distances or unwalkable roads. The city's seamless integration of public transit made exploring both convenient and stress-free.

You might wonder why this insight only emerged during this visit to Japan, despite having been there twice before. The answer is straightforward: this was the first time I experienced Japan with real responsibilities, such as waking up at a designated time, attending lectures, and meeting deadlines, rather than simply being a tourist. This shift in perspective allowed me to fully appreciate the practical benefits of walkability and public transportation in a way my previous visits did not.

Additionally, beyond the evident time saved, I encountered several unexpected health benefits. I initially overlooked how significantly walking everywhere would impact my well-being. Over the course of 18 days, I lost 11 pounds, highlighting the increased physical activity incorporated into my daily routine. Furthermore, my sleep quality drastically improved. In the mornings I always woke up feeling rested and energized, while at night I never struggled to fall asleep. I attribute these improvements to the combination of regular exercise and reduced stress from navigating a well-planned, pedestrian-friendly city. These health benefits highlight the effects that walkable environments and efficient public transit can have on overall quality of life.

In summary, Japan's well-designed public infrastructure and walkable roads offer a striking contrast to my usual reliance on a car in the United States. This experience in Kyoto not only highlighted the advantages of well-planned urban environments but also sparked my interest in how cities can be designed to support more sustainable and enjoyable lifestyles. It provided me valuable insights of how American cities can improve their quality of life, by learning from Japan cities.

Final Report

MidnightFerret
KSP Number: 128
University of Florida

1. General impression about the program.

I would like to start off by thanking the professors, staff, and everyone involved in making this program possible. I am also grateful to have been given the opportunity to participate.

The program was very well organized, adequate time was given between each class to move from one building to another or to take a small break. Another aspect I liked is that some days the classes

ended earlier, which allowed going sightseeing further out and the other days classes still ended at a reasonable time, and I was able to stay local or make evening plans.

I liked that the program consisted not only of international students but also Japanese students and staff. This provided a more immersive and authentic experience. It was nice to be able to have conversations with Japanese students about their life in Japan.

Kyoto University itself is very large and beautiful, it took me a few days to get used to finding my way without the map. The lecture classrooms were my favorite, I enjoyed how spacious they were.

The lectures were very informational, and the discussions with the Japanese students were beneficial. I found the Japanese classes extremely helpful. Kashiwagi Sensei had the most wonderful personality and taught us useful phrases from the first class. I can confidently say that her classes made asking for basic yet important things in Japanese very easy.

I also enjoyed the fieldtrip to Lake Biwa, as a geology major, I found a lot of the information very fascinating. Cultural experience day was wonderful, I loved painting my bag and the Bon Odori dance inspired the topic of my final presentation. I enjoyed learning the dance by following the steps of performers that are passionate about their craft. It was also very nice to be able to communicate through movement even if we spoke different languages.

The chosen accommodation was a great choice, conveniently close to restaurants, family mart, as well as bus stops that go to the university and other tourist areas. The hotel staff was very kind and helpful.

The two weeks went by too fast; however, I was still able to form connections that may last a lifetime. I hope to come back to Kyoto, Japan in the future, there is still much to explore.

2. Cultural Experience Day: Cultural preservation through dance.

Humans around the world have found methods of conserving cultural heritage. One of the ways traditions are preserved is through dance. My topic of interest is the Bon Odori Dance, inspired by cultural experience day. In Japan this is performed as a way to welcome the spirits of ancestors as they visit during the celebration of Obon. It honors loved ones that have passed. The dance is also a way to alleviate their suffering as well as show appreciation.

The traditional attire is a summer kimono called a yukata, which varies per region. Each prefecture has their own colors and patterns, and the handheld items can be different as well, such as a fan. The choreography is structured with small steps and hand movements that complement the garments. The dance steps are not identical; however, they do follow a recognizable pattern. Many times, these dances are presented on a stage where the performers can travel in a circle and the audience can follow along.

Traditional dance allows us to experience the past in the present. The lyrics and movement provide a window to our ancestors' thoughts and feelings. For example, during cultural experience day, it was explained to us the importance of rice harvesting and how this would often raise concern. We can also see the tradition and customs established by those before us.

Ways to preserve this rich culture is to continue passing it down through generations. Another method is to share it with other cultures as well as celebrate these festivities in other countries. Currently other countries such as Brazil, Argentina, Korea, United States, and Canada participate in celebrating, due to the Japanese population residing in those nations.

I was lucky enough to be able to experience Bon Odori dancing at the summer festival the same day after learning the dance. It was very moving to see people of many ages and backgrounds all celebrating together.

Works Cited

- Acar, A. (n.d.). *Japanese culture and traditions*. Tea Ceremony Japan Experiences MAIKOYA. <https://mai-ko.com/travel/culture-in-japan/japanese-culture-1/#:~:text=While%20Japanese%20lifestyle%20has%20been,and%20crafts%20from%20early%20childhood.>
- The dance of fools - awa odori*. The Expat's Guide to Japan. (2023, August 18). <https://expatsguide.jp/articles/culture/the-dance-of-fools-awa-odori/>
- Fenton, S. (2024, July 15). *Bon Odori Archives*. Religious Holidays. <https://readthespirit.com/religious-holidays-festivals/tag/bon-odori/>
- Fox pointing to the left*. iStock. (n.d.). <https://www.istockphoto.com/jp/%E3%83%99%E3%82%AF%E3%82%BF%E3%83%BC/%E5%B7%A6%E3%82%92%E6%8C%87%E5%B7%AE%E3%81%99%E3%82%AD%E3%83%84%E3%83%8D-gm1971587451-558463802>
- Free vector: Cute fox pointing finger cartoon vector icon illustration animal business icon concept isolated*. Freepik. (n.d.). https://www.freepik.com/free-vector/cute-fox-pointing-finger-cartoon-vector-icon-illustration-animal-business-icon-concept-isolated_58928655.htm
- Kurita, Y. (2019, April 2). *Shibuya Bon Odori Festival*. QAZ JAPAN. <https://qazjapan.com/dive/shibuyabon-odori/>
- Mikeldi. (2018, December 7). *Bon Odori, the Japanese summer festival to welcome the spirits -*. mikeldicesteros.com. <https://mikeldicesteros.com/2017/07/31/bon-odori-japanese-summer-festival/>
- Stead, J. (2020, October 12). *Bon Odori festival 2014*. Seattle Post-Intelligencer. <https://www.seattlepi.com/seattlenews/slideshow/Bon-Odori-Festival-2014-90060.php>
- What is Awa Odori?*. WAGOKORO. (2018, November 26). <https://en.wa-gokoro.jp/event/Bon-Odori/15/>

Final Report

Michelle

KSP Number: 201

King's College London (KCL)

1. General impression about the program

Japanese lessons

In Japanese classes, we learnt simple but useful Japanese phrases which eases communication in Japan. For example, we learnt self-introduction, ordering in restaurants and university tour. Although the lessons are taught in Roma-ji, it is very helpful for complete beginners to absorb the pronunciation of the Japanese language. After the series of inspiring Japanese lessons, I decided to continue to learn Japanese.

Academic lectures

The series of Academic lectures covers a wide range of topics in breadth and depth, showing the diversity in Kyoto University's research. This allows to look into present issues around the world with new perspective. For example, the academic lecture on whaling and food production allow me to understand these issues with theory and structured arguments.

Field Trip

Shiga Prefecture, La Collina Omihachiman and Biwa Lake Museum have created wonderful memories that I look back with joy and laughs - the calmness and peacefulness in Shiga prefecture; the neatness and dedication to the delicate dessert Baumkuchen; challenging activities with great teamwork. I have made great friendship with my group which each of us from a diverse background and experience.

Cultural Experience

Yuzen-dyeing, known for its vibrant colours and intricate technique, allows me to immerse in this exquisite art of fabric decoration which is a showcase of Japanese nature. Bon Odori dance invites all of us to join in rhythmic movements, fostering a sense of unity and connection among all KSP students and the origin of this dance. Rakugo, the verbal entertainment captivates me with humour and punchlines, adds elements of laughter and thought to the convivial room.

Last but not least, in this program, I feel deeply grateful to all the staff and students who are involved, including professors, application and canteen staff, student leaders and KSP students, who truly demonstrates the friendliness of Kyoto city is known for. It is such a pleasure to be part of this program.

2. From Japanese Tanabata to Shakespeare's Romeo and Juliet

In Yukawa Sensei's lecture, we learnt about different names of the moon have a corresponding meaning such as Mochizuki meaning the full moon and izayoi no tsuki meaning a hesitant moon

and poems of a pair of lover across the milky way. This reminds me about the celestial imageries in Shakespeare's well-known tragedy – Romeo and Juliet.

In the prologue, which set the scenes for the audience, Shakespeare tells us that 'a pair of star-crossed lover took their lives' allowing the audience to imagine the plot from the very beginning. 'Star-crossed' implies fate. 'Star' suggest that Romeo and Juliet are destined to be together, but 'crossed' mean fate will not be in their favour when it comes to love. It will become clear that the couple's relationship is to face hardships. The stars, or fates, are against the lovers, as if their astrology dooms them.

The star imagery is also mirrored in Act 5, where Romeo says 'I defy you, stars' when he learns that Juliet is death. He refuses to accept her death. He decides to return to Verona, but his attempt to defy the "stars" or fate only succeeds in bringing about his tragic end, which again emphasizes that the lovers' destiny is inescapable. The structure of the play itself is the fate from which Romeo and Juliet cannot escape.

Travelling back to the middle of the play in Act 2. 'It is the east, Juliet is the sun.' Romeo describes Juliet as the Sun. The metaphor creates a sense that Juliet is the most beautiful person that Romeo has ever met. That she is bright and overtakes everything around her. He asks her to arise and kill the envious moon. Where envious moon can be describing Romeo's sadness as he previously has an unrequited love for Rosaline, Juliet's appearance in his life overshadows Rosaline or his sadness.

Celestial references are often made in Romeo and Juliet to highlight the theme of destiny and the helplessness of tragedy. Which can be similar to Japanese literature where the milky way is the barrier.

Final Report

Amelia

KSP Number: 202

Newcastle University

My General Impressions of the Kyoto Summer Program

The Kyoto Summer Program (KSP) was an incredible experience and I am very grateful that I was able to participate this year. The wide range of lectures, discussion topics and cultural experiences made this program very engaging and created an environment that encouraged learning, discovery and exploration. I met so many amazing people from across the world and made some truly wonderful friends. The time that I was fortunate enough to spend in Kyoto was informative, intellectually stimulating and gifted me with memories that will shape not only my future academic journey but my future at large too.

The eight lectures that I attended presented a wide variety of topics from telomere biology to traditional Japanese literature. The high level of inter-disciplinarity meant that I was able to interact with new materials from areas of research that were so foreign to me while simultaneously referring back to my existing knowledge and deepening my understanding of areas that I was more familiar with. It also provided common ground between the participating students who may not have understood others' field of study or research.

The participant demographic was even more diverse than the range of lecture topics. With international participants from over 20 universities worldwide, the KSP brought cultures that are so geographically distant from each other, together at a hub of academic engagement and curiosity through our shared interest in Japanese language and culture. Though the program was primarily centred around Japanese culture with language classes, lectures about Japanese research and local cultural experiences, I learnt so much about other cultures in Asia, Central America, and even my European neighbours.

I was also able to interact with areas of study that differ from my own vicariously through friends that I made on the KSP. By having the opportunity to get to know people undertaking research so unlike mine, particularly science and engineering majors, I gained so much knowledge that complemented my own in ways that I did not anticipate. Many of our majors are viewed as separate fields that are entirely removed from one another, but upon mixing with the other students I realised that this isn't the case, and that the division of academic fields cannot be accomplished in such a straightforward manner. I believe that the aim of pursuing higher education is to broaden our knowledge of the world around us, and we should strive to use multi-disciplinary skills and knowledge in a more holistic to improve our lives. In this sense, I value the way that the KSP brought us all together in an integrative environment to facilitate these discussions that brought all of us closer together to step towards the goal of widening our intellectual and social circles.

Comparative Studies with Animals – What is Humanity?

The topic that I have chosen to discuss follows on from the lecture given by Professor Yamamoto about his research with primates because I found it particularly interesting. Professor Yamamoto opened his lecture by asking us, the audience, what we believed set humans apart from animals, what we thought 'humanity' was. Not a single person in the audience could provide an answer that couldn't be disputed. Is it our use of language, our social hierarchies, or perhaps our heightened levels of emotional intelligence? I do not intend to provide an answer to this question, as generations of academics far more knowledgeable and experienced than I have yet to narrow down the pool of possibility. I would rather like to focus on the problem with answering this question; the fact that most human attributes that may be considered to distance us from even our closest evolutionary relatives are found in varying species of non-human animals.

For example, crows can spread information among themselves and even share knowledge with out-group members, particularly when they recognise an experience as dangerous and want to protect

others from a potentially harmful encounter (Cornell and Marzluff, 2011). Professor Yamamoto shared some of his research with horses, finding that groups of wild horses formed complex social structures and respected both intra and inter-group hierarchies (Yamamoto, 2017). And from Professor Yamamoto's research on empathy in primates I was able to find research from de Waal (2007) indicating that empathy is a widespread and complex cognitive process present in animals.

Research with animals shows that their cognitive, emotional and physiological abilities are not as underdeveloped in comparison to humans as we often assume. I find this particularly intriguing because it raises important questions about what it is that makes humans different, how we have come to build establishments such as governments, enforce societal norms, and how we came to possess the reflexivity to even pose these questions to ourselves and develop the technology to investigate what sets us apart from non-human animal species. My interest continues to grow as I ponder the implications of 'humanity' on society, the world, and other species. The origin of the superiority that man often feels in comparison to non-human animals lies within the assumption that we are fundamentally different, and better than, them. However, the more research I find, the less certain I am that this is the case. In fact, the concept of 'humanity' only becomes more complex for me the more that I try to understand it, and I believe this is what draws me to this topic.

Cornell, H. Marzluff, J. (2011) 'Social Learning spreads knowledge about dangerous humans among American crows', *Royal Society Publishing*, <https://doi.org/10.1098/rspb.2011.0957>

Yamamoto, S. (2017) 'Comparison of the social systems of primates and feral horses: data from a newly established horse research site on Serra D'Arga, northern Portugal', *Primates*, 58 (479-484), <https://link.springer.com/article/10.1007/s10329-017-614-y>

De Waal, F. B. M. (2007) 'Do animals feel empathy', *Scientific American Mind*, 18 (28-35), <http://www.jstor.org/stable/24939761>

Final Report

Emily

KSP Number: 203

University of Bristol

My experience of the Kyoto University summer program was overwhelmingly positive! Both the members of staff and the participating home students friendly and welcoming, and the student leaders went to significant efforts to ensure our time visiting was enjoyable and memorable. The lecture topics had a wide variety, and the lecturing professors all came across as enthusiastic about their research areas which made their lectures even more engaging. As someone with an almost exclusively legal background, I enjoyed learning about subjects and issues that I would not otherwise encounter in my academic field. I enjoyed learning more about Japanese history and culture through the lectures, even though they were not explicitly history lectures, as it gave me insight into specific areas or niches that I may not have learned about in a standard Japanese history class or textbook.

The Japanese language classes were fun and easy to understand. Kashiwagi Sensei was an approachable and accommodating teacher, and I am grateful for her help in introducing me to the basics of Japanese grammar. I hope to continue my Japanese language studies now that I have a solid foundation so that if I return to Kyoto I can speak and understand more around me.

I also enjoyed the discussion sessions and how they allowed me to meet and speak to different students. It was interesting to hear different perspectives that were informed by someone's area of study and their background, especially learning about issues specific to Japan within the discussion topics and how that compared to my own experience living in the UK.

The field trip and cultural experience were also lots of fun, especially the yuzen dyeing workshop and bon odori dance session. I was not expecting to enjoy the dance as much as I did, as I am usually quite self-conscious, but the atmosphere felt very relaxed and accepting, and the simplicity and repetition of the dance felt quite meditative.

This experience, and then subsequently watching the bon odori dances performed at a summer festival later that day was one of the most memorable parts of my time in Kyoto, which is why I decided to research it for my final presentation. From observing people joining in with the performers at the festival, as well as being taught myself, it became clear that the dance served as a way to bring people together, regardless of age or background. Further research about the dance and its accompanying songs taught me more about the purpose of the dance and the associated festival, being a way to memorialise ancestors and pass down lived experiences and challenges overcome from generation to generation.

As part of my research I read a journal article by Miho Yamada, Tomoyo Kawano called 'Emerging wisdom through a traditional bon dance in group dance/movement therapy: A single case study of dementia' which documented the benefits concerning the subject's mental and physical health from participating in the dance, due to its communal and social, active, and mentally stimulating nature.

This article affirmed the sentiment I experienced, that 'the dance is a symbol of solidarity in the local community' and explained how 'Anger, grudges, affection, as well as obscenities that may not be expressed in daily life are sung figuratively in upbeat and humorous lyrics', giving the dance a therapeutic or cathartic character, which reflected both the way I felt and the documented observations regarding the dementia patient in their study.

My research inevitably took on a comparative approach, as my presentation topic stemmed from my curiosity about whether an equivalent, or at least similar, cultural, and traditional phenomenon existed in the UK. This then led me to learn more about my own culture and discard some of the biases that I held about it, which I had not even realised existed before – I considered my belief on the subject of traditional English folk dance and its popularity to be fact but was proven wrong. Though my academic field emphasises the importance of not making assumption, I had not realised

I was so guilty of this outside of my legal studies, and so I feel that the research I conducted for my final presentation, and by extension the summer program as a whole, has been incredibly eye-opening and has improved my skills as a researcher and academic. Furthermore, it has ignited in me a curiosity for cross-cultural and comparative studies of culture, an area I intend to pursue through my extracurricular activities, such as student journalism, at least until I complete my undergraduate degree and can perhaps pursue it further in an academic or professional capacity.

Final Report

Ironman

KSP Number: 204

University of Warwick

1. General impression about the program

Firstly, I did not realize until later the well-thought intention behind compulsorily making all international students stay in shared rooms in the same hotel. This was a blessing in disguise because it meant that right from the first day, I had three friends I could count on. And the 25-minute walk from the hotel to our classes gave us the opportunity to have engaging conversations along the scenic route.

As for the English discussions, what made it a learning experience for me was that because people study in different languages in their universities, we learnt how to distil our thoughts into crystal clear English. For the Japanese discussions with KU students, since we were meant to communicate in Japanese only, this specifically allotted time to immediately practice using what I had been learning in the Japanese language classes was very beneficial.

The academic lectures were also very well-designed. One after the other, we were explained in detail about all the different aspects of Japan : its history in chronological order, political economy, sustainable productions, whale history, critical appreciation of its literature, religious inclinations, and women representations. I feel it brought me so much closer to Japan, as if I was really blending in with the people by appreciating their historical perspectives and family traditions.

And by having such a diverse range of fields, it gave me the opportunity to take a break from my 'Accounting and Finance' course, and experience so many new fields of study that I have never tried before. Because of these lectures, everyone is sure to find new interests in fields outside of their own.

And finally, both the field trip day and the cultural experience day were the ones that made the KSP most memorable for everyone! The locations and activities choices were perfect, so varied as to let us feel Lake Biwa's calmness, Rokugo's pleasant humor, the exciting Baumkuchen shop and factory tour, the lively Bon Odori dance, and so much more.

Indians generally come to Japan only for tourism, and everyone was surprised when I wanted to come to this KSP for studying. Over the two weeks, my conversations with so many Kyodai students gave me a fantastic impression of the academic scenario in Japan. There is no doubt that Japanese universities are as intellectually stimulating as universities in the UK and any other Western countries.

2. Meeting Japanese Tea's increasing demand

I have always observed that people of my generation in both India (a developing country) and the UK (a developed country) do not prefer tea as much as they prefer soft drinks. In Japan, this generation would choose the convenience of buying a RTD (ready-to-drink) tea bottle rather than steeping leaves in a teapot.

But even with my small sample pool of asking a few Kyodai students, I am certain that they would still prefer tea than a soft drink. And adding to that the increasing inflow of tourists who also demand Japanese tea, I wondered how the country was meeting this rising demand.

Combining all these thoughts with Professor Kondo's lecture about food sustainability and keeping up with demand, I decided to look into SDG 12 : Sustainable Production.

I learnt about the slow but concerning decline in production volume of Japanese tea. About 40% of these tea plantations are more than 30 years old, which is a reason for their decreasing yields. I also researched different statistics and explanations for the decreasing tea garden area.

I had the opportunity to meet a tea expert in Kyoto and discuss various points with her. She talked me through the significant value of Japanese tea and the tea ceremony, about 'Ichigo-Ichie', and so many more philosophical aspects connected to it. And also the technical aspects of advancements in techniques at the tea farms, production process, and what measures the producers are adopting for a sustainable increase in the supply.

I learnt that all these Japanese tea companies are coming up with different innovative solutions to meet the increasing demand while maintaining the sustainability. I read a lot of motivating information about Japanese farmers striving to ensure sustainable practices on the plantations.

This case study of Japanese tea gave me the wonderful opportunity to explore sustainable practices in food production, paired with real-life learning. It has helped me expand my knowledge and skillset about sustainability, which I have never learnt about in such detail before.

Final Report

Joe

KSP Number: 208

University of Hong Kong

1. General impression about the program

The program offers me a perfect opportunity to interact and make friends with KyotoU and students worldwide, as well as the chance to experience the life of KyotoU student. All the lectures, lessons, cultural experiences, field trips, and discussions explored my eyesight, deepened my understanding of some of the issues, and helped me understand more about Japan and the world. At the same time, KU teachers and students tried to make us enjoy this program. I truly thank and appreciate their passion and carefulness. 2024 summer is an unforgettable. Thank you very much.

2. Topic: Reflections on Japanese High School Sports Culture

Whenever people talk about competitive sports or competitions, there is always a quote: "No one remembers who came in second." Every athlete wants to be the winner, as they enjoy the joy and happiness gained by themselves, and people would only remember the winner.

Prof Kawai gave us a lecture. There was a documentary clip about 甲子園, and the atmosphere gave me some insight into this topic. In Japan, the high school sports madness is not only baseball but also basketball, football, running(駅伝), etc. High school athletes are passionate about being part of the games, and everyone aims to be the champion. The champion draws all the attention, and people share their happiness and joy with them. But meanwhile, there's only one winner, and how about for those who lost?

Student-athletes who cannot fulfill their dreams struggle with complicated emotions. Sadness, desperation, anger, fear, frustration—lots of negative emotions come within a second—not only for the athletes but also for the coach, friends, families, and people who support them. Lots of philosophers have different views on the meanings of sports. But I tend to argue that sports allow people to learn to face and accept their failures. Losing one game is not a big deal, but we have to try to learn something from failures to excavate their meanings. However, the meaning of sports is universally shared. People can learn it in the USA, Africa, Europe, and everywhere else. Then, what makes Japan unique?

The anime culture is like a kind of fuel or catalyst, boosting the youth to chase and keep working on their dreams. The messages and philosophy they deliver are so influential. Because it is not purely fiction, but the ideas and inspirations are perceived in real life. These kinds of beliefs and values, both from anime and reality, interact with each other mutually. So, in the anime, especially in season 1, it's normal to see the main characters lose the games. But they will catch all kinds of emotions, sadness, desperation, fear, and anger, making themselves stronger and stronger and returning repeatedly.

At the end, a video play on the lecture, a documentary about the 甲子園 player. When he got his jersey, no.18, the last player got drafted into the team. The coach told him, "you are not playing on your own, but also on behalf of the teammates who couldn't play, coach, friends, families, and every supporter. Please carry these expectations and hopes, and do your best not to disappoint people who believe in you! "

Carry on and carry on. We will never know how much these youngsters are carrying. Winning is happy and desirable, but sometimes, growing up, we have to face many failures, just like in our lives. But, in this process, learn to accept failure, embrace failures, and overcome failures.

Final Report

Amadeus

KSP Number: 209

Charles Darwin University

1. General Impression about the program

After returning home from the program, the first thing I was hit by was a wave of memories; while I had been to Japan before, this trip was an incomparable experience. On the first day of the program, I remember being overwhelmed in a room of new people, but while the ice breakers slightly quelled what fears I had, however hearing Tadashi Tokieda giving one of his famous lectures, the prestige of this program had settled in. As the days passed, I grew to appreciate the way of life presented to me by this program, going to classes, talking to new friends, both international and Japanese nationals and experiencing new activities. One of the experiences that left a great impression on me was the Yuzen fabric dyeing; being able to create beautiful pieces of art that I could share with others was truly inspirational; after being inspired by the Lake Biwa Museum, I opted to make a scene underwater, with beautiful fish adorning the bag that I had selected for this very process.

Each of the lectures we were offered gave fruit for thought, and while I couldn't experience them all, out of the 10 I was able to, they each inspired me. A lecture that I found that particularly intrigued me was Professor Yukawa's lecture on the "Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature" Throughout my daily life, I often listen to Japanese media, whether it be audiobooks by famous authors or popular songs that I happen to come across, the Japanese language and how its translated into English is something that fascinates me, so when I experienced that lecture on a slice of how the language can be controlled to create pieces of waka poetry, it truly caught my attention.

The program gave me a chance to try new experiences with new people; I'll never forget how accommodating everyone was. These two and a half weeks have left memories that I'll cherish for the rest of my life, and even though now I'm thousands of kilometres away from it all, Kyoto and the university will have a special place in my heart.

2. Public Transport in Kyoto

Throughout the program, the most common way I and many of the other participants would commute around Kyoto was through public transportation. I originally wanted to talk about how this compared to my home city of Darwin for my presentation, but even though I wasn't able to speak about it, it still fascinates me.

Of the many forms of public transport in Kyoto, the bus was the main form of transportation that I took throughout the trip; due to crime and general antisocial behaviour, the buses in Darwin are generally inadvisable, and with no other forms of public transportation in Darwin taxis or having a vehicle are the only ways to get around. The first interesting item is the bus timer; most of the bus stops have a timer describing which buses arrive and depart from that stop as well as providing an estimated time of arrival for each bus; while this may seem kind of trivial with apps like google maps, for someone who had never used the Kyoto bus system before this was often times the ideal way of telling when the next bus was coming, while google maps were convenient it was often times wrong whether it be due to traffic or buses coming earlier than planned.

While I didn't use the trains as much, Japan is famous for its train system; this is in stark contrast to my home city, in which no infrastructure like this exists; regardless of this, I found the system interesting enough to want to learn more about it. When speaking to the native students, I noticed that they would speak very highly of the subway systems in bigger cities like Osaka and Tokyo, but when talking about the system in place in Kyoto, they described it as not being as developed, while this opinion shocked me, I believe it displayed the large gap of expectations in quality in terms of public transport.

In conclusion, the differences in how public transport is used and perceived in both cities were of great interest to me, and its convenience made my trip around Kyoto much smoother.

Final Report

Kai

KSP Number: 210

Erasmus University Rotterdam

1. General impressions about the program

The program in general is comprehensive and will form good memories for those who attended this program. The discussions were organised well and the topics were contemporary and interesting to take part in because you get to widen your worldview by conversing with people from different cultures. I have for instance learnt that AI can be used to diagnose dermatological complications and separate them from cases where no special assistance is needed, I have also learnt that gender issues are still more prominent in Japan than I thought before. The lectures were interesting and worth attending because of their cultural or contemporary conveyance of information which can help the

students learn about Japanese culture and the issues surrounding it, or a global perspective on contemporary issues.

The Japanese lessons were very helpful to me, as I considered myself to be proficient in grammar and listening, but not in my lexicon. During my time in the Japanese lessons, I have learnt several new Japanese words that I have already had to use several times, which indicates to me that I have already started to use the knowledge that was taught to me, and thus is highly relevant. The conversations in Japanese classes were a good way to practise my Japanese and also to catalyse the befriending process between KU students and international students. The cultural experiences were interesting to attend to, and most importantly, fun to participate in.

Improvement points are occasional unclarity about submissions and assignments, as well as the hand-in process. To my knowledge, a large portion of students including me had trouble handing in assignments on panda, with no indication of how to continue.

All in all, I have absolutely enjoyed my time at Kyoto University, and I hope that future generations will share the same thoughts as I do.

2. Seishun: differences in conceptualisation of youth between different countries

During the lecture by Professor Kawai, a large part of the second video shown was about bukatsu, which made me think about the Japanese word Seishun. However, I shortly after came to realise that my friends who had different nationalities than I did not get what I was trying to say when I said that the fragments reminded me of Seishun. I also did not think of the video fragments as being representative of the Dutch term for youth: “Jeugd”. This is where I came to realise that there most likely was a conceptual difference in the term “youth” in the respective countries' vocabulary. I have tried to find a way to explain how this phenomenon occurs by thinking about what I had learnt in Psychology for the past two years and found that there are different approaches to try to explain how conceptualisations could work for humans.

The most probable approach to this phenomenon is the spreading activation model. Proposed by Collins and Loftus in 1975, it postulates that concepts are interconnected and disseminated to other concepts that activate as the main concept is triggered. This is a simple explanation of how the word “youth” in different languages can trigger different concepts that are associated with that respective word. For instance, in my case, I have lived in the Netherlands all my life, which would indicate that I would conceptualise the Dutch word “youth” using the experiences that I have accumulated during my time living in the Netherlands, and thus connecting the Dutch word for youth: “Jeugd” to words that describe such experiences. For instance, hearing the word “Jeugd” reminds me of gaming with friends, cycling to high school, and high school in general. Now, when I think of the word “Seishun”, I will activate different concepts than the word “Jeugd” because Seishun is a Japanese word and thus involves concepts that are unique to Japanese youth. Prime examples of such unique concepts are bukatsu, school uniforms, and apparently from what I have heard from some Japanese people, the following concepts also activate when asking them about Seishun: Jumping in the pool with the school uniform on, big white clouds on a horizon blue sky, and summer and spring season.

This topic caught me by surprise and I have already searched for alternative ways to explain the differences in the conceptualisation of youth, like the prototype and exemplar approach of concept formation.

第二部

京都サマープログラム 2024 (KUASU)

《主催》



《共催》



京都大学
国際高等教育院

9. 京都サマープログラム 2024(KUASU プログラム)

9.1 設立の経緯と目的

国際的に活躍できる人材の育成と大学教育の展開力の強化を目的として、平成 23 年度から大学の世界展開力強化事業 (Inter-University Exchange Project)がおこなわれてきた。この事業が焦点を置いているのは以下の 2 点である。

(1) 日本人大学生の海外留学

(2) 外国人大学生の戦略的受入にかかわる国際的大学間連携

「京都サマープログラム 2024」は上記の(2)のタイプに属している。アジアの諸大学の学生を大学間連携に基づいて受け入れる事業として開始された。以下、簡単に年表を示す。

平成 23 年度	文部科学省による大学の世界展開力強化事業が開始
平成 24 年度	KUASU による《「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成》が世界展開力強化事業の 1 つとして採択される
平成 25 年度	京都大学国際交流センターが KUASU を構成する 1 部局としてのプログラム(派遣・受入) 実施および実施準備を開始
平成 26 年度 2 月	第一回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが実施される (森真理子・教授／国際交流センター長、佐々木幸喜特定助教が担当)
平成 27 年度 2 月	第二回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが実施される (河合淳子教授、稲垣和也特定助教が担当)
平成 28 年度 8 月	第三回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、稲垣和也特定助教が担当)
平成 29 年度 8 月	第四回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、稲垣和也特定助教が担当)
平成 30 年度 8 月	第五回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、西島薫特定助教が担当)
令和元年度 8 月	第六回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、西島薫特定助教が担当)
令和 2 年度 2 月	第七回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、西島薫特定助教が担当)

令和3年度 8月	第八回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、西島薫特定助教が担当)
令和4年度 8月	第九回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、張子康特定助教が担当)
令和5年度 8月	第十回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、張子康特定助教が担当)
令和6年度 8月	第十一回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大 学 学生 の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される (河合淳子教授、韓立友准教授、若松特定准教授が担当)

令和6年度8月に実施された今回の京都サマープログラム2024は、第11回目となる。平成28年度から、ILASプログラムとカリキュラムの一部を合同で実施し始め、令和元年度までに合同でおこなうカリキュラム内容はさらに拡大するとともに相互連携もより深まってきた。令和6年度のKUASUプログラム参加対象大学は、インドネシア大学、チュラーロンコーン大学、ベトナム国家大学ハノイ校(外国語大学・人文社会科学大学)のアセアン3大学およびカリフォルニア大学サンディエゴ校、ハイデルベルク大学、香港中文大学、国立台湾大学である。プログラム準備段階において、上記7大学に、(1)日本学関連領域(日本学、日本文学、日本史学等)を学ぶ、(2)学士課程または修士課程に在籍する、という参加条件で学生募集の依頼をおこなった。

受入プログラムだけでなく、派遣プログラムも、京都大学とアセアン諸大学の間におけるより良い国際的連携・協力の蓄積に寄与することが期待されており、日本とアセアン諸国で国際的に活躍できる留学生／日本人大学生の育成を目的としている。加えて、KUASUが掲げる3つのミッションに準じ、(i)世界最高基準の日本研究の統合・体系化を見据えた日本語・日本文化教育の実践、(ii)日本とアセアンが互いに抱える諸問題の共有・解決を見据えた共同学習の実践に、受入・派遣プログラムの主眼が置かれている

実質的な観点から見ると、受入プログラムは派遣プログラム(上記(1)の「日本人大学生の海外留学」と密接に連動している。京都大学／アセアン諸大学の同じ学生が、受入プログラムにも派遣プログラムにも参加することにより、交流・共同学習のリレーが続いているためである。京都大学学生と留学生間のコミュニケーションがSNSを媒介としてプログラム後も継続的に続いており、本プログラムが国際的な相互交流のきっかけになっている。

9.2 KUASU プログラムの特徴

KUASU プログラムにおける主な教授言語は日本語である。ただし、教育・学習における媒介言語としての英語の重要性、そしてILASプログラムとKUASUプログラムの学生達が合同でプログラムの一部を受講するため、アカデミックレクチャーは基本的に英語でおこなった。本年度のKUASUプログラムのカリキュラムの特徴は、(A)日本語での学生交流、(B)文化学習、(C)共同発表である。

(A) の日本語での学生交流に関しては、主に(C) の共同発表の準備および Discussion Session にておこなった。共同発表の準備では、以下の表の通り、本学学生サポーター、本学受講生そして海外学生からなる多国籍のグループを作った。発表準備はグループごとにブレイクアウトセッションを用いておこない、発表で使用するスライドの作成を日本語にておこなった。発表準備は参加学生たちが密度の高いコミュニケーションをおこなう場として、本プログラムの中でも重要な位置を占めている。さらに Discussion Session では、合同発表とは異なるグループをつくり、「生成 AI の導入と社会」「ジェンダー」「英語の共通言語化」などアカデミックレクチャーと関連するテーマについて討論をおこなった。(B) に関しては、Cultural Experience において、今年度はテーマを「友禅染体験」と「ハンコ作り」「茶道体験」の三本立てとした。古代友禅株式会社での友禅染体験や、漢字ミュージアムでのハンコ作り体験を実施したほか、京都大学・京都府立医科大学表千家茶道部の協力を得て、清風荘にて実際に茶道体験を行った。(C) に関しては、本プログラムの成果を本学学生と合同で発表してもらった。また日本語の授業を担当して頂いた先生方にもそれぞれの発表についてコメントを頂いた。各グループの発表テーマは以下 9.3. の表の通りである。

9.3. 共同発表

共同学習における発表タイトルと発表者

1. 「各国の失恋ソングの比較」 (＝各国の失恋ソングの比較)		
KSP301	Trish	ベトナム国家大学ハノイ校・M1
KSP310	Pakkadkaew	チュラーロンコーン大学・B1
KSP314	Ian	国立台湾大学・B1
KSP408	Meo	京都大学教育学部・B2
KSP421	Koharu	京都大学農学部・B1
リーダー	Michi	京都大学文学部・B2
2. 「変わるもの、変わらないもの」 (＝各国の文化の比較)		
KSP302	Mia	ベトナム国家大学ハノイ校・B3
KSP308	Phud	チュラーロンコーン大学・B1
KSP315	Alice	香港中文大学・B3
KSP405	Taka	京都大学理学部・B1
KSP412	Tate	京都大学総合人間学部・B2
リーダー	Shota	京都大学文学部・B2
リーダー	Natsuko	京都大学教育学部・B2
3. 「お茶とは何か？」 (＝各国のお茶の比較)		
KSP304	Aki	ベトナム国家大学ハノイ校・B3
KSP309	Namtarn	チュラーロンコーン大学・B1
KSP312	Allen	国立台湾大学・B4
KSP437	Hitomi	京都大学文学部・B1
リーダー	Satoshi	京都大学文学部・B3

4. 「 HAIKU:17 音、その一瞬が光り出す 」 (=各国の俳句の比較)		
KSP305	Ame	ベトナム国家大学ハノイ校・B3
KSP307	Neena	チューラーロンコーン大学・B1
KSP311	Winston	カリフォルニア大学サンディエゴ校・B3
KSP403	Tamaki	京都大学工学部・B1
KSP427	Masa	京都大学工学部・B2
KSP439	Liz	京都大学総合人間学部・B1
リーダー	Ayumi	京都大学経済学部 B2
5. 「 ヤンキー MY LOVE 」 (=各国のヤンキーの比較)		
KSP303	Moon	ベトナム国家大学ハノイ校・B3
KSP306	Boston	チューラーロンコーン大学・B1
KSP313	Jimmy	国立台湾大学・B2
KSP316	Tau	ハイデルベルク大学・B2
リーダー	Hiro	京都大学理学部・B4

「各国の失恋ソングの比較」



「変わるもの、変わらないもの」



「お茶とは何か？」



「**HAIKU:17 音、その一瞬が光り出す**」



「ヤンキー MY LOVE」



9.4.参加学生報告

最終レポート

ハノイ国家大学外国語大学・大学医学部・一年生

KSP301

Trish

1. プログラムに参加したきっかけ

このプログラムに参加することは、私のアカデミックで専門的な目標を前進させる素晴らしい機会になると思います。

京都大学は長い歴史と多様な専門分野を持ち、日本で最も高く評価されている大学の一つであると理解しています。京都大学の先生や優秀な学生とのつながりや活動を通して、自分の社会的ネットワークを広げ、日本語のコミュニケーション能力を向上させ、日本の環境で働く経験を積むつもりです。

また、京都大学の科学研究や文化研究にも興味があります。このような活動に参加することで、将来の研究に役立つ新しい経験や能力、知識を得たいと思っています。さらに、私は日本、特に京都の人々や風景がとても好きです。この交流プログラムのおかげで、地元の生活様式や文化についてもっと学ぶことができると思います。

私は京都大学のサマープログラムに参加する機会を熱望しています。この経験は私の学問的・職業的成長にとってかけがえのないものになると確信しており、この機会を最大限に活用することを約束します。

2. プログラムへの参加を通じて学んだこと

日本語の授業では、文学作品や記事を読んで京都について学ぶ機会がありました。白方先生は授業中、私たちを指導し、たくさん助けてくれました。また、日本の伝統的な詩の形式、特に俳句と短歌についても学びました。日本語の授業のおかげで、日本の伝統的な詩形である短歌を自分で作ることができました。

3. プログラムの感想

このプログラムのおかげで、私はさまざまな国から来た多くの新しい友人と出会い、京都大学の優秀な学生たちとも知り合うことができました。このプログラムに参加したことで、鴨川沿いの美しく歴史ある京都の街を散策できただけでなく、素晴らしい思い出を作ることができ、本当に有意義な夏を過ごすことができました。京都大学の教授陣が指導する魅力的なトピックに関するアカデミックなセッションに参加できたことは、私の知識を広げ、世界に対するより多様な視点を与えてくれました。授業と並行して、私たちは伝統的な文化体験を楽しみ、地元のリーダーと一緒に有名な名所を探検しました。日本人の学生たちは、この経験全体を通して驚くほど協力的でした。

4. 特に印象に残ったことなど

最も印象に残ったのは京都大学だろう。キャンパスの中に伝統的な要素と現代的な要素が融合しているのを感じました。それだけでなく、京都大学はそこで学ぶすべての学生に優れたリソースとサポート環境を提供している。先進的な設備から尊敬すべき教授陣まで、すべてが創造性と全人格的な成長を促すように設計されています。またこの大学を訪れる機会があればと心から願っている。キャンパスとサマープログラムの思い出は、いつまでも私の心に残るだろう。

最終レポート

ハノイ国家大学外国語大学・日本語文化学部・3年生

KSP302

Mia

1. プログラムに参加したきっかけ：

日本での学びについて調べ始めた頃から、京都大学に強い印象を受けており、ここで大学院生になることが私の夢でした。したがって、このプログラムの情報を知ったとき、すぐに応募しました。京都大学についてさらに理解を深める絶好の機会だと感じたからです。

2. プログラムへの参加を通じて学んだこと：

このプログラムを通じて、様々な活動やセッションに参加する機会を得ました。最も面白い体験は茶道の体験です。日本の伝統文化の奥深さや茶の湯に込められた精神を肌で感じることができました。茶道の動作や所作の一つ一つに深い意味があり、そこに日本の精神や美意識が表現されていることにとても感銘を受けました。この経験は私にとって非常に貴重であり、日本文化をより深く理解する機会を与えてくれました。

また、「学校教育にみる日本文化の諸相」という学術講演は大変感銘を受けました。日本の教育システムがどのようにして文化的価値観や社会規範を育んでいるのかを深く理解することができました。特に、日本の学校教育における集団主義と協力の重視が社会全体にどのような影響を与えるかについての説明が印象に残りました。この講義に参加することで、日本文化をより深く理解することができ、教育の大切さについて新たな視点を得ることができました。

3. プログラムの感想：

二週間という短い期間でしたが、プログラムを通じて得たものは期待以上のものでした。日本のトップ大学で学ぶ貴重な機会や、世界中から集まった優秀な学生たちとの交流だけではなく、かけがえのない精神的な価値も含まれています。このプログラムを通じて、私は自分自身を見つめ直し、改善すべき点や伸ばすべき強みを明確にする機会を得ました。学びとは、自分自身の努力だけでなく、周りの人々との深いつながりを築くことが不可欠であることに気づかされました。

4. 特に印象に残ったことなど：

京大生との会話活動を通して得た経験は私にとって非常に貴重なものです。言葉の壁を感じることもありましたが、友達の優しさのおかげで、徐々に日本語でのコミュニケーションに自信が持てるようになりました。また、日本の文化や価値観についても多くのことを学ぶことができます。例えば、日常の挨拶や礼儀作法、日常生活での立ち居振る舞いなどを学ぶことで、異文化への理解が深まります。日本語力だけでなく、人と人とのつながりの大切さを改めて実感することができました。

最終レポート

ハノイ国家大学外国語大学・Faculty of Japanese Linguistic & Culture・3年生

KSP303

Moon

プログラムに参加したきっかけ

私がこのプログラムに参加したきっかけは、国際的な経験を積み、多様な視点から物事を考える力を養いたいという強い思いがあったからだ。特に、文化の異なる人々との交流を通じて、新しい価値観や考え方に触れることで、自分自身の成長に繋がりたいと考えていた。また、このプログラムが提供する様々なフィールドトリップや文化体験を通じて、日本の歴史や伝統文化を深く学ぶ機会を得られることに強く惹かれた。

プログラムへの参加を通じて学んだこと

プログラムを通じて、多文化共生の重要性を学んだ。プログラムには多国籍の参加者が集まっており、それぞれが異なる背景や価値観を持っていた。これにより、他者を尊重し、異なる視点を受け入れることの大切さを改めて実感した。ディスカッションやグループワークでは、自分とは異なる視点からの意見が数多く出され、それらを取り入れることでより豊かな議論ができたと感じている。また、コミュニケーション能力の向上も大きな収穫だった。異なる言語や文化の中で自分の考えを伝える力が試される場面が多く、その都度、新しい表現方法やアプローチを学ぶことができた。

プログラムの感想

このプログラムに参加して特に印象深かったのは、熱心で親切な教師や京都大学の大学生たちとの交流だ。彼らは私たち参加者に対して非常に温かく接してくれ、いつも私たちの学びをサポートしてくれた。特に、彼らが提供してくれたさまざまな活動や授業は、学びを深めるだけでなく、日本の文化や社会についての理解を深める機会となった。

教師たちの講義は、内容が充実していて非常に面白かった。特に、日本の歴史や文化に関する講義は、単なる知識の伝達ではなく、実際の生活や社会にどのように根付いているかを実感できるような工夫がされていた。具体的な事例や実際の体験を交えながら説明してくれるため、学ぶ内容が頭にしっかりと入ってきた。

また、京都大学の大学生たちが企画してくれた活動も、非常に楽しいものだった。彼らは私たちにとっての日本文化の「橋渡し役」として、私たちが迷わずに楽しめるように工夫してくれた。特に、地元の人々と一緒に行った活動や、日常生活での小さな発見など、彼らとの交流を通じて多くのことを学んだ。

さらに、美しい京都の町もこのプログラムの中で忘れられない要素の一つである。京都の風景は四季折々の変化が楽しめ、その中を散策するだけでも心が癒された。また、歴史的な寺院や神社、伝統的な街並みは、単に観光地としてだけでなく、日本の心を感じられる場所として深く印象に残っている。

終わりに

このプログラムに参加したことは、私にとって非常に意義深いものだった。国際的な視野を広げると同時に、日本の文化や自然に対する理解も深めることができた。プログラムを通じて得た経験や学びは、今後の人生においても大いに役立つと確信している。機会があれば、またこのようなプログラムに参加し、さらに自分を成長させていきたいと思っている。

最終レポート

ハノイ国家大学外国語大学・Faculty of Japanese Language and Culture・3年生

KSP304

Aki

1. プログラムに参加したきっかけ

大学の報告から京都サマープログラムを通じて知った。その時は、京都大学の自由な学習・研究スタイルで知られており、以前から大変興味を持っていた。そのため、京都大学の自由な研究のスタイルは一体何かという思いを持ち、京都サマープログラム 2024 に応募することを決意した。

2. プログラムへの参加を通じて学んだこと

京都サマープログラムから、主に3つのことを学んだ。

最初は、大学生活と日常生活の中で、日本生活を深く体験する。ICカード、日本の電車、コンビニのサービス、様々な「**日本のみのこと**」を体験した。また、多文化社会で、お互いの文化を尊重しながら生きていくことを学んだ。

次は、先生のアカデミック講座から得た貴重な知識だ。動物学か、言語学、教師不足、女性レボリューションなど、とても有利なことだった。

最後に、京都サマープログラムの中で私の日本語と英語の聴解、読解、話すスキルを改善する。ルームメイトと話すことから京都大学の学生たちと日本語の発表をすることまで、貴重なメモリだと思う。

3. プログラムの感想

プログラムの感想については、自分にこのプログラムに参加したことを感謝している。京都サマープログラムは実践言語練習の機会だけではなく、17日多文化共生を実行することもある。

4. 特に印象に残ったこと

「日本古典文学に見る日本人の美意識」の講座でいろいろな美しい言葉を学んだ。**四季、季語**という言葉はベトナムの大学で勉強したが、その講座の内容はもっとも広く知識を受け入れられると思う。

一番印象的なことは「**暁**（あかつき）」という言葉だと思っている。「暁」という単語を聞くと、「NARUTO」のアニメを真っ先に思い浮かべてしまうほど、私の中に強いイメージが刻み込まれている。

講座の中で、「暁」は夜が明け始める前のまだ暗い時間帯（およそ午前3時から5時頃までのこと）と勉強した。「暁」は古代において、「あかとき・明時」といつている。

それだけではなく、「暁」の意味も状況や作者の感情によって違うことがある。恋愛や別れや将来期待など、人々が自身理解があるとおもう。また、「辞書編集者が選ぶ美しい日本語101」の本で、斎藤茂吉の最終歌集「つきかげ」に、「死」の意味も表す。言葉は、本当に面白いと思っている。

最終レポート

ハノイ国家大学外国語大学・日本語文化学部・3年生

KSP305

Ame

①プログラムに参加したきっかけ

私の専攻は日本語と文化なので、日本に留学して、日本の生活や文化を直接体験したいという気持ちがありました。京都大学のサマープログラムを選んだのは、日本語とベトナム語の翻訳の授業で京都大学の紹介動画を見て、その歴史と実績に感銘を受けたからです。特に、京都には多くの歴史的な観光地があるため、一度訪れてみたいと思っていました。

②プログラムへの参加を通じて学んだこと

このプログラムを通じて、日本語の授業やアカデミックレクチャーに参加し、日本語の知識や日本の社会に関する知識を深めることができました。特に、最終発表では俳句をテーマに発表を行い、俳句の奥深さや面白さを知ることができました。また、このプログラムでは、様々な国籍の学生とグループワークをする機会があり、チームワークを学ぶことができました。

③プログラムの感想

京都サマープログラムは、私にとって忘れられない青春の思い出です。このプログラムに参加できたおかげで、憧れの京都大学を訪れることができ、親しみやすく熱心な先生方と出会うことができました。そして、京都大学の学生たちや、世界各国から集まった学生たちとの交流も貴重な経験となりました。皆さんのポジティブなエネルギーにいつも励まされ、素晴らしい友情を築くことができました。

④特に印象に残ったことなど

このプログラムで最も印象に残ったことは、日本の文化や生活を体験できたことです。琵琶湖博物館の見学では、琵琶湖の歴史や変化について学び、その独創的な建築に感動しました。また、友禅染め体験で作った鳥の絵柄のバッグは、私のお気に入りです。印鑑作りは少し難しかったですが、「夢」と「豊」の文字を刻むことができ、今回の日本への旅が私にとって夢のような時間だったことを表現できました。そして、静かな茶室「清風荘」で抹茶をいただき、日本の伝統文化に触れる貴重な経験となりました。

最終レポート

チュラロンコン大学・文学部・1年生

KSP306

Boston

① プログラムに参加したきっかけ

ずっと前から日本に留学したがっていたが、できなかった。高校の時もチャンスがあったが、コロナのせいで、中止された。大学に入って、先生からこのプログラムを知って、参加したくなった。さらに、留学先は憧れの京都大学だ。京都大学は文学の知名度が高くて、様々な文学的な研究が行っていることが知られている。文学部に所属している自分も、京都大学に進学する興味もある。なので、このプログラムに参加した。

② プログラムへの参加を通じて学んだこと

個人的に最も貴い学んだことは俳句のことである。自分は俳句のことを前々から知っていた。「5・7・5」や「季語」といった俳句の規則もよく知っている。でも、規則だけはいいい俳句が詠えるわけではない。それに、俳句はどんな風に詠えばいい俳句になるか、さっぱり分からなかった。何度も俳句を詠っても満足が得られない。しかし、プログラムの授業で色々な美しい俳句が出て、いい俳句はどんなものかはやっと分かった。そして、満足を得る俳句が詠えた。

③ プログラムの感想

プログラムは様々な美点があるけれど、先に思い浮かべたのは外国人の友達が作れることだ。外国人の友達ができることは色々な利益があるが、最も目立つ利益は外国人に対する先入観を捨てられることだ。外国人に対する先入観はメディアにし屡々出てくる。その先入観は自分に入り込んでしまった。でも、外国人の友達ができてから、その先入観は全く違うと分かった。そして、自分はそう信じたのを悔やんでいる。

プログラムの美点を語ったので、欠点を語らざるを得ない。プログラムでは様々な面白くて、ものすごく勉強になる授業が沢山あるが、そうでない授業もある。それは非常に深い内容が含まれる授業である。深い内容のせいで、授業の分野が詳しくなかったら何も分からなくなってしまう。

④ 特に印象に残ったことなど

最も印象に残っているのは「Cultural Experience」の日である。友禅、茶道、盆踊りといったことを体験するのは、正確に貴重な経験なのだ。母国のタイでは色々な日本文化を輸入したが、そういうことはタイで体験できないでしょう。

最終レポート

チュラロンコン大学・文学部・1年生

KSP307

Neena

1 プログラムに参加したきっかけ

このプログラムに参加したきっかけは日本語と日本文化に興味があり、日本についての理解をもっと深めたいと思っていたからです。このプログラムでは、京都大学で学ぶ機会が得られ、様々なテーマの学術講義を通じて、日本社会と日本文化をもっと深く理解できると思っていました。それに、日本人学生と直接話す機会もあり、タイ文化と日本文化を交流できます。また、このプログラムでは、実践的な文化体験活動もあり、日本についての知識を豊かにできると思っていましたので、このプログラムに参加したいと思っていました。

2 プログラムへの参加を通じて学んだこと

学術講義を通じて、日本の経済や教育、日本の様々な側面について学びました。私のグループの発表テーマは「俳句」だったので、俳句の歴史や俳句の書き方も学びました。日本人の学生達とほかの国の学生達と一緒にグループ発表を準備する中で、色々な国の労働文化を体験しました。それに、日本語クラスに参加し、日本人の学生と話す機会があったので、日本語を話す練習ができました。他には、約2週間日本に滞在し、日本社会での日常生活の過ごし方が体験できました。

3 プログラムの感想

学術講義のテーマは多様で面白く、日本について様々な視点から知識を得ることができました。文化体験活動で茶道、漢字の博物館と、友禅染、体験したことがない貴重な経験ができ、とても楽しく、良い勉強になりました。フィールドトリップの琵琶湖博物館でのゲームのおかげで、博物館の見学がさらに楽しくなりました。また、ILASとKUASUの学生が混ざってグループ分けされることで、新しい友達と出会うことができ、楽しかったです。

4 特に印象に残ったことなど

京都大学生達と他の国の学生達に会え、一緒に時間を過ごせたのは幸せでした。皆さんはとてもやさしくて、色々なことを手伝ってくれました。日本での生活を通じて、日本の自然の美しさと日本人の優しさに感動しました。一生忘れられない経験になりました。

最終レポート

チュラロンコン大学・Faculty of arts・1年生

KSP308

Phud

プログラムの期間がタイの大学の休暇とちょうど重なったため、日本についてもっと知りたくて応募しました。結果、日本という国だけでなく、日本語、文化、習慣についても深く学ぶことができ、また親切な友人たちと出会えたことは、このプログラムでしか体験できなかったことだと思います。行ってみて本当に良かったと感じています。

授業の中で一番好きだったのは、日本語上級クラスです。これまで知らなかったことや、京都に来なければ知り得なかったことがたくさんあり、とても勉強になりました。特に日本の短歌や新聞を読んで、日本の学生たちの視点を知ることができたのは教科書では得られない貴重な経験でした。授業が始まった当初は皆が静かで緊張していましたが、日が経つにつれて仲良くなり、日本以外、例えばベトナムの文化についても理解が深まりました。ある日本語のレクチャーで内容が分からなかった際、隣の友達に尋ねようと思ったところ、前に座っていた日本人の学生が私に向かって丁寧に説明してくれたことには大変感動しました。参加者、スタッフ、先生方には本当にお世話になりました。

このプログラムを通じて学んだことは授業の内容だけでなく、数えきれないほどの貴重な経験がありました。一つ印象に残っているのは、参加者たちが非常に優しく、フレンドリーで、タイに帰ってからも連絡を取り合い、今でも会いたいということです。

また、勉強だけでなく様々な場所に行けたことが一番嬉しかったです。プログラムが始まる前に、これほど自由な時間があるとは思っていませんでした。プログラムの期間はとても短かったので、クラスや課題が終わった後は門限もなく自由に過ごせることがとてもありがたかったです。タイにいたときは日本の文化について記事や写真でしか知ることができませんでしたが、今回は神社や祭り、盆踊り、食べ物、浴衣などを実際に体験できて、より一層日本、特に京都に対する興味が深まりました。プログラムが終わるのはあっという間で少し寂しいですが、これから京都に行く機会があれば、また素晴らしい思い出を作るのを楽しみにしています

最終レポート

チュラロンコン大学・文学部・1年生

KSP309

Namtarn

1. プログラムに参加したきっかけ

私は小学生の時から日本語を勉強していましたが、一度も日本に行ったことがありませんでした。先生に Kyoto Summer Program 2024 を紹介してくれた時、このプログラムに興味を持ちました。私はずっと京都へ行ってみたいし、日本で日本語を勉強したいし、また、日本人と様々な国の人と友達がしたいので、このプログラムに参加すると決めました。

2. プログラムへの参加を通じて学んだこと

最初の私は外国語で話す機会がなかなかなかったので、外国語で話したくない気持ちがよくありました。しかし、このプログラムに参加している間は、さまざまな国の人と過ごしなければならないので、私は勇気を出して話しました。それで、私の日本語も英語もだんだん良くなりました。また、レクチャーを通じて日本の歴史や、経済や、科学的な研究を楽しんで学びました。それに、私の発表グループはお茶について紹介しました。みんなのお茶文化は自分の国特有ができていると分かりました。いろいろな面白いことを初めて知ったのは、とても楽しかったです。

3. プログラムの感想

このプログラムは私にいろいろな初めてのことを教えてくれました。例えば、現場で日本語を使うことや、日本で過ごすことや、日本の文化などです。それに、京大生のみなさんは私にやさしくしてくれました。私は日本語がぺらぺらと話せませんが、京大生が私の日本語をちゃんと聞いて、教えてくれました。他の国のみなさんも気安いので、早く仲良くなりました。みんなに出会えて、一緒に日本で過ごしていたのは、私の一番貴重な思い出だと思います。

4. 特に印象に残ったことなど

京都の初めての印象は街並みがとてもきれいだと思いました。建物の色と形は統一感があると思います。そして、日本の盆踊りと茶道を学んで、本物の日本の文化はどうなるか見学しました。これは私の一番楽しい経験でした。このプログラムに参加する人と過ごしている間は、さまざまな国が自分の特徴を持っていると分かりました。私の世界が広がると感じました。このプログラムに参加して、よかったと思います。

最終レポート

チュラロンコン大学・Faculty of Arts・1年生

KSP310

Pakkadkaew

中学校の時留学するのは私の夢です。でも、日本語を話すのが下手と自信がありませんから、高校の時に諦めました。しかし、このプログラムを見た時、その夢はまた戻りました。一生懸命頑張ったことがないので、今回は頑張ってみたいです。自分の安全地帯を出たいから、このプログラムに参加することにしました。プログラムへの参加を通じて学んだことがたくさんあります。でも、一番大事なことは自分で生きるのを学びました。今回は私の初めて知らない人と住みます。最初の日はとても緊張しましたが、時間が経った後慣れるようになりました。見知らぬ人と住むのはそんなこと怖くないことを分かりました。その上で、新しい友達もできます。友達は全部外国人ですから、他の国の文化を学びました。みんなの人格は国によって違いますが、みんなはとても優しくて気さくです。そして、欠かせないことは日本語をたくさん勉強しました。日本へ来た前に私は日本語で話すの自信は全然ありません。間違える文法を喋るのが怖いので、日本語を喋りたくない。でも、このプログラムに参加した後で誰も私の日本語を判断しないのが分かりました。いつも正しい文法を使う必要はありません。お互いを理解していれば大丈夫。今私の日本語を話す勇気がたくさん増えました。日本語以外私は日本の文化も学びました。文化体験の日色々な日本の文化を学んだ楽しかったです。私はお茶について興味がありますから、茶道をやってみた時は嬉しいです。お茶とお菓子はとても美味しかったです。そして、みんなと一緒に盆踊り祭りへ行ったらとても楽しかったです。もう一度行きたいです。私のこのプログラムに対する感想はとてもよかったです。新しい経験がいっぱいもらいました。このプログラムは勉強しなければならぬだけではない。修学旅行と文化体験もありますから、そんなストレスしなかったよかったです。私の特に印象に残ったことは京大生とみんなの優しさです。私は日本語が上手じゃありませんけれど、みんなに「あなたと友達になりたい」と言われてくれました。とても嬉しかったです。機会があったら、ぜひ京都に戻ります。

最終レポート

University of California, San Diego ・ 人文学部 ・ 3 年生

KSP311

Winston

このプログラムに参加したきっかけは、最初はこのプログラムは学費がありませんと読みました。そして、私の専攻と未来の事を役に立てると思って、このプログラムを選んで、参加しました。夏休みを終わったら、四年生になるので、大学を卒業した後の進路についてのことも考えなければいけないです。このプログラムから日本大学の生活や授業のフォーマットを知ることができるかなと思って、もし日常生活を慣れたら、日本の大学院を選ぶことも考えられます。進路についてはこのプログラムを選んだ小さな理由です。もう一つの理由は、アニメの影響で、日本に興味を持っているということです。このプログラムの前に、日本に三回来たことがあります。でも全部東京にいました。私は関西地方の色なところに観光したいと思って、このプログラムに参加しました。そして、プログラムの間、クラスがない時間で京都回りのところ全部行きました。とても楽しかったです。

このプログラムへの参加を通じて学んだことは新知識と人生経験について話したいと思います。クラスの新しい知識は新しい日本語表現、アカデミックレクチャーで学んだこと。知識以外の人生経験は友達の作り方、時間とお金の管理などのことを学びました。

このプログラムはとても楽しかったです。文化体験と滋賀県へのフィールドトリップも面白かったです。でも、盆踊りを体験できませんのが少し残念でした。そして、クラス後の自由時間もたくさんあるし、私は京都の町探索して、色なところに行きました。宇治、奈良、滋賀全部行きました。そして、京都の有名なお寺にも行きました。

特に印象に残った事はたくさんあります。茶道の体験はとても面白かったです。大学の授業から千利休と日本の茶道たくさん勉強しましたが、実際に茶道を体験するのは初めてで、すごく緊張でした。KUASU の最終報告会のために毎日グループメイトと一緒にアイデアを考え、スライドを作ったことも印象的でした。特に私のグループは外国の学生が作る俳句のために、実際に鴨川でアイスクリームを食べて、あの時の気持ちが高なのかを考えて、俳句を作りました。そして、花火大会に行かなかった代わりにスイカ割りも楽しかったです。みんなスイカを食べて、スイカを壊すのはとても面白かったです。そして、夜の鴨川はとても涼しかったです。ksp 全体的に印象的な記憶で、最高の二週間でした。

最終レポート

国立台湾大学・医学部・4年生

KSP312

Allen

このプログラムに参加したきっかけは、多くの学生と知り合い、日本語会話を上達させたいと思ったからです。京都に来たとき、蒸し暑さには驚かされましたが、京大生の歓迎の熱意はそれ以上に熱く、最初の日から勉強、旅行、食事など様々な活動を共にすることで、京都がますます面白く感じられるようになりました。

このプログラムを通じて、京大生の生活、方言、考え方、そして京都の文化や歴史について深く理解することができました。特に印象に残ったのは茶道体験です。最初はただの飲茶体験かと思いましたが、実際には多くの礼儀作法があり、足がしびれるほどの長時間にわたる集中を要しました。しかし、抹茶の苦さと和菓子の甘さの融合は絶妙で、非常に楽しい体験となりました。日本の茶道は外国人にとって少々難しい部分もありますが、みんなと一緒に飲茶するのはやはり楽しいものでした。

発表準備もこのプログラムで学んだ大きな収穫の一つです。参加する前は、日本語での発表経験がほとんどなかったため、最初は緊張しましたが、京大生のサポートのおかげで、テーマ選びからスクリプト作成、スライド作りまで、だんだんと自信がついてきました。私たちの報告のテーマは自国の茶文化でした。自国の食べ物を紹介したかったのですが、京都といえば抹茶が有名なもので、台湾のお茶文化を紹介することに決めました。抹茶を正しく紹介するために、グループで四条に行ったり、自分で宇治のお茶博物館を訪れたりしました。茶園を見学し、抹茶を砕く体験や抹茶ソフトクリームを味わうなど、さまざまな活動を通じて知識を深めました。最終的な発表も無事に終わり、本当に良かったです。

このプログラムを通じて、日本語が上達し、京都の環境や伝統文化についても深く学ぶことができました。最も大切なことは、たくさんの友達ができただけです。京大の先生方や学生たちに心から感謝しています。将来、機会があれば、もう一度京都に訪れたいと思います。

最終レポート

国立台湾大学・情報学科・2年生

KSP313

Jimmy

KSPでの学びと友情：心温まる思い出

プログラムに参加したきっかけ

台湾大学の呂佳蓉先生がこのプログラムのことを教えてくれました。二週間ほど京大で生活し、日本語や英語で授業を受け、京大生や留学生たちと交流できる機会があると聞き、その場で行きたくなりました。

プログラムの参加を通じて学んだこと

特に気に入ったレクチャーが三つあります。

近藤先生のレクチャーでは、農家、畜産農家や食品の生産者たちが経済的利益だけを重視するために、様々なロスが生じてしまうという話がありました。和牛のビタミンAの制御や、性別によって産まれてすぐ殺される鶏などの例が挙げられました。これまで聞いたことのない話ばかりで、大変勉強になりました。

若松先生は、構造主義（cultural structuralism）と物質主義（cultural materialism）との二つ異なる観点から日本の捕鯨食の歴史と現状を紹介してくれました。とても面白かったです。

湯川先生は、上品な英語で、日本の古典文学における季節と時間の言葉の使い分けから、日本の美学の繊細さを示してくれました。

また、白方先生の日本語上級の授業の中では、参加者が小グループで話し合い、その後に結論を発表する形式が好きです。様々な意見や経験を聞くだけでなく、話をまとめて皆がシェアしたことをどのように発表するかを考えるのも、良い練習になりました。

プログラムの感想

同い年の大学生たちと日本語で話すことは、非常に得難い経験だと思います。授業だけにとどまらず、昼休みや夜にも一緒にご飯を食べ、私たちを色んな場所に連れて行ってくれたり、一緒に遊んでくれた京大生たちには、本当に感謝しています。

正直に言うと、日程表に書かれていた活動よりも、夜にこのプログラムで出来た友達とご飯を食べに行ったり、鴨川で花火を楽しんだり、お酒を飲んだりした時間こそが、このプログラムのエッセンスだと思います。堅苦しい挨拶ではなく、本音で語り合えたかけがえのない時間でした。これらの夜がなければ、この夏の思い出はきっとこんなに愛おしいものにはなれなかったでしょう。

本当に来てよかったです。

特に印象に残ったこと

ここで初めての香港人の友達が出来ました。社会や文化に共通点があり、話に花が咲きました。驚いたのは、香港人の言語能力の高さです。広東語を母語としながら、中国標準語（マンダリ

ン)と英語も非常に流暢に話せます。一方、自分が住んでいる台湾では台湾語が話せる人がだんだん減ってきていることに感慨深い思いを抱きました。他にも、彼らと話すことで、改めて台湾のことを見つめ直すきっかけになり、まさに予想外の収穫でした。

そして、ルネが好きです。品揃えが豊富な本屋と安くて美味しい食堂がある大学に通えるのは幸せなことです。

最終レポート

国立台湾大学・日本語学科・1年生

KSP314

Ian

日々は還らず

二週間にわたる京都サマープログラムは、まるで一瞬の夢のように過ぎ去ってしまいました。真夏の暑さによりやく慣れたかと思えば、歴史豊かなこの美しき古都に別れを告げなければなりませんでした。ああ、さようなら、京都。何年前に来た時の記憶を蘇らせ、懐かしさを感じさせながらも、どこか初めて出会うような不思議な感覚を抱かせる京の都よ。

京都という街への憧れは、幼い頃からずっと心に宿っていました。幼い自分にとって、日本という国のイメージは二つの都市に集約されていました。新潮と流行の象徴である東京と、歴史と伝統の代表である京都。その頃から幾度となく日本を訪れ、京都にも足を運んできましたが、二週間もの長い滞在をすることはありませんでした。

だからこそ、京都サマープログラムの存在を知った時、迷うことなく参加を決意しました。この機会を利用して、もっと長く京都に滞在し、この魅力的な街をより深く知りたと思ったのです。そして、京都大学は日本のみならず、世界でも屈指の名門であり、そのような素晴らしい環境で学ぶことができるということも、自分にとって大きな魅力でした。

京都大学の教授陣による講義を通じて、多くの知識を学びました。その中でも特に印象深かったのは、家本教授が紹介してくださった「言語的相対論」です。私は日本語を学んでいますが、日本語で考えたり話したりする際、自分の思考パターンや価値観が母語を使う時とは全く異なると感じるがよくあります。その考えを裏付ける学説が存在することを知った時、非常に興奮しました。講義後には教授に質問をしに行き、教授は熱心に答えてくださり、大いに勉強になりました。もしかすると、今後この分野でさらに学び研究を進める機会があるかもしれません。

講義だけでなく、京都大学の皆さん、そして世界各国から来た皆さんと一緒に過ごした時間も非常に楽しかったです。KSPの活動以外にも、カラオケに行ったり、夜の鴨川を散策したりして、どれも自分の心の中に素晴らしい思い出として刻まれています。

京都サマープログラム 2024 は終わりました。今日から、また新たな旅路に出ないといけません。それでも、この旅が自分の心に永遠の刻印を残し、大切な思い出の一部になることは確信しています。また京都に戻り、この美しい街に再び足を踏み入れ、京都大学の皆さんと再会できる日が待ち遠しいですが、その日がやってくるまで自分なりに頑張りたいと思います。

さようなら、また会える日まで。

『退屈をかくも素直に愛しめし日々は還らずさよなら京都』 栗木京子

最終レポート

香港中文大学・中文学部・3年生

KSP315

Alice

①プログラムに参加したきっかけ

過去の学習を通して、語学と文学の学問は私が最も情熱を傾ける研究分野になりました。文章や言葉の裏に隠された意味を詳しく理解して、様々な言語表現を深く知ってほしいので、中国語と中国文学の研究を続けるために、卒業の後で大学院進学を目指します。私は一番尊敬する先生が京都大学出身だったので、この大学の学習環境や先生と生徒の関係や「自由の学風」などに大きな興味を持っていて、いつかこの大学に行きたいだと思っています。京都サマープログラムは、日本文化を体験できるだけでなく、日本人学生と直接の交流と日本語でコミュニケーションができる貴重な経験です。そのため、このプログラムに参加しました。

②参加を通して学んだことと感想

このプログラムで、色々なイベントを味わいました。その中に、特に印象を残った所は三つがあります。

まず、発表準備を通して他国の文化を学びました。ずっと出身国に住んで、異文化交流をするのは中々難しいことですが、発表準備がそのための良い環境を提供してくれます。国の間の比較について資料を集めたり、調べたりする時に、国にとって何が一番大事や、何の文化が守りたいなどを分かりました。例えば、広東語と日本語を比べると、中国と日本も近代化運動が行われましたが、儒教思想の重視をそれぞれの考え方があるので、敬語に対して違い使い習慣となりました。異文化交流しなければ、自身の知識に限られます。国際的な視野を身に付けるようになったから、この活動が好きです。

そして、湯川先生の「日本古典文学に見る日本人の美意識」という授業にたくさん勉強になりました。暦法から人間と自然の関係を見るときは、科学の視点から文学や哲学を見る方法です。それ

は私にとって新しい見方で、とても面白いだと思いました。科学と文学は対立関係ではないことを実感しました。

最後に、このプログラムで出会った皆は美しい理想を抱いています。音楽とか、スポーツとか、海外留学とかしたいことを聞きました。皆が目標を立てて、真剣に向き合って、最後まで諦めずに、理想を達成しようと努める姿を見ました。その姿が私を励ましてくれて、将来にも必ず好きなことに熱心に従事したいです。地道な努力を積み上げて、日々の小さな努力の積み重ねるように頑張ります。このプログラマに参加したことは本当によかったです。いつまでも、この夏を忘れられません。

最終レポート

Heidelberg University • Institute East Asian Art History • 2 年生

KSP316

Tau

まず最初にこの活動に参加したいと思ったのは、東アジア美術史を学び、特に明治の日本の芸術を研究したいと志したからです。だから、私は日本に行って、日本人の生活を観察し、日本の美術館に行って、日本の芸術の息吹を本当に感じる事が大切だと思っています。勉強し、体験し、日本人の学生や先生と交流したいと思ってこの活動に参加しました。京都大学について知ったのは、2023 年に京都大学文学部の Tsutsui 先生が私の大学の visiting professor として日本の浮世絵や洛中洛外図について教えてくださっている中で京都大学を知りました。そのため、このプログラムを知らないうちから、京都大学での交換を希望していました。そしてこのイベントに参加してから、私の京都に対する印象は、本で知ったことから、実際に京都という街を体験することになりました。京大での交換を決意しました。

今回のプロジェクトの様々な活動に対して、私は、まず、アカデミック・レクチャーの側から、日本の学界に対して、日本の視点そのものから、日本の様々な側面を見ることができたことが、私にとって重要だったと思います。ハイデルベルク大学で日本の芸術、歴史、社会を学んでいたからです。1 限目の Sano 先生が語ってくださった幕末の日本の外交儀礼の発展史のように、本質的には一人の他者の視点から日本を読み解いています。彼女は日本の幕府の政治についての考えと日本の政治制度の後期から明治の時期の近代化の討論を結合して、私にとっても面白いと感じさせます。日本は明治維新後の政治改革を経て、封建政治から近現代の国家システムに移行した国として認識されるようになったと教育されてきましたが、日本ではそのような認識はありませんでした。非常に興味深いのは、共通の知識が実際に議論されたり挑戦されたりすることですが、紙幅の都合上、この例を挙げましょう。

二つ目は各種の文化活動です。一番印象的なのは茶道活動に参加することです。日本建築史についての本を読んでいるからです。今回の茶道活動は典型的な日本和風建築の中で行われました。池や松が植えられており、全体的に日本の統一感が感じられます。茶道に参加して、

私は幸運にもお菓子と緑茶を味わうことができました。そして茶道を主宰している日本人の女性と茶道の注意の規則について交流して、彼女たちの緑茶を作る器具と緑茶の粉を観察しました。このような伝統的な日本の行事に参加できてとても楽しかったです。

日本語の学習と日本語で京都大学の学生と交流するこの部分の活働の手配について、私は最も重要だと思います。日本人は日本民族の文化と現在の日本社会の問題と発展に対して、どのような考えを持っているかを知りたいですから。傾聴と交流は常に最も重要で、私の日本語はとても上手ではありませんが、しかし私も堅持して彼らと交流します。この交流ので、私は日本美術史を勉強し

ていたので、日本の芸術についてもいろいろな話をしましたが、話をしていて気づいたのは、日本人が注目している画家と、ヨーロッパで勉強したり、授業や学会で知ったりする画家とでは、まったく違うということでした。これは私にとってとても重要なことで、日本の近代芸術や現代芸術に対する新しい認識を広げられました。

私は、交流は常に未知の文化を知る最も重要な手段の一つだと考えています。このイベントでは、私は京都大学の先生、学生と十分に交流し、日本の伝統文化を体験しました。最も重要なのは、この国際的な活働の中で、私は他の国の学生と知り合い、そして友達になりました。もちろん、私の京都大学の友達もいます。このプロジェクトは私にとって忘れられない学びです。このイベントの主催者、私がこのイベントで出会ったすべての人に感謝します。

10. 京都大学受講生 参加報告

My Changes for the Better through KSP

農学部 1 年

KSP 番号 : 401

名前 : Yuki

Throughout various activities of KSP, I was so much fascinated especially by international students' proactive attitudes. Among these activities, those that gave me the greatest impression were *Discussion in English* and *Discussion Session among Students*. These discussions were the most vibrant ones I have ever experienced.

I unfortunately often hear that Japanese students tend to be passive in discussions, and I think that is the case to a certain extent. Even in the discussion activities of KSP, which more motivated Japanese students than the average of those in Kyoto University must have taken part in, those who lead the conversation in each group and presented its summary to the entire class were mainly international students.

When I first joined *Discussion in English* class, I was partly disappointed to see the passive attitudes of many Japanese students. But at the same time, I was motivated to participate more proactively as I saw an international student in my group expressing his ideas confidently and fluently and some Japanese students bravely joining the debate. At first, I was coward because I was not sure whether I can convey my thoughts in academic English, which I am not really used to speak in. As I tried joining the conversation, however, I found myself enjoying it and got to know that it was not so much difficult as I had expected. This made me more confident in my English skills than before.

And the next thing I encouraged myself to try was to give a summary of the opinions from my discussion group to the entire class. This was much more challenging because I had to speak using a microphone being watched by everyone in the class. Even though those present in the discussion were friendly and thoughtful people, I was too timid to give it a try. But in the very last *Discussion in English* class, I made up my mind to raise my hand as a representer of my group's opinion thinking that if I miss this last chance of challenge, I will regret it later. I was quite nervous. But as I saw some of my friends, who I got to know thanks to KSP, smiling toward me, I could complete my mission without being upset. I got a kind of satisfaction.

With this confidence I got, I made up my mind to step forward in the following class: *Discussion Session among Students*. I took the role of claiming my group's assertion in the very limited time of three minutes. Though I did not have enough time to prepare, I dedicated myself to expressing our ideas, which we seriously made up so that we would not be defeated by the group of the opposite position over the discussion theme. I was fascinated by the desperation of both groups. Everyone had strong and sincere ideas to support the claim. I was extremely glad when the members of my group praised my presentation saying that I explained our points clearly and effectively.

KSP activities helped me get progressed a lot in various aspects. They provided me with opportunities to get confidence in my English skills, get motivated to have more proactive attitude

toward discussions, broaden my mind toward both Japanese and non-Japanese cultures and become friends with many students of different nationalities. I believe that this program greatly changed me for the better. I sincerely thank all the people involved in this wonderful program.

KSP2024 での学習成果

法学部 1 回生

KSP 番号：402

名前：Lei

日本語教授実習では、海外からの学生に日本語を教える中で、これまでよりも深く日本語について考えることができた。初級クラスに行った際には、日本語を学んでひらがなでの読み方を覚えたとしても、漢字で書いてあるとわからないといわれたり、文中での助詞「は」を「わ」と読むことが、どう伝えて良いかわからず、上手く説明できなかつたりしたことが難しいと感じた。また、中国などからの学生で漢字がわかるため意味は大体分かるが、日本語での読み方を書いておいてほしい、や、他の学生からも、意味を英訳するだけでなく日本語での読み方もローマ字表記した看板が欲しい、などの意見が聞かれ、学習意欲の高さに驚き、感化された。改めて、日本語の歴史や海外からどう見られているのかを知り、魅力を発信したりとつつきやすさを感じてもらったりしたいと思った。

ディスカッションでは、稚拙な英語でも話そうとする姿勢をして話すと海外の学生は理解しようとよく聞いてくれて、そういった態度の大切さも実感した。また、どう言ったらいいのかも教えてもらえたことがとても勉強になった。言い換えやよく使う便利な表現を知ることができ、より自信をもって話せるようになった。海外学生とのディスカッションは、現状を述べつつも、しっかりとそれを解決するにはどうしたらいいか、や、何が問題なのか、という核が主張されていて、見習いたいと思った。そしてそのために、やはり普段から食糧問題や国際的なニュースに関心を向けておくことが必要であるし、これから興味のあることだけでなく興味のないものでも一般的な理解は心がけていきたいと思う。

普段の生活の中で、海外学生の専門や、お互いの大学の制度や、国の文化、宗教について話せたことは知見を広めることができとても今後の役に立ちそうだと思う。やはり、日本には食事の上での禁忌がないため、海外学生が「これは食べられない、〇〇が入っているから」と、一見わからないものに対して言っているのを聞いて、その厳格さを感じて新鮮だった。捕鯨に関する講義では、特にこのような禁忌について現実的な側面（生産コストの大きさなど）と、宗教的教義の側面があると知り、とても面白く感じた。捕鯨の反対派と賛成派について双方の立場を上記の二つの観点に分けて考えることで、状況をよく理解でき、これまでよりも理解が深まった。

KSP 最終レポート

工学部 1 回生

KSP 番号：403

名前：Tamaki

おしゃべりして些細なことで大笑いしたり、女子で集まって恋バナをしたり、一緒にご飯を食べたり。文化や言語の違いがあるとは思えないほど、世界各国の留学生と過ごした二週間は密度の濃いものであった。レポート課題内容の「学習成果」という言葉に当てはまる事柄は多すぎる。しかし、些細だが、強く印象に残った出来事について述べることにする。

今回のプログラムで、レクチャーの開始時間より前に席に着いていると、留学生の人が私の席の隣を指さして”Do you mind if I sit here?”と聞いてきた。そして私は、すぐさま”No, not at all!”と返した。ごく普通の会話かもしれない。しかし、これは私にとって特別な意味を持つのである。アメリカに高校留学していた時のことだ。友達が、私のところにやってきて”Do you mind if I sit next to you?”と聞いてきたことがあった。その言葉を「隣に座ってもいい？」と頭の中で日本語変換した私は、満面の笑みで”Yeah!”と言ってしまった。その場では言いたいことは通じた。しかし、「もちろんいいよ」という意味で言った言葉が、実際には「あなたに隣に座られるのはちょっと嫌かも」といったニュアンスになってしまっていたことに後から気がついた時、落ち込んだ。これは、留学中に後悔した、数えきれないほど多くの場面のうちの一つである。留学してからもう三年が経つが、これらの出来事がふと蘇ってきて、「こう言えばよかった」「なぜ言えなかったのだろう」と考えてしまうことがある。だから時を経て、昔してしまった失敗を乗り越えられたことは、大きな自信になった。

実は、プログラムに参加する前まで、私は英語を学ぶモチベーションをなくしていた。留学経験があるのにさほど高くない私のスピーキング力と、アメリカ大学院留学に必要な英語レベルの隔たりが大きすぎて途方に暮れていたからだ。しかし、先述したような小さな成功を積み重ねていくことが、英語が話せるようになる唯一の方法である。この当たり前の事実を再認識した。プログラムには、ネイティブかと思うほどレベルの高い日本語を話す留学生の人たちも参加していた。彼らも、自己嫌悪に陥りそうなほど多くの間違いを繰り返しながら努力を重ねていったのではないか。彼らの存在は、私の今後の英語学習において道標になるであろうと確信している。

KSP 最終レポート

法学部 1 回生

KSP 番号：404

名前：Mio

KSP の京大の講義名称の中には、「受容から発信へ」という文言がある。この2週間を振り返ると、「受容」は大いに達成できたが、自分の力不足から「発信」は非常に難しかったというのが正直な感想だ。Academic Lecture では、独自の角度から問題に切り込み、学問の世界へ目を開かせてくれるような講義に魅了された。ディスカッションや講義後の質疑応答の際に、他の参加学生の考えを聞くのも興味深かった。しかしながら、私自身の考えを表明しようとしてもなかなか言葉にならず、ありきたりなことしか言えなかったり黙ってしまったりすることが多く、悔しい思いをした。

この状況の原因を考察すると、次の4点に集約されるだろう。1点目は、ただ漫然と他人の意見を聞いていただけだったということだ。へえ面白い、で終わるのではなく、他者の意見と自分の知識、経験とを結びつけ、常に疑問を持ち、自分の頭で思考しながら学ぶ姿勢が今後必要だろう。2点目は、専門性、国際的・学際的な視野の不足である。ジェンダーとイノベーションに関するディスカッションに参加した際、海外学生が自分の専門分野でなくとも確信を持って自分の意見を語る姿に触発された。事の本質を鋭く突くような意見も多かった。彼らが自分の専攻を極めるのみならず、常に注意深く社会を見つめ、社会に存在する様々な問題に関心を持ち自分の考えをもっていると感じた。それから、自分が現在学んでいる国内法が国際的課題を解決する際にいかに非力であるかを痛感した。学部での勉強も重要だが、自主的に国内外の諸課題を学ぶ機会を確保していきたい。3点目としては、積極性の不足である。質疑応答などの際、自分が質問するのを迷っている間に所定の時間が終了してしまうことが多かった。普段の京大の講義では、学生たちが周りを窺って質問が一切出ないことが多いが、KSP では違った。とにかく自分の意見を述べて質問しようという学生の食欲さに刺激を受けた。最後4点目は、自分の英語力が京大でよく強調される「学術英語」のレベルまで引き上がっていないということである。京大に入学して約4ヶ月間、講義以外での英語学習を怠っていた私にとってハイスピードの講義やディスカッションに付いていくのは本当に苦労した。また、アジア圏の非ネイティブの海外学生たちが、何の問題もなく流暢に英語を話す姿は非常に衝撃的だった。外国語、特に英語が使用できることで、アクセスできる情報が増え、様々な人と交流をもてるということを、KSP を通じて実感した。夏季休暇中、英語力、特にスピーキング力の強化に真剣になって取り組みたい。

今回の KSP では、自分のアカデミック・スキルが世界基準から見てどれほど遅れているかを痛感させられる機会となった。自分の実力不足と向き合うのは辛かったが、1回生という大学生活の早い時期にこうした機会に恵まれたのは本当に幸運であった。今後の自分の学びに KSP が大きな影響を与えてくれることを確信している。今後に関しては、まず後期には E2 科目の履修を予定しているので、そこで今回の悔しさを晴らしたい。それから、海外学生と大学生活について会話をすることで自分がいかに狭い世界で生きているかを実感した。留学についても積極的に検討したい。

最後に、KSP では、優秀で意欲ある京大生、支援して下さった先生方、スタッフの方々に恵まれ、世界の何カ国かに友人ができた。こうした出会いを大切に今後も学びを続けたい。

好奇心で世界とつながった

理学部 1 回生

KSP 番号：405

名前：Taka

今回の京都サマープログラムで私の世界観が変わった。たくさんの方々との交流やアカデミックレクチャー、プレゼンテーション、文化体験など普段はできないことを経験し、刺激的な毎日だった。有意義な時間を毎回提供してくださった皆さんに、とても感謝している。

私は KUASU として参加した。KUASU の発表準備の時、留学生に「なぜ日本語や日本文化を学んでいるのか？」と聞いたことがあった。皆さん「日本が好きだから」、「日本語を学びたいから」と言っていた。このことから、学びや行動の原動力は好奇心なのだと改めて感じる事ができた。出会う人皆、十人十色である。日本や京都の食べ物に興味を持っている人、言語の違いに興味を持っている人、浮世絵に興味を持っている人など様々だった。そのようなたくさんの方の見方を内包するコミュニティの中でも、お互いにお互いを知りたいという好奇心があるからこそ、認め合いながら円滑なコミュニケーションができるのだと考えている。実際に私も日本とは違う常識やマナー、考え方などを知ることができて興味深かった。また、円滑なコミュニケーションのために、自分の言いたいことを日本語や英語でどう表現するかを考えることは非常に大切だ。留学生に向けた日本語や日本文化の説明で表現力を磨くことができたと感じている。さらに、日本の歴史や文化の魅力を再認識できたことも良かった。

将来は、生物の研究をしたいと考えている。石川先生のレクチャーはその分野に関係しており非常に興味深かった。専門分野といえども英語で受講するのは初めてで、英語で学ぶことも重要だと感じた。また、私は生物に興味があるという留学生ともたくさん会話をした。しかし、質問と主張による議論をすることはできなかった。もしできていたらより建設的な話になっていただろうと思うと悔やまれる。このような悔しい経験をバネにして、英語で学び表現するスキルを身につけていきたい。そうであったものの、生物の研究話で世界とつながる経験ができてとても嬉しかった。また生物以外でも、多岐にわたる分野のアカデミックレクチャーやディスカッションセッション(KUASU)の内容を話題にして留学生や京大生と話をすることができた。特に、和歌について、日本語と英訳でのニュアンスの違いや留学生目線と日本人目線で捉えるニュアンスの違いを話したときは面白かった。

皆さんとの出会いは一期一会である。出会いに感謝しながら、好奇心と自信を持って次のステージに向かっていきたい。

開眼

理学部 1 回生

KSP 番号：406

名前：Dora

京都サマープログラムを通して私が学んだことは主に二つだ。「世界から見た日本像」と「価値観の多様性」である。

まず世界に対する日本の良さについて、かつて研究発表で渡米したとき私は、日本の施設や食、日本語を話せることの素晴らしさに感じ入ったが、これは私の感想にすぎない。それに対して今回の KSP では、留学生が日本のことをどう感じているかを学べる貴重な体験となった。例えば日本語の難しさは語の順番といった文法的なものに起因するというイメージを勝手に抱いていたが、実際に留学生の話を聞いて音の難しさというのが早い段階でそびえ立っていることを知った。また、日本の文化としてアニメが知られていることは聞いていたが、それが複数人の留学動機になるほどに大きな魅力なのだと知らず驚かされた。これらは留学生という目を通さねばなかなか気づけないものだったと思う。

次に価値観について、KSP が本格的に始まる少し前、日本語教授準備講座にて家本先生が留学生の考え方を幾つか教えてくださり、それを私は鵜呑みにしていた。しかしそれは全くの誤りだと自分の体験を通して気が付いた。(ただしここで注意していただきたいのは、私は先生が嘘をついていたと言いたいのではない。先生が他者の引用を超え自身の体験の中で固定化され紹介したイメージは、私の体験と一致しなかったという意味だ。) 主に雑談の中で感じられたが、国や性別などで人の考え方は定まらず、個人個人に特有の人生により形作られるものなのだ。したがって日本の友達と海外の友達とで本質的に違いは無いと言える。しかし経験値としての知識の傾向には違いが見られ、それは英語議論のときに如実に現れた。例えばジェンダー問題の議論の時に、自国で問題になっている人となっていない人として考え方の根本が異なり、互いに激しくしかし建設的に議論する様子を目の当たりにした。このように、人として違うのではなく持っている知識背景が違う者、それが留学生であり、非常に議論しがいがあるものだと実感した。

これから私は留学生に限らず、さまざまなバックグラウンドを持つ人と関わる機会を増やすべく、京大など身近に任意参加で開かれる様々な活動に積極的に加わっていきたいと思う。その中で留学生と関わる機会がまたあれば、私が KSP で学んだ日本の魅力を伝え、そしてさらに豊かなものへと広げていきたい。

京都サマープログラムを通じて

農学部 1 回生

KSP 番号：407

名前：Haru

私がこの京都サマープログラムに参加した一番の目的は、英語でディスカッションする能力を高めるということでした。この目的はある程度は達成されたと思いますが、十分なものではないように感じました。以下に十分に学習成果が得られたと感じたこと、あまり感じられなかったことの順に詳述していこうと思います。まず、十分に学習成果が得られたことは、日常会話なら英語であまり問題ない程度にできるようになったということです。One day trip 中に基本的に一日中英語を話さなければいけなかったことで、一日における一通りの会話を経験することができました。また、最も日常会話の能力を向上させたのは、留学生と一緒に沢山遊びに行ったことだと思います。プログラム中の活動はもちろん、プログラム外で活動することが非常に大切だと感じました。授業中では、discussion in English を除いて会話をする機会はほとんどなかったのも、授業以外でも積極的に会話をしに行く積極性が一番重要だと思いました。日常会話に対するハードルが下がったことで、交換留学への応募をする際に少し不安に思っていた部分がかなり解消されました。しかしながら、ディスカッションのように少し込み入った話をするのには依然として抵抗を感じますし、あまり言いたいことが伝わっていない感を感じてしまうことが多いです。テストやフィードバックの関係上、Discussion in English の授業をあまりたくさん取ることができなかったことが一因となったように思います。Discussion in English の授業では、実際にディスカッションする時間は一回につき 30 分ほどしかなかったのも、フィードバックの授業を少し無理してでも、もう少しディスカッションの授業をとればよかったと少し後悔しています。日常会話の中で込み入った話をする機会はあまり多くなく、やはり授業を取ることが一番効果的だと感じたので、後期には E 科目を積極的に履修し、もう一度 ILAS セミナーを E 科目で履修しようと思います。最後に、この京都サマープログラムを通して世界中に友達を作ることができました。単に学習成果を上げることよりも尊いものを手に入れることができました。春休みにまた会いに来る計画をすでに立てている友人もいます。世界は広いようで意外と狭いのかもしれません。このプログラムを通じて、交換留学に対するモチベーションが大きく高まりました。今後も国際的な活動に積極的に参加していきたいと思っています。

KSP 最終レポート

教育学部 2 回生

KSP 番号：408

名前：Meo

このサマープログラムに参加することを決めたのは、日本にしながら国際交流ができることに魅力を感じたことと、日本語教育に興味があったことが理由である。また、日本に興味がある学生が参加するとのことだったので、海外の方は日本をどう見ているのか、日本のどのようなところに興味があるのかを知る良い機会になるとも思ったので参加を決めた。ゆえに以下ではこの三点について具体的に記述していく。

まず一つ目の「日本にしながら国際交流ができる」という点についてである。これはまさにその通りで、様々な国から来た学生と、出身国な話や日本の話、趣味の話、学術的な話など様々な話が出来たのは大変良い経験になった。さらに「日本にしながら」という点は私にとってとてもありがたいものであった。以前ニュージーランドで短期留学をしたとき、国際交流以前に国の雰囲気やホストファミリーとの関係など新しい環境に適応するのに精一杯で、十分に国際交流が出来なかったことを覚えている。その点このプログラムでは環境に適応する必要はなかったため、交流に専念できたことはありがたいことだった。

次に二つ目の「日本語教育」についてである。これに関しては私の予定の関係上日本語教授実習の授業に1回しか参加できなかったため、十分に成果を得られたとはいえない。しかしその1回の授業と、普段の発表準備で海外学生と日本語で話すことを通して得たものは大きかった。例えば「やさしい」日本語を使うことがいかに難しいかを実感した。特に外来語や擬音語擬態語など伝わりにくい言葉の種類が日本語にはたくさんあることに気付いた。さらに日本語教授実習の先生方が話す日本語を聞いてこのように話せば海外学生には伝わるのだと学ぶことも多かった。

次に三つ目の「海外学生から見た日本」という点についてである。これに関しては、海外学生は私が思っていたよりも日本に関して幅広く、深い知識を持っていることが分かった。アニメやゲームに始まり、日本人の労働形態や日本語に潜むジェンダー意識などこちらが気に留めなかったことに興味を持っている学生もあり大変有意義な話が出来た。しかし、各学生の興味があることを深くは無そうにも、私の知識が少ないために会話が弾まないことが何度かあった。

以上を踏まえた今後の展望は、これからも積極的に海外学生と交流して、自分の視野を広げ日本語に対する理解を深めることに加え、日本に興味を持つ海外の方と深い話をするために日本についてもっと詳しくなることである。この機会を活かして、国際的な人間に近づこうと思う。

問題解決に必要な力

薬学部 1 回生

KSP 番号：409

名前：Rina

今回私は KSP を通して、英語での発言力だけではなく、問題解決のための考える力を養うことができた。まずアカデミックレクチャーでは、文理さまざまなテーマで授業が行われた。理系学部には所属している私は文系の授業に少し不安があったが、どの授業も分かりやすく、新たな発見がたくさんあった。私が特に印象に残ったのは、関山先生による経済学の授業である。経済を活性化させるためにはインプットを増やさなければならないという根本的な考え方のもと、色々な社会問題が経済に及ぼす影響や、実際に経済を活性化させるためにはどうすればよいのかなどを留学生たちと話し合うことができ、実践的な知識や考え方を身に付けることができた。また、ILAS ディスカッションでは、優秀な留学生からたくさん刺激を受けた。留学生たちの考え方はとても柔軟であり、1 つの問題に対して複数の視点から色々なアプローチをしていて、彼らの議論に対する姿勢に圧倒された。初めは私が発言することで、議論に邪魔をしてしまったり、批判されたりしてしまうのではないかという不安があった。しかし回を重ねるごとに、自分の意見を伝えることは、その意見に対する他者の反応を通して多様なアイデアを知ることができるプラスの機会だと捉えることができるようになった。私が参加したテーマの中で特に印象に残っているのは、英語のグローバル言語としての是非についての議論である。英語は世界の共通言語であることは当たり前であると考えてしまっていたが、この考え方がいわゆる「西洋化」や少数言語の消滅の問題などと深く関わっているということを知った。この議論を通して、私は固定観念の中で考えていたということに気づかされ、自分の視野の狭さ、未熟さを痛感した。さらに、ILAS ディスカッション外の時間でも、留学生と社会問題について考える機会があった。私が仲良くなった韓国の留学生の子が、韓国では日本と同様少子高齢化が深刻な問題となっているということを話してくれた。彼女によると、韓国では受験のために塾に通うことが必須となっており、教育費がかさむため、自分の人生だけを楽しめればよいという若い人が増えているらしい。これに対して私は、日本では女性がキャリア形成のため出産を控える傾向があるということを彼女に伝えた。これらの問題をすぐに解決できるような方法を見つけ出すことはできなかったが、彼女とこれからの社会について考えることができ、とても大切な経験になった。

日本語教授と学外研修での学習成果

文学部 1 回生

KSP 番号：410

名前：Yuki

今回のプログラムでは、日本語教授に関して上級・中級の日本語教授実習と、「海外学生と日本語で話そう」の講座に参加した。日本語教授実習準備講座や実習を通じて、初めて日本語教授に実際に触れることができ、自分の母語が非日本語母語話者の方にどのように教えられているのかを知ることができた。

上級の日本語の授業に参加した際、授業内容のレベルの高さに驚いた。俳句についての日本語での解説には、日本語母語話者の私にとっても難しい内容が含まれていて、留学生の皆さんと一緒に私自身も新たに学びを得ることができた。日本語の文法だけでなく、日本の文化や言語に影響された日本語母語話者の感性も学びの対象になっていると感じた。語学を通じた異文化理解に触れることができ、日本語教授の奥深さを感じた。

また、中級の日本語実習では、日本語のニュースの聞き取りと祭りについての授業に参加した。単なる日本語文法の解説ではなく、ニュースや祭りを題材に、聞き取りや発表を通して実践的に日本語が教えられているのが興味深かった。実践的な日本語の語学力の上達と同時に、日本の男女格差の問題や祭りの文化について知ることができる点が効果的だと感じた。効果的な日本語教授についての研究を調べてみたい。

学外研修では自分の住んでいる関西地域について私自身も学ぶことができた。琵琶湖について身近な存在であるにも関わらず、その周辺の地域の歴史や特徴、そして琵琶湖の環境の変遷や生態系について知らないことが多く驚いた。新町通りの街並みは日本らしさが感じられて見ているだけで楽しむことができた。琵琶湖の周辺であるという地理的利点を活かし、水運で発展した商人の街を実際に見ることができ、琵琶湖を経済的発展の観点から考えることができた。琵琶湖博物館は以前に一度訪れたことがあったが、今回はクイズを通して展示内容を前回よりも深く理解することができた。特に今の位置に琵琶湖ができるまでの地質学的な変遷が印象に残った。異文化交流をする際に、自分自身の出身地について知っていることは重要だと思うので今回の訪問での学びは有意義なものになった。また、研修のなかで留学生の方々と話をして、お互いの国の習慣や文化について教え合った。日本の夏祭りについて質問されたので紹介した。夏祭りは幼い頃から慣れ親しんできたものの、特に屋台などについては日本独特の文化として意識したことがなかったので紹介するなかで自分自身もその素晴らしさに気づくことができた。

KSP を終えて

工学部 1 回生

KSP 番号：411

名前：Nayuka

京都サマープログラムを通して学んだことや感じたことから、今の自分に何が足りなかったのかを考える。

第一に、積極性である。私は人見知りで、英語で外国の同世代と話をした経験がほとんどなく、また英語のスピーキングについても全く自信がなかったので、なかなか誰にも声をかけられなかった。一人でいたときに声をかけてくれた人がいてとても嬉しかったので、私も隣に座った方に英語でおそろおそろ話しかけてみたところ、笑顔で答えてくれ、日本に来てからの話や自分の国の話もしてくれた。次に教室などで会ったときには手を振ってくれるなど、一時的ではない友達という関係になって、積極的に話しかけることの大切さを改めて実感した。

第二に、日本以外の国の政治や、抱えている社会問題などについてほとんど何も知らなかったことである。Discussion session で様々な国から来た学生と話をしたが、そのなかで「あなたの国にはこのような問題があると聞いたことがあるけど実際はどうなの？」という質問が互いになされていた。自分の国が抱えている問題について説明できるくらい知っていなければならないことは言うまでもないが、相手の国の現状について知っていることがあれば質問して議論をより深めることができただろう。世界中で交流が簡単にできるようになっているからこそ、様々な国の背景について最低限は知っておかねばならないこと、普段から世界のニュースにもアンテナを張っておかねばならないということを、身をもって学んだ。

約2週間のプログラムを終えて、一番印象に残っている言葉がある。8日のDiscussionで同じグループになった方が「言いたいことは伝わっているから、文法なんて気にしないで大丈夫だよ！」と言ってくれたことだ。とても嬉しい気持ちとともに、怖くて受け身になってしまいがちだったことへの後悔を感じた。この言葉は、次に英語で自分の意見を伝えるときに自分を後押ししてくれる言葉になるであろう忘れられない言葉になった。短い期間だったが、そのなかで知った日本や世界のさまざまなこと、（ほかの参加者に比べると少ないかもしれないが）また会いたいと思える友達ができたこと、なかなか積極的になれなかったことへの悔しい気持ちもすべて含めて忘れられない2週間になった。これらを原動力にして、これからも自分に自信が持てるようになるまで英語をはじめたくさんのことを学んでいきたい。

(学習成果)

総合人間学部 2 回生

KSP 番号：412

名前：Tate

このサマープログラムを通じて、私は 3 つの学びを得た。1 つ目は「視野が広がる」ということである。例えば今回のプログラムで、私は以下のようなことを驚きをもって知った。「中国語のパソコンでの入力では、「形码」入力と呼ばれる方法があり、「一、口、田、リ」のような簡単な文字がキーに割り振られていて、それらを組み合わせて入力すること（例えば上の例では、「副」が入力される）」「英語を学ぶ人は日付を言うのが難しいこと」「インドにも日本の盆踊りとほとんど同じような習慣があること」等である。一つ一つは知識としてはとるに足らないことであるが、日常の些細なことに違いや、意外な共通点があるということを知ったことは、自分自身の世界の見方には大きな意義があった。単に一つの思い込みに気づいたのみではなく、多数の思い込みの存在を想定するようになったし、他の文化をもっと知りたいと思うようになった。

2 つ目は「発信することの難しさ」である。小レポートでは、自分たちを理解してもらうためには、自らを理解すること、そしてそれを積極的に伝える姿勢が大事だと書いた。実際それは大事なことなのだが、発信については、伝えようとするのが相手のニーズに合っているかどうかを考えねばならないと思った。このプログラムの間、私は大文字登山や最後のデルタでの花火などの授業外の活動にも参加したが、その中で、日本人同士であれば他愛もない会話になるものを英語で伝えようとしてしまうと、まじめな話のようになってしまって白けてしまうということが多かった。また、今回のプログラムに参加していたのは、多少なりとも日本に興味のある学生ばかりだったと思うので、cultural experience も熱意を持って聞いてくれたが、おそらく世界には興味のない人のほうが多いだろう。相手が知りたいことや面白いと思うことと、自分が伝えたいことの折り合いをつけていくことが発信の根本の意識として必要だと気付いた。

3 つ目は、単純で申し訳ないが「英語に対する自信」である。私はこのプログラムで英語が話せず何もできないのではないかと恐れていた。しかし、実際に話してみると、意外と意図が伝わって自分でも驚いた。もちろん、文法に相当穴があって聞きづらいと思うし、難しい内容は思うように言葉にできずもどかしさもあった。ただ、日常会話程度なら英語を話せると分かったことは、大きな自信になった。

このサマープログラムでは、大学に入ってから最も大きな学びを得ることができた。この経験を、来年計画している海外留学に生かしたい。

学習成果について

工学部 2 回生

KSP 番号：413

名前：Ao

内容が充実した本プログラムを通して、素敵な人々との対面交流から強烈な刺激を無数に受け、多くの学びを得た。この二週間で多くの知識・能力を培えたことに加え、課題も山ほど見つけ、今後も努力し続ける動機を得た。以下に主な学習成果を記す。

一つ目に、多様な考え方を吸収できた。様々な背景を持つ学生とのディスカッションへの積極的参加を通して、社会課題の自分とは異なる捉え方を知った。また外交儀礼や捕鯨、仏教といった自分の専門外分野の講義を通して、現代社会の有様を理解するとともに、礼儀・倫理・宗教といった概念的な存在の意義を学んだ。加えて歴史を学ぶことで、これらの利用の仕方の重要性も痛感するとともに、このことは自然科学における技術にも通じると感じた。海外学生との交流からは、日本が他文化圏からどう見られているかを理解できた一方で、文化理解において、誰しもが無意識に自分の文化を優位に捉えようとしてしまう傾向があり、文化論では客観的な視点をもつことが難しいと気付いた。

二つ目に、効果的なコミュニケーションの取り方を学べた。10 回以上のディスカッションにおいて、限られた時間内で議論を十分に深めるために効果的な進行方法を模索・実践した。また積極的発言と同様に、聞く姿勢を大切にすることの重要性を身をもって学んだ。ディベートでは、個人的な意見よりも一般的な利益・損失を論じるよう意識したことに加え、心地よく学び合える議論の雰囲気づくりを意識して行えた。相手サイドの意見を批判するのではなく、受け止めた上で自分サイドからの関連意見も笑顔で伝えるようにした。議論の勝敗よりも、楽しんで学びを深め合うことにこだわった。一方、自分の考えをまとめられなかったり、伝えたい考えがあっても英語で表現できなかったりと、自分の能力不足で上手くいかない場面も多かったため、今後も実践を積んで練習する。

三つ目に、将来研究者になりたい思いが強まった。熱意溢れる講義をしてくださった先生方は本当に楽しそうに興味を追究しており、自分も同じ様に好きな学問を究め続け、わくわくしながら生きていきたいと改めて感じた。

四つ目に、互いに高めあえる仲間と全力で活動し、今後も続く関係性を構築できた。特にプログラム内外で沢山話して仲を深めた台湾人の参加者とは、今年の春休みに台湾で会う約束をした。

上記では述べきれないほどの学習成果を本プログラムで得たとともに、多様な学生との協働からコミュニティにおける自分の特性を深く自己分析することができた。思い知った自分の未熟さを胸に留め、将来国際的な研究活動を実現するために、今後の大学生活、とりわけ来年の交換留学で足りないスキルを把握・補填する。

英語に慣れる

法学部 1 回生

KSP 番号：414

名前：Saho

私が京都サマープログラムに参加申し込みをした理由は、英語を話せるようになりたいということといろんな国の人と関わって自分の世界を広げたいということだった。しかし、はじめての Discussion in English でそもそも自分は英語のリスニングが不得意だったことを思い出した。様々な国の人が話す英語は一人ひとり癖が違い、教科書やテストのリスニングにしか触れてきていなかった私にとって聞き取ることは難しかった。しかし、何度も Discussion に参加し Academic Lecture を受けたことで、サマープログラムの終わりには大方の内容は聞き取れるまでにはなれた。また、さまざまな Discussion からは留学生の母国も意外と日本と同じ課題を抱えているのだということが分かった。ジェンダー格差について取り扱った回では、ドイツ、韓国、中国出身の留学生と同じグループになって話し合った。ドイツが格差解消においては一歩進んでいる感じはしたが、政界におけるジェンダー格差は残っていた。特に韓国は女性が就職すること自体が難しく、日本以上にジェンダー格差が多きいようだった。話してみることで、今まで自分が抱いていた各国のイメージが修正されていった。

今回、一番の学習成果は英語を使う人と使うことが怖くなくなったことである。今までは街中で地図を見て困っている外国人観光客がいても話しかけられたりしないように離れていた。話しかけられてもあわあわしてなにもできないからであり、その状況に陥ることも怖かったからである。しかし、サマープログラムで多くの留学生と話すうちにその気持ちは消えていった。私が拙い英語で何かを伝えようとすれば彼らは聞いてくれようとするし、彼らも自分のできる限りの日本語で私と話をしようとしてくれたからだ。加えて、日常会話に少し慣れたからということもある。英語を聞きとることさえ苦労していた自分が 2 週間で急に英語が話せるようになるということではなかったが、今回得た学習成果は大きなものであったと感じられる。

そして、話したくともうまく言えなかった悔しさをばねに実践的な英会話の練習を続けていきたいとつよく思った。大学の中には、英語や多文化に触れる多くの機会がある。次は、スプリングプログラムで短期留学に挑戦し、さらなる経験と自信を積みあげていきたいと思う。

KSP2024 を通して得た学び

経済学部 1 回生

KSP 番号：416

名前：Sakura

今回私は、約 2 週間にわたり京都大学内で開催された KSP2024 に参加し、その活動を通していくつかの学びを得ることができた。留学を希望している私にとって、このプログラムは非常に魅力に溢れたものであり、そこで得た学びは留学についてより明瞭な目標を持つことに繋がったと感じる。

まず一つ目の学びは、積極性の大切さである。このプログラムには世界のさまざまな地域で学ぶ学生が参加しており、特にアジア出身の学生が多いと感じた。プログラム参加前には、英語以外の言語を母語とする人が多いアジアから来た学生は、多くの日本人学生と同様に、英語でのディスカッションや授業中の質問に対して消極的であるという先入観を持っていた。しかし、本プログラム参加者の多くは、英語を流暢に操り、自分の意見を積極的に表明し、話し合いをより深部にまで展開しており、私は彼らの積極性に常に驚かされた。そのような彼らの態度は非常に刺激的であったため、一度目の Discussion In English では促されるまで発言ができなかった私も、二度目に参加した際には中心となって会話を進めることに尽力し、グループの意見を代表して発表することまで務めることができた。それは勇気を要するものであったが、実際に発言してみると学ぶことの楽しさがより感じられ、これからもぜひ続けていこうと考えるようになった。今後は他の学生のように要点をまとめつつ話すことができるよう努力していきたい。

次に二つ目の学びは、言語の力である。現代では AI が凄まじい進歩を遂げているため、ますます人間の力が軽視されているように感じる。しかし今回英語を使って多くの人と話す中で、タイムラグを生じさせずに自分なりの表現で言葉のキャッチボールをすることは、やはり重要なことであると感じた。実際私は、このプログラムを通して韓国出身の学生と仲良くなり、プログラム後半には毎日のように鴨川近くで深夜まで話すほど、仲を深めることができた。その話題は、互いの生活に関する他愛のない話から将来設計まで広範囲にわたっており、精神的な距離が急速に縮まっていくことを感じるとともに、同じ専攻で似た目標を持つ同志として互いの視野が広がっていく感覚を共有した。このような意義深い経験は、翻訳機を通さず顔を向き合わせることでより可能になるものであり、もしそこに言語のギャップがあれば味わうことのできないものであったに違いない。言語を学ぶことの必要性がこのように実践的に感じられたことは私にとって非常に示唆に富むものであり、さらなる言語能力向上への意識をより強固にすることができた。

以上のように、KSP2024 は私の将来に関して新たな目標を与えてくれるものであった。ここで出会った学生との交流によって刺激された学問への熱意と高い向上心を忘れることなくこれからも努力をし続け、大学生活を実りの多いものとしていきたい。

Final Report

経済学部 2 回生

KSP 番号 : 417

名前 : Runa

Regarding to my learning achievement throughout the Kyoto Summer Program 2024, I would like to pick up three activities, which I realize have significant meaning in my progress within these two weeks.

Discussion in English

I was in charge of one of the Discussion in English session. I cooperated with my partner and came up with the questions to provide for participants, prepared some introductory information and made slides for presenting. The discussion session went well, as the time was punctual and there were no problems happened. Unexpected thing for me was that a wide variety of ideas and opinions than I expected came out from each small group and were shared so that intellectual synergy was generated. I learned that the importance of sharing our different ideas and finding new perspectives from other people's opinions.

Discussion Session among Students

I participated in pros team for the centralization of people into cities in the debate session. There were only five members in the pros team and 4 of them were Japanese. In such a little bit adverse condition, I did my best to provide points to state, make counterarguments, and ask questions and answer to the questions from the counterpart. While in the arguing statements session for concluding, I received many questions, so I had to respond to them with reasonable answers and make the controversial points clear. Although it was a tough time for me, I can be more confident in stating arguments and reasoning with improvisation in front of many participants.

Final Presentation

In final presentation, I could learn a lot of things from ILAS students' presentations. All of the theme of their presentations were the extension of lectures or field trips in Kyoto Summer Program, focus point of each student were completely different. I found interesting from their presentations that foreign students have different perspectives to Japanese culture from how we see them. When students from different background sees Japanese culture, the thoughts arisen from it is different and they can provide us unexpected perspectives to see Japanese culture we are get used to. This was an extremely interesting and exciting experience for me.

One of the most interesting points is that the differences in Japanese temples and Chinese temples. Although Japanese temples are derived from Chinese temples in many hundreds of years ago, the structure and the design has quite differences when we look into the architectures closely and compare them. The existence of Buddhism temples is not limited to China and Japan, but they exist in South East Asia, so I thought it would be interesting to study the differences because even

if its origin is the same, the design or a way to conduct pray and so on will be changed as the date passes.

Another interesting presentation for me was about sei shun, since I have never considered how foreign students recognize sei shun. This was presented by half Japanese and half Dutch students, and this was quite a unique theme that only he could present. He presented, for example, bukatsu and school uniform is part of sei shun, but in Netherland, youth, the translation of sei shun to English, include cycling. I thought we may be able to discuss what is sei shun and what can be included in sei shun depending on each country and background at least for an hour among students from various countries. In someday, sei shun might become a worldwide term thanks to the spread of Japanese manga and anime depicting youth's life in Japan. I had never had such a way of thinking, so that his presentation was so interesting for me.

In this way, the points each student made was about Japanese culture or experiences they had in Japan, but the way of observing them was quite different, so that I could find many new faces of those Japanese culture, which brought me a bit of surprising and fresh feeling towards the conventional Japanese culture.

Finally, I would like to thank all of you who are involved in the program to make it a wonderful experience for us. I hope I can utilize the experiences and learning I got here in the future.

The difficulties and achievements in KSP

総合人間学部 2 回生

KSP 番号 : 418

名前 : Shoma

During the program, I learned a lot, but sometimes I faced difficulties. My aims of this program were getting along with many foreign students and understand cultural difference, improving my English skills (presentation, discussion, and etc.), and making friends from Yonsei University that I am going to study from next year. I tried to achieve all of them. However, I cannot say it was fully achieved.

Focusing first on getting along with foreign students, I found it was easy to interact with them. I think my English was enough to have a daily conversation. However, it was not enough to have a deep talk. Thus, it was quite difficult for me to make close friends. Additionally, I think it would have been possible to have a close communication and make many friends if I had had a high communication skill. I realized that I needed to improve my poor communication skill. Fortunately, however, I got along with the person who was from China and sat on the seat next to me on the bus to Shiga. In conclusion, it is very difficult to get along with people who has different cultural background and language from me. I have to keep going to improve both my English and communication skills.

Turning to improving English skills, I think this had been completely achieved. In the discussion in classes and sessions, I think I contributed a lot to them. Last year, I could not even give my opinion in a discussion in another program, but I could express my thoughts and summarize students' opinion in this program. Additionally, I did facilitator in two sessions. I gave a presentation twice, and I think they were pretty good. However, foreign students' presentation skills were much better than mine. They made listeners laugh by funny jokes and they did not seem afraid of large audience. I was nervous in the presentation in discussion among students session. I should have been more confident of my presentation. Regarding the lectures, although many of them were easy to understand, I could not understand some of them. Particularly, lectures on biology were far from my major, and my English lexicon was not enough to understand them. I am planning to take classes out of my major, so I realized that I need to improve my vocabulary.

Regarding making Yonsei friends, I met 4 Yonsei students. I am really glad to get to know people from Yonsei before going to South Korea. All of them were Korean, so I practiced Korean a little bit. I hope I can meet them in Seoul. I will study Korean hard to talk with them in Korean.

Overall, the program was good, and I can learn a lot from the achievements and failures for studying abroad. I once realized how difficult getting along with people with different cultural backgrounds. However, there are many diverse students from all over the world in my study abroad destination, so I have to improve my communication skill and understand others' culture and thoughts more.

KSP 最終レポート

文学部 1 回生

KSP 番号 : 419

名前 : Macky

2 週間という短い期間ではあったものの、この京都サマープログラムは私にとっての忘れ難い夏の思い出になったとともに、私の大学生活の大きな転機となっただろうと思う。多くの海外学生と交流し、世界とつながるという経験を、大学 1 回生の夏という時期に、京都という場所で得られたことをとても光榮に思っている。

まず私は、最初の選考に関する面接にて志望動機を問われた際、「自分の視野を広げる」といったようなことを回答したと思う。結論から言えば、その目的は大いに果たされた。ディスカッションでは同じ議題について各国の状況を直接聞けたし、日本語教授実習では日本語を通じて日本語という言葉、ひいては日本という国を客観視することができた。その他にも授業内外での留学生との雑談を通じてお互いへの理解を深めることができた。このように得た友人たちと、彼女らと過ごした日々を私は生涯忘れないだろうと思う。

一方で、そのような活動を通じて自分の力不足も強く実感した。まずは英語力の不足である。私はプログラム以前、英語力に関しては大した問題ではなかったと考えていた。一つにはやはり自分

が京大の入試を乗り越えたうちの一人であるという慢心があるが、もう一つ、本当に伝えたいことは語学力を超えて伝わるものだと思っていたからだ。しかし、それは正確ではなかった。日常英語はともかく、ディスカッションのような学術的な場ではやはり、単語力がなくては満足に意見を述べるのもかなわない。私の英語力は、英語を母語とする欧米系の留学生どころか、各国から来たアジア系留学生、ひいては同期の優秀な京大生にすら届かないものだったと思う。この点においては、まだまだ磨きをかけていく必要があると痛感した。そして次に、多方面への知識量とそれを基にした思考力だ。私はありがたいことに「地域格差」の回のディスカッションでファシリテーターを務めさせていただいたのだが、そうして全体を見るうち、その専門分野でない学部が積極的に自国の状況や自分の意見を述べる光景を見た。これは最後の全体ディスカッションでも感じたことだが、京大生含め、彼らは自分の専門分野でないから沈黙するということをしな。私はその知識の豊富さと、自分の意見を練って発言していく行動力に感銘を受け、また自身の力不足を実感した。

しかしながら、自分が無力であるという事実はその無力であるという現状の肯定とはならないことを私は知っている。私はまだまだ能力的にも未熟であり、できないことがたくさん残っている。しかし、今年度の入学式にて、来賓の青山さんが「自分にはできないと思っていること」にこそ挑戦してほしいとおっしゃって下さったように、そのようなことにこそ私は挑戦していかなければいけないと思う。大学でやりたいことは未だ見つかっていないが、私はまだ世界のことが知りたい。そのためにも今は来年の短期留学を視野に入れ、励んでいこうと思っている。

The Three of Abilities to Be Global Human

工学部 2 回生

KSP 番号 : 420

名前 : Sakura

Through KSP, I learned the importances of having interests in the outside world, English ability, and verbalizing opinions by myself. This report refers to the reason for which I think they are important.

Firstly, this paragraph explains why being interested in the outside world and trying to learn it by myself are important. I participated in the ILAS discussion sessions, and the topics are so general that I didn't have to get prior knowledge of them in advance. However, by listening to the stories of overseas students, I was able to learn about common sense in the world that I did not know, especially about the world that is not related to Japan, and I was aware of the narrowness of my world. There are many global topics and problems, and their solutions should be optimized according to the circumstances of each country, but when considering solutions to global problems on a global basis, it is necessary to have a common worldwide sense of the problems and their situations. In order to do so, I felt that it was necessary to know the situation in each country that is not well known in Japan. In addition, although it is relatively easy to get news about overseas economies and industries in Japan, there are some topics such as agriculture that are difficult to

obtain information on. Therefore, it turns out that it is very important to try to obtain information about the world that I don't know or am not interested in.

Secondly, this paragraph explains why abilities of English and verbalizing thoughts are important. After learning about the situation in the world, I felt the importance of being able to use English to convey my thoughts and to verbalize my own opinions. Even if I had my own opinions in response to the opinions of overseas students, my English skill was not so good to convey my thoughts to others in English, and I was keenly aware of the pooriness of my English skill. Also, when expressing opinions in Japan, even if I didn't verbalize them well, the listeners understood them. So, I didn't have to verbalize my opinions in detail and clearly. However, when I talked to overseas students, I had to speak logically, and I had to explain in detail what kind of process I used to come up with my final opinion, and the reasons and grounds for my opinion. Therefore, I realized that I hadn't really verbalized my opinions and reasons for them, and I felt the importance of the ability to verbalize them and difficulty to verbalize them.

In conclusion, through this program, I realized the importances of having interests in the outside world, English ability, and verbalizing opinions by myself again. If I can't obtain the perspective and these abilities, I won't be able to become a global human resource. From now on, I will search for the major situations of overseas countries and train the abilities to use English and verbalize my thoughts.

学習成果について

農学部 1 回生

KSP 番号 : 421

名前 : Koharu

KSPで行われたカリキュラムのうち、日本語教授準備講座、Academic lecture2 が私にとって印象的だった。

まず、日本語教授準備講座では私は初級2、中級1、中級2の講座に参加した。初級2は「～たら」などといった条件表現と「自動詞、他動詞」、「状況説明」の授業に参加したが、いずれの回でも日本語母語話者が普段全く意識していない日本語の特徴を知ることができた。例えば、「ので」はただ理由を表すだけだととらえていたが、自体の原因理由、判断根拠、順接など予想外に多様な使い方をしていることを知った。この講座を受けたあとから、自分が日本語をどのように使っているのか意識するようになり、「が」の使い方ひとつでも逆説で使用する時であれば順接だったり仮定の用法だったり多様な使い方をしており、それがまた時代とともに移り変わっているということも日常生活で気づくようになった。

また、academic lecture2 では日本経済の失われた30年についての講義だったが、後半の時間にグループワークがあり、様々なファクターが経済に与える影響がどのようなものかについて議論した。私の班では6か国の人がいたが、大体の人が考える影響は同じであった。経済成長を遂げた国はどこでも同じような問題を抱えているということを改めて知れたとともに、他国と比較したことで教育の面での男女間の違いが特に韓国とに日本で深刻であるということが明らかにな

った。このジェンダーギャップの問題は日本語教育準備講座の中級2でも議論することがあったが、他国では京都大学に相当するような高いレベルの大学であっても男女比はほとんど1:1でむしろ女性が多いこともあるということは驚きであり、日本の現状により疑問を感じるきっかけになった。

そして今回のKSPを通じて英語が世界の共通語であるということを改めて痛感した。母語が全く違う人々が会話をするには英語が一番であるし、その様子を間近で見、そして自分もそこに参加できたということは自分の今後の英語学習の大きなモチベーションとなった。今回のサマープログラムは英語が母語でない人がほとんどだったが、同じくらいの年齢にも関わらず流暢に英語で自分の意見を伝える姿は、自分がもっと世の中のことを知ろうと思う契機になり、また英語の表現も母語次第で少しずつ異なっているのが、言語が人の思考に影響を与えているように感じられて興味深かった。アカデミックレクチャーやフィールドトリップで知った知識だけでなく、海外学生と話す中で知ることができた文化の違いをもっとこれから勉強していきたい。

KSPによって得られた種々の気づき

経済学部 1 回生

KSP 番号 : 422

名前 : ATSU

私が参加したこの京都サマープログラムは、私にさまざまな気づきを与えるものであった。本レポートでは、その気づきを「語学」、「文化、価値観」、「友達」の3つの観点から整理して述べる。

まず「語学」の観点から。小レポートでも述べたが、Japanese teaching practice から、私は「外国語としての日本語」を感じるようになった。具体的に言えば、留学生の日本語の発音、アクセント、コロケーション、書き順などに違和感を持つ場面がしばしばあった。これらは私が外国語学習をするときついつい疎かにしてしまうことが多いことなので、逆にそこに重点を置くことでより外国語学習の精度を高められそうと思った。また、Discussions in English では、自分の意見を英語でまとめて会話についていくのが難しかった。特に語彙レベルが高いものになってくるとなかなか英語にしばらくたり、聞き取れなくなったりするので英語学習をこれからも続けるのは必要だと感じた。

次に「文化、価値観」の観点から。Academic lectures にて、日本の文化の際立った特徴や、人間の生物学的な特徴に気づくことができた。例えば部活動の文化は日本に特に顕著なものであることや、チンパンジーに対するいろんな実験から人間には積極的な利他性、互惠性、共感を持つという特徴があることがわかった。また課外にて、カラオケに行ったのだが、そこでの「ノリ」が日本人と若干異なることを感じた。加えて最終日にある留学生から「いつも大丈夫」と別れる際言われた。これは You are always OK. を彼らしく訳したものらしく、あまり自信を持ってない自分にとって、この自信に満ちた価値観は大切にしたいと思った。

最後に「友達」の観点から。サマープログラムの間、とても多くの人とはなし、ご飯に行き、遊びに行き、友達になることができた。具体的には河原町に漫画を買いにいたり、着物を買って夏祭りにいたりした。彼らの立場になって考えてみると、たとえ短期であるにしても留学

は新しい友達を作る機会であると感じた。私は留学をする目的に悩んでいたのだが、この経験により「友達を作る、友達に会いに行く」という留学の目的を見出すことができた。

このように、サマープログラムは私にとっても多くの気づきを与えるものであった。今後もこういう活動に参加して、英語力の向上を図りつつ、幅広い視野、考え方の切り口を得たいと思った。とくに、前々からなんとなくしたいと思っていただけの留学について、具体的な目的と熱意を持つことができるようになった。

京都サマープログラム全体での学び

工学部 2 回生

KSP 番号：423

名前：Atushi

京都サマープログラムでは、様々な形態の講義を通じて、自分の英語力が向上し、いろいろな分野の知見を得られたと考える。

英語での Discussion では、人生経験の違いを大いに見せつけられた。1 回目の難民に関する議論のとき、実際に難民の人と会話し、避難した国の医師免許を持っているのに、避難した先の国のものは持っていないことから、現在職につくことができていないのだという話を聞いたという海外の学生がいた。その人はその時の経験から、能力は十分にあっても難民の人が仕事につくことを難しくしている現在の制度を是正すべきだと主張してきた。もちろん自分はそのような経験がなかったので、とても衝撃的で印象に残った。また、自分の言いたいことを言えないことに対するもどかしさと自分の英語の表現力のなさにもどかしさを覚えた。Discussion のファシリテーターもしたが、議論を活発化させ、誘導するためにどのような前フリを行うのかなどを考えた。初めてのことであったが、議論とどのようにすれば円滑に、深い議論ができるのかを学ぶことができた。

KSP で受けた 8 個の授業はどれも自分の専門外で大学の他の授業で受けることのないもので、面白いものが多かった。特に、山本先生の動物研究の講義が特に深く印象付けられた。ボノボとチンパンジーはそれぞれ異なる立ち振舞をする。例えば、ボノボは基本的に他の同種の社会に対して寛容である。一方チンパンジーはそうした行動は確認されていない。このように 2 種の立ち振舞はそれぞれ違うがこうした違いが、住む環境に依存しているという説明はとても説得力があった。馬にも馬独自の社会があり、群れで生きる動物であることを初めて知った。授業のテーマとは異なるが、馬同士のコミュニティを調べる目的で、ドローンの映像から個体識別する画像認識の技術が使われていた。機械学習をはじめとする AI が一般社会だけでなく、こうした実際の研究の場にも使われていることが印象的だった。また、日本の仏教に関する講義も面白かった。神社仏閣が持つ「信仰の場」という役割を VR 上などの仮想環境に持たせることでこれまで神社が持っていた様々な役割をもたせながらも、場所(空間)の固有性を解放する取り組みは興味深かった。

京都サマープログラム全体として、英語を中心とした授業で、自分の英語力の上昇が上昇したと思う。また、自分の専門とは異なる分野を知るきっかけにもなった。

KSP 最終レポート

工学部 2 回生

KSP 番号：424

名前：KEITO

プログラムを通して得た学びについて述べる。やはり最も大きいのは海外の学生と交流するという経験であろう。今まで私は海外にはいったことがあったし、英語の勉強も割としていたと思うが、日本人以外の人と英語を用いて絆を深め、仲良くなるということはしたことがなかった。異なる文化的バックグラウンドを持つ人たちとどのように接して、どのように距離を詰めていくのか全く分からなかったし、ノリや距離感も絶対に違うことはわかっていたからこそ、うまくなじめるのか非常に不安だった。実際に話してみるともちろんコミュニケーションの取り方は少々異なるものの、しかし、自然と互いにそれを理解して尊重しあい、案外ふつうに放すことができた。やはり、お互いの文化的バックグラウンドが異なっていることをしっかりと理解し、互いにそれを尊重しあうことが国際交流においてとても大切なことであると気づいたことがこのプログラムを通して得た学びのうちの一つである。

英語の能力の観点で言えば、別に特段スピーキングができるようになったとは思わないが、やはりプログラム参加前に比べて、リスニング能力がかなり向上したように思われる。それはきくと聞いて理解する必要に迫られたからであろう。相手の言葉を理解しないと会話ができないしという点で、一般的な日本人学生が行っている音源を聴くだけのリスニング練習とは大きく異なり、その効果は絶大であると感じた。やはりコミュニケーションを実際にとることが言語習得における近道なのだろうと感じた。また、単純で簡単な受け答えをする能力も多少向上した。たとえば以前は会話で肯定を示すときに YES しか言えなかったが、YEAH も使えるようになったし、びっくりした時に OH MY GOSH と言ったりするなど、本当にちょっとした日常的口語表現のバリエーションが増えた。

最後に、このプログラムに応募した時は英語のよい練習の機会になるだろうと思って応募したが、プログラムを終えて、言語はあくまで手段でしかないと思った。言語を習得することに意味があるのではなく、その言語を用いて理解し、他者と交流することこそが、言語の価値であり、わたしが英語を勉強する意味だと思った。実際に私は英語を用いて、世界の国々の友達を持てたし、その人たちと様々な価値観や概念五つについて意見を交わし、より相手への理解を深めていった。この大切な学びを忘れずに、そしてこれをモチベーションに変えて、今後はより一層英語の学習に励んでいきたいと思う。

KSP2024 を受講して

文学部 1 回生

KSP 番号：425

名前：Erin

私は Kyoto Summer Program に参加したことで、自分の英語力に少し自信が出ると同時に至らなさも強く感じました。京都大学からの参加者は英語でそつなくコミュニケーションをとることができる人ばかりで各々が留学生と仲良くなっていくのに対し、私は留学生との会話の輪に半ば無理やり入ることができたとしても発言することができず、場違い感を感じていました。しかし、偶然食堂で一緒に昼食をとることになった留学生の方とは少し会話することができ、少人数であれば少し会話ができることに気が付きました。それからは大人数の集団であっても短い文でしたが発言できるようになり、大層なことは言えなくともリアクションをするだけで徐々に仲良くなることができました。一方で、ディスカッションや普段の会話でも真面目なものには全くついていけませんでした。そもそも会話が聞き取れていないこともあり、最初に議題を聞いた際に考えたこと以外はほとんど発言することができませんでした。論理だてて考えていても説明ができないため相手にしてもらえなかったり、説明を途中で断念してしまい誰かの意見を支持するだけになってしまったりして歯がゆい思いをしました。また、ディスカッションの議題には社会的なものが多く、普段は意識していないため意見が思い浮かばないものも多くありました。移民問題などは日本に関してのことは教科書に書いてあること以上のことはわからず、留学生の多くが自国の移民の問題を実感をもって話していたり、日本人の私も知らない日本の状況を知っており、驚くとともにもっと社会に目を向けるべきだと反省しました。

私は将来、海外で仕事をしたいと考えています。今回のプログラムで様々な国の人たちと交流することで、英語を学ぶことの大切さ、国の文化の多様性など、普段言われているけれどなかなか実感のわからないものを身をもって学ぶことができました。この経験をいかして、これから海外への視点を養っていこうと思います。

KSP 最終レポート

法学部 1 回生

KSP 番号：426

名前：Sena

海外の学生と英語で議論する機会が毎日のようにあるのは初めての経験でとても刺激的な 2 週間だった。このプログラムの一番の成果はディスカッションセッションで、相手の意見を「英語で」理解し、自分の意見を「英語で」伝えることが拙いながらもためらわずにできるようになったことだと思う。前期の授業でも同じように英語で自分の意見を話さなければならない場面があったが、そのときは、英語で聞かれる質問もうまく聞き取れなくて、聞き取れてもすぐに答えることができませんでした。でも、このプログラムでは、その反省を生かして、質問が聞き取れなかったら、もう一度聞いたり、議論が止まったら、事前に考えてきていた自分の意見を言ってみたり、

相手の意見に対して質問したりなど、勇気を出して意識的に自分の発言回数を増やそうということをしていた。留学生も私の英語のつたなさに気づいたのか、私が言葉に詰まると私の言いたいことを察してフォローしてくれたこともあった。2 週間だけだったけど、私の英語は相当鍛えられ、これでもなんとかやっていけるのかという自信もできたので、このプログラムで身につけたことを、次のチャレンジに生かしていきたい。

ディスカッションセッションでは、今までに経験したことのない、レベルの高い議論だったと感じる。留学生の視点は面白く、各テーマに関する海外の事情などを知ることができて面白かった。以下に挙げるのは、各テーマの議論の中で、自分にとって新しい意見や・気づき、感心した意見の一部であり、これらの新しい知見は本プログラムの成果でもある。<1 グローバリゼーションと人の移動>移民の格差をなくすためには、お金を給付する支援だけではなく、格差の原因となる言葉の壁などを解決するために、移民 2 世の子供たちの教育を充実させるという長期的な支援が必要。<2 生成 AI>AI はあくまで人間の道具で人間がそれを倫理的な方法で活用するだけで、人間が AI に取って代わられることはない。<3 持続可能エネルギー>企業がまた新しい製品（スマートフォンなど）を買ってもらえるようにすぐに取り替えなければならないような製品を作るのではなく、環境を第一に考えて持続可能な製品を作らなければならない。<4 英語共通言語化>英語を Global Language にすると英語を母語としない人が教育、仕事の分野で不公平になる。<5 地方格差>リモートワークで都市の職場に行かなくて済むような環境が整い、仕事のリモート化が進めば、都市集中も緩和されて、地方人口、医療、教育、娯楽施設も維持できるかもしれない。<6 ジェンダー問題>ジェンダー問題は解決されないと経済的なロスにもつながる。<7 フードロス>AI の技術を積極的に使っていけば、人口不足にも気候変動にも対応できるのではないか。

<8 イノベーション>ベンチャー企業に対して、最初、起業には政府の支援が必要で、その後は自立させていくべきだが、支援をやめるタイミングや基準など、その線引きが難しい。

京都サマープログラムを通して学んだこと

工学部 2 回生

KSP 番号：427

名前：Masa

京都サマープログラムに参加したこの二週間は、私の大学生活の中で最も充実した時間であった。入学してから今に至るまでに受けたどの講義よりも、また参加したどの部活動やサークルよりも刺激的で、価値観や視座が大きく変化したと感じている。そもそも京都大学に入る以前、私は京都大学に対して漠然とした憧れを持っていた。この憧れは一方的な期待感と似ており、今まで過ごしてきた小学校中学校、高校とは大きく違っているだろうというような、具体的ではないものだった。しかし、いざ実際に入学してみると、そこまで大きな価値観の変化というものはない。もちろん大学であるから自由な時間、活動は増えて、同級生や先輩も大人に近づいたような感覚はあったが、過ごしてきた環境と世界が全く異なるようなことはなかった。この状況に対して落胆こそしなかったものの、やや拍子抜けしたような感覚を覚え、日々を漫然と過ごしていた。しかし、サマープログラムに参加し、海外学生や知己でない京大

生と交流し、狭かった私の視野は大きく広がった。世界が広がったと感じたのは、サマープログラムを通して普段は触れないような分野の知識を学んだことも一因だが、海外学生や京大生の、異なる価値観や文化、振る舞いに触れたことが大きい。

海外学生と交流する中でまず驚いたのは、彼らが他者に対して非常にオープンな振る舞いをすることだ。もちろん海外学生全員がそうであったわけではなかったが、彼らの多くは基本的に他者に対して壁を作らないように振る舞うことが出来るようであった。日本で多く見られるような、他者をやんわりと拒絶するような態度や、一線を引いたような振る舞いを彼らはほとんどせず、自然に他者を気遣うことができるのである。おそらくこれはコミュニケーション文化の違いによるものと思うが、彼らと話しているとおのずと自分もオープンマインドになるように感じる。何かに対して見栄を張ったり、意固地になることがなく、自然体で他者と接することができるというのは、単純ながら重要なことであると思う。

何事に対してもひとまず興味を持って、前向きに取り組む姿勢にも刺激を受けた。これは海外学生だけでなく、私と同じようにサマープログラムに参加した京大学生にもあてはまるものである。もちろん、彼らとて体験した全てを肯定するのではなく、一部授業などは少しつまらなかったと言うこともあったが、しかし何事にも一度は真剣に取り組む姿は見習わねばならない。単に意識が高いと言いかえても良いだろう。彼らの姿はとても活力に満ちているように感じ、彼らの姿を通して私自身も物事に対する意欲を高めることができた。

総じて、実りの多い二週間であった。英語学習的な側面で、生の英語を通したコミュニケーションという意味でも非常に貴重な時間であったが、それ以上に他者との関係を深める方法や、物事の見方といった、人生の根本に関わる部分で大きく刺激を受けたと感じている。世界が狭いと感じていたのは単に私の視野が狭かっただけであった。自分から一歩踏み出せば、世界にはこんなにも多様な人々がいて、新たな知見は何処にでも存在するのだ、という感覚を得られたことこそ、一番大きな学びであったと感じる。私をこのプログラムに誘ってくれた Shuta には本当に感謝している。

Lessons from Kyoto Summer Program

法学部 1 回生

KSP 番号 : 428

名前 : Kotona

〈English-speaking skill〉

One of the reasons why I participated in this Kyoto Summer Program was to improve my English-speaking skill. So, I tried speaking English positively, but I was not able to speak English as the way I hoped. Then I realized what skills I am lacking in and how I should improve my English-speaking skill from now on.

When I talked with international students, I had trouble remembering words that I wanted to say. I could not remember even fundamental words. I can write those words and understand those meanings when I hear of them. This is probably because I am used to doing so thanks to practices in the past. On the other hand, I rarely spoke English except the cases I prepared speeches in advance,

so I am not accustomed to speaking English at all. I think that this is why I cannot remember words even if these words are so fundamental.

From this realization, I found what I should do to improve my English- speaking skill. The most important thing that I should do is to practice speaking English without preparation so that I get accustomed to speaking it. I can speak it if I practice what I intend to say or prepare notes and scripts in advance. However, I will not be able to enjoy talking with people from overseas without changing my current situation. I believe that it is the best way to practice speaking it on the spot in order to change the situation.

〈The meaning of interacting with people from overseas〉

Through discussion sessions, I felt that some opinions of students were influenced by countries or regions where each student lived. Some opinions were like mine, and others were different from mine. For example, when I discussed centralization, one of international students strongly explained the need to provide better welfare services, especially in emergency cases. However, in Japan, we are sure to have needs to prepare them in some places, but most people can take these services. So, I am a little surprised to hear his strong opinion.

This is one of the meanings to interact with people from overseas. I realized that I am a narrow-minded because it is influenced by my own experience. Communicating with them can lead us to broadening my horizons more than we expect.

〈Influence to my future〉

I have not decided to study abroad yet, but now I am full of motivation to try to communicate with people from overseas. Before this program, I am afraid of communicating with them because I worried that my poor English may bother others. However, in this program, everyone managed to understand what I want to say even though my English was poor. I believe that it is better to show that I have things I want to say than to hesitate speaking English.

Fortunately, there are more tourists from overseas in Kyoto than I expected, so I have many opportunities to interact with them. I try to take advantage of them.

普遍的な社会規範と文化基盤についての気づき

総合人間学部 1 回生

KSP 番号：429

名前：pond

私の本プログラムにおける海外留学生との対話を通じた学びはある社会規範そして文化基盤が普遍性を持ち存在しているという事である。ここにおいて社会規範とは私たち人類は例外なくこの地球を住みかとして生きているため地球温暖化をはじめとする環境問題やグローバルな視点における社会問題をともに解決していく定めでありまた人間以外の生命体への配慮も忘れてはならないという事を指すものである。また文化基盤における普遍性とは例え国ごと共同体ごとに文化に差異が存在しているとしても初期段階の芽生えにおいては大差がなく、発達段階の理屈も多く共有し結果のみが違いを持っているという事に注視している。

では社会規範に普遍性があると気づかされた体験について述べていく。英語のディスカッションの授業にて多くの留学生の世界情勢への関心や問題意識を聞くことができ、その中で難民問題等に関心のある生徒が外国人労働者の技能実習への支援や生活支援の必要性を説くこともあれば動物福祉に関心のある生徒が現在の畜産における家畜たちのおかれた劣悪な環境に対して問題意識をもって代替肉の推進や牛乳や卵といった畜産物を人工物に代替する事を提案する生徒もいた。ここで驚くべきことはこうした発言に生徒の出自は関係ないという事である。アジアでもアメリカでもヨーロッパでも彼らは一様にこの世界をよりよくしていこうという規範意識を持っていた。ここに私は世界規模の規範意識の普遍性を感じた。

次に文化基盤の普遍性に気が付いたきっかけを記述していく。まず若松先生の従業における食のタブーの発生過程の説明を受け、発生する文化は人類におよそ共通しているような法則に従っているという説明は大変感銘深いものだった。また湯川先生の授業において日本語にはかつて些細な季節や環境の変化に対する語彙が豊富にあったという事を紹介していただいたが、私の考察として日本は島国であり外界からほとんど隔絶しており四季を持ち周期的にしかし少しずつ環境が変化するという状況であったという理由があったため語彙の発展が紹介のようになり多くの大陸由来の言語と違いを見せる結果となったのだと思われる。これも文化基盤の発達法則の共有の具体例の一つといえると思われる。かくして私は文化基盤の普遍性に気が付いた。

これまで述べてきたことを踏まえ私が考えるのはさながらアレクサンドロス大王がもたらしたヘレニズム時代のようにインターネットをはじめとするグローバル化によって新たな世界市民主義がもたらされていて、私自身もこの世界の一員として世界の諸問題に取り組む必要があるという事である。

サマープログラムに参加して

農学部 1 回生

KSP 番号：430

名前：RUKA

このプログラムに参加して、思うようにいかないことも多々ありましたが、本当に有意義な時間を過ごしました。

留学生と共に授業を受けていて心地よく感じたのは、自由に活発に質問する雰囲気です。特に日本語教授実習初級クラスでは、言葉の用法などについて留学生が盛んに質問しており、私が実習中に京大周辺の情報について簡単に発表したときも、様々な質問をしてくれました。それらは決して難解な質問ではなく、話を聞く中で自然に生じた素朴な疑問でした。教師から生徒への一方通行の授業ではなく、質問を介した双方向のやりとりが行われる授業では、生徒も教師の話をも自分の身に引きつけて感じられると思います。日本では残念ながら授業中に活発に質問する雰囲気はあまりありません。この自由に発言できる留学生の雰囲気は非常に好ましく感じました。

今回プログラムに参加して意外に感じたことは、国や地域の違いはあれど、私達の間には思っていたほど大きな差異はないということです。日本人であるか留学生であるかに関わらず、話の合う人、一緒に居て心地よく感じる人、あまり気の合わない人などがいることは考えてみれば当たり前かもしれませんが、小さな驚きでした。国際交流あるいは異文化交流では「違い」がしばしば強調されますが、異なるものよりもむしろ共通するものを多く感じました。これには受けてきた教育レベルなども関係し一概には言えず、もちろん文化や慣習の違いは沢山あるのですが、留学生と日本人とはもっと異なった感覚を持っているものだと思っていた私にとって、皆で同じ時間、感覚を共有できるということは、非常に良い発見でした。

言語に関して最も苦労したことは聞き取りです。欧米出身の留学生の英語はなかなか聞き取ることができませんでした。相手の話を聞き取ることができなければ会話を続けることはできず、話しかけたいと思ってもなかなか話しかけられないというもどかしい状況がありました。また、研究者になりたい人、大学院に進む人が多くおり、それぞれの専門分野について詳しく話を聞いてみたいと思う一方で、専門語彙を十分に持ち合わせていないためそのような話は理解しづらく、また会話を続けたくとも日本語のように上手く相づちが打てないことが多くありました。もっと沢山のひとと、もっと色々なことについて話したい。この思いが、サマープログラムで得た一番の糧になると思います。

英語が共通言語となりつつある社会で英語を学ぶということ

農学部 1 回生

KSP 番号：431

名前：Juri

この講座を受講するにあたって、私が一番の目標としていたのがディスカッションでの積極的な発言である。そのために、毎回議題を先に確認して、アイデアをノートに書きだし、英語ではどう表現するのかを調べてから、ディスカッションに参加した。では、この目標はどの程度達成できたのか。正直想像していたほどは話せなかったというのが、実際である。その理由として思い当たるのが、ディスカッション中に感じた、相手の意見を聴き、その内容を理解し、それに対する自分の意見を言い返すことの難しさである。まず、しっかりと内容を把握するのに苦労した。聞き返そうとしても、次々と別の意見が出てくるので、聞き手に回ってしまうというのが常であった。なんとか理解できても、次なる考えを頭の中で考え、英語に直そうとすると、途方もない時間がかかってしまい、既に別の話題に移っているということも多々あった。

留学生の多くは英語が第一の言語ではないはずなのに、なぜあれほど流暢に英語が話せるのだろうか、何度も思った。あるとき、その質問を留学生の一人にぶつけてみると、今イギリスに留学中だからだ、あなたも留学に行ってみるといいよという答えが返ってきた。やはり、英語で話す機会がないと、永遠に話せるようにはなれないのだ。ただ、韓国、中国からの留学生によると、彼ら自身は英語を使いこなしているものの、彼らの友人には、一文さえも英語でまともに表現できない人もいるらしく、少し共感するとともに、教育の格差を実感した。

ディスカッションのテーマの一つ「英語の共通言語化」はとても奥深い議題であった。特に英語が共通言語になってよいのかという点で意見が割れた。確かに、異なる言語を用いる集団どうしの人々が意思疎通を図るには共通言語があったほうが便利だ。そして、話者の数、分布を鑑みても、英語が世界の共通言語となるのが、妥当であると言える。しかし、言語が文化と密接に関わっている以上、一部の言語を優遇し、その言語を使えなければ得られる情報量に差ができる状態になってしまっているといけない。しかし、日本では、英語学習は義務教育で強制されるものであるし、英語を話せることが当たり前求められる。

私の今後の目標は、やはり留学になりそうである。いくら英語の共通言語化に反対したところで、英語を話せることが有利になるのは間違いなく、習うより慣れろの精神で海外に行って世界を広げたい。留学の目的は当面語学の習得だと考えているが、自らの専門が決まった段階で海外に行くのもさらに深い学びがありそうで興味がある。今までは留学に対しては期待より不安のほうが大きかったが、前向きに考えるきっかけになったので、このプログラムに参加できて本当に良かったと考えている。

KSP での新たな発見と出会い

経済学部 2 回生

KSP 番号：432

名前：Nana

私はこの K S P において自分の英語力の問題と国籍を超えたコミュニケーションの楽しさについて学んだ。

まず、第一にこの K S P 期間で、多くの日本人の英語レベルは世界の優秀な大学では通用しないということを実感した。他国の大学では英語が聞ける、話せるが当たり前でそのうえでどれだけ良い意見を述べられるかが重要であった。自分自身は授業の英語を理解するので精一杯で、質問の段階まではたどり着けなかった。ディスカッションでも、議論がどんどん進んでいく上に、想像以上に自分の考えていることを英語で言語化するのが難しく、自分の英語力のなさを痛感した。

以上のように、KSP を通して自分の英語力が世界基準では全く及んでいないことを実感したが、その一方でコミュニケーションは語学力だけではないということも同時に実感した。まずは、友達同士のコミュニケーションにおいてであるが、私はこの短い 2 週間の間に、これからもずっと友達でいたいと思える人に何人も出会えた。日常会話においても英語力で会話がつまずくことはあるが、全員が日本語・英語などの母語とは異なる言語を学んだ経験がある以上、言語を学ぶ難しさをお互いに理解しているので相手が日本語に詰まってもなんとか意思をくみ取ろうとするし、自分が英語に詰まっても何とか意思をくみ取ろうとしてくれた。このようにしてお互いに相手を知ろうとしていけばコミュニケーションはとれるし、そのコミュニケーションの間でどんどん仲が深まっていくのを感じた。また、Academic lecture の Innovation and Entrepreneurship の授業では、経営のアイデアについてのディスカッションを行ったが、自分の斬新なアイデアを英語でアピールすることは、自分にとって難しいだけでなくとても勇気のいることだった。しかし、勇気を出して発言してみると、メンバーに Nice idea だととても褒められて、勇気を出してよかったと感じた。このディスカッションでは他のメンバーのアイデアに触発されて、どんどん意見が出たし、グループとしての意見も話し合えば話し合うほど洗練されていた。こうしたところから、チームでいることやチームで話し合うことがいかに重要かも実感した。

このように K S P では、他国の優秀な学生と一緒に勉強することで、世界基準での自分の実力の無さを実感するとともに、自分の意見が認められるときの楽しさを感じたり、お互いのアイデアが刺激し合うことでグループの重要性などを感じたりすることができた。また、この 2 週間という短い間で出会ったメンバーは、単に同じ空間で勉強した仲間という状態にとどまらず、自分にとって本当に素敵な友人になったと言える。総じて非常に有意義なプログラムだったと感じる。

貴重な KSP での学び

法学部 2 回生

KSP 番号 : 433

名前 : Ayane

私は KSP を通じて、大学の通常の授業では得られないような貴重な経験をし、様々なことを学ぶことができた。参加してよかったと改めて思う。KSP は ILAS で参加したが、英語を使う場面が多く、留学のために自身の英語力向上のきっかけとしたかった私には、まさにうってつけのものであった。

KSP の学習成果としてまず一つは、留学生の人と積極的にディスカッションする力がついたことである。特にディスカッションについては日本人同士で行うものとは異なり、ディスカッションの流れが速くてついていくのが大変だった。日本人同士で行うディスカッションは沈黙時間が長いように思うのだが、KSP でのディスカッションは、常に誰かが発言しており、流れが速い。私は、誰かが言い終わるまで待って発言するというスタイルであったので、なかなか発言することができず、一言二言発言してディスカッションが終わってしまうということもあった。そこで、次の回では書記の係をすることにした。グループの人の意見をまとめつつ、質問を投げかけることによってグループのディスカッションを進めた。そして最後はグループの意見を発表したのだが、論理が分かりやすいように話すのに苦戦して、ややまとまらない発表になってしまったのは反省点だ。それでも、今まで取り組まなかったような役回りに積極的に取り組めたのは、ディスカッションの機会が何度もあり、その都度前回の反省を生かせるような環境にあったためである。またその他、留学生との日々のコミュニケーションの中で、日本文化と他国の文化の違いを知れたのは良かった。留学生から日本について聞かれた時に答えられないことも何度かあり、留学生に説明できるくらい、日本への理解を深めたいと思った。

また、KSP を通じて浮かび上がった英語力の課題もある。ILAS ではディスカッションはもちろん、留学生とのコミュニケーションは英語である。スピーキング・リスニング力に不安があった私であったが、何より壁となったのはリスニング力の弱さである。ディスカッションの際、グループの人が何を言っているのか聞き取れないために発言できなかったこともあるし、コミュニケーションの時にも聞き取れなくて何度も聞き返すということが多々あった。特に雑音の中や、相手が小声である時には聞き取れないことが多かった。リスニングができない、つまりそれは相手が何を言っているのか分からないということであるから、話すことへの大きな壁になると痛感した。

このように、KSP では貴重な経験の他にも、英語学習の上での課題を再認することができた。KSP で得た経験や学びをモチベーションに、これからも地道に英語学習を続けていきたい。

KSP を終えて

総合人間学部 1 回生

KSP 番号：435

名前：Yuji

このプログラムに参加しての率直な感想は、想像していた以上に自分にとって貴重な体験になったというものだ。きっかけは大学のリーディングの授業で紹介があったことにすぎず、正直なところ参加するかどうか迷ったが、今までの人生にはなかった刺激があった。例えば、自分は海外の人と話す機会が全くなく、英語を使ってコミュニケーションをとったことは一度もなかった。しかし、このプログラムには日本語がほとんどわからない学生も多くいて、そのような人たちとの会話には、当然英語を用いなければならなかったのも、とても苦労した。苦労したといえども、彼らは自分とは異なる環境で生きてきたので、文化や価値観が違っていて、その話を聞くのはとても刺激的であった。このプログラムを通じて、自分は心から英語で海外の人と話せるようになりたいと思った。先ほども述べたように、彼らと話すことは楽しかった。その一方で、英語の能力が低いために、相手の話があまり理解できなかったり、伝えたいことを伝えることができなかったりすることも多かった。それゆえ、大学のうちに英語を習得することを決めた。また、自分が驚いたことは、今回参加していた学生の多くが英語を母国語としているわけではなかったということだ。話を聞いていると、彼らは小さいころから学校で、英語で会話する練習を積んでいたりと、独学で話せるようになっていたりしていた上に、それは彼らの国では当たり前だそうだ。自分のいた狭い世界では、周りで英語を話せる学生は帰国子女がほとんどで、それ以外の生徒は基本的に英語を話せない。しかしこれは、自分の周りだけの話ではなく、日本全体でいえることなのではないかと思う。英語を話せるようになりたいと強く感じた一方で、自分は教育に興味があるので、徐々に改善されているとは思いますが、日本の英語教育についてもこれから考えてみたいと思うようになった。今回のサマープログラムは、視野が広がるという意味で、自分にとって非常に貴重な体験となった。また、それだけでなく、自分は今まではこのようなプログラムに対して消極的だったが、大変な思いをする中で得られるものがとても大きいので、参加するか迷ってしまう活動にも、積極的であるべきなのだと感じた。次にこのようなプログラムがあればぜひ参加したいと思っている。

KSP 最終レポート

総合人間学部 1 回生

KSP 番号 : 436

名前 : Koki

KSP を通して、今後の大学生活に大きく影響するような様々な経験を得た。一つに、「生きた英語でコミュニケーションをとること」がある。私が今まで中高 6 年間や受験対策で得てきた英語は円滑なコミュニケーションをとるためではなく、公的な文章に使うためのものに過ぎなかったことを強く実感した。そして、公的＝学問的というわけではない、ということが一つの大きな気づきであり、英語でのディスカッションでそれを強く意識した。海外学生の話は、抽象論に留まらない具体的な例え話や経験に基づくことが多く、それは私の想定よりもはるかに「カジュアル」な英語であり、聞き取れないところも多かった。そして私が表現できる英語だとどうしても堅苦しく、「お手本」のような文章にしかならず、生き生きとしたディスカッションができなかったことが大きな後悔である。ただ、学外研修や、プログラムと別で遊びに出かける中で、徐々に使える英語でコミュニケーションが取れ始め、中が深まったことは大きな感動であった。今では KSP でできた友人と SNS を通して英語でやり取りをすることも多く、とても貴重な経験でありながら、何より楽しい。

そして、もう一つの大きな経験は将来への視野が遥かに大きく広がったことである。私は日本文学を専攻する予定であったが、海外の文学を深く学ばないままに終わってしまうことをもったいないと感じるようになった。日本文学を学びながら、国内古典文学を専攻する香港の学生の話聞いた中で、相対的な視点を持ち、日本人として海外の文学を学ぶことの面白さに期待を抱くようになった。その生徒の出身校は京都大学の提携大学であり、毎年夏に短期留学プログラムがあったので、ぜひ来年訪れて現地で学びたいと考えている。また、そうした経験でいうと、Lab visit は大変に興味深かった。文化研究科国際連携文化越境専攻の教授の話聞き、色々なバックグラウンドを持つ学生たちの集まるそこは、まるで文化と学問のインフラのようで、ますます海外での学びに期待が膨らんだ。

最後に、やはり想像通りではあったが、学生の主体性には目を見張るものがあった。英語を母語としない人でも積極的に質問をし、議論に発展していく様子を見て、少ししり込みをしてみながらも、憧れを抱き、あのよう議論ができるようになりたいと熱望し、今は前にもまして英語学習に重きを置いている。一回生の前期に、このような貴重な経験をできて本当に感謝している。将来の海外での学びに、最大限に生かしたいと思う。

KSP 最終レポート

文学部 1 回生

KSP 番号：437

名前：Hitomi

京都サマープログラムを通し、私は日本に対する理解が深まったと思います。その理由は主に3つ挙げることができます。

まず、英語での国際交流だけでなく日本語での国際交流を経験できたことが挙げられます。日本語教授講座では、基本的な日本語知識を留学生らと改めて学び、普段なにげなく使用しているのとは違った視点で日本語について考えることができました。また、日本語教授講座での学びを生かして、KUASU のグループでの交流などで日本語を話す際には、時制や文の長さなどに気を付けながら話すように心がけていました。これらの経験を通し、相手にとって母語ではない言葉で交流する際に気を付けるべき点を学ぶことができました。例えば慣用句や同音異義語などを使い過ぎないことや、文化的背景を知らないとう理解しにくい言葉（例えば、わびさびやエモいなど。）は丁寧に言い換えるなどの点に気を配りました。日本語だけでなく、言語を共通語として使う際の留意点をこれまで以上にはっきりと意識することができました。

次に、KUASU コースで自国と他国の比較を行ったことが挙げられます。特に私たちの班ではお茶という非常に身近なテーマを扱ったため、各自が自分の国では疑ったこともないような習慣に差異が見られることを発見でき、非常に興味深く感じました。例えばベトナムやタイではお茶と言えば甘くて冷たいものですが、日本と台湾では苦みがあって温かいものです。さらに、味や温度で言えば共通点の多いベトナムとタイ、日本と台湾でも、その2国同士には細かい違いもたくさんあることがわかりました。差異が生まれる原因は、気候、四季の有無、食事、歴史など様々な点から論じることが可能だと思います。これまで、欧米で製作された映画などでアジアのイメージがどれも一様で、各国の区別がはっきりしていないシーンやキャラクターを見ることなどが多く違和感をもっていました。しかし、KUASU での話し合いを通じ、当事者同士であっても自覚的に文化の差異に気づき、相手に伝えるという行為はかなりの労力を要することがわかりました。まして別の文化圏の人々には、文化の微妙な差異や豊かさは、その文化の当事者が伝えていかなければ理解されないのだと気が付きました。

また、国際色豊かなプログラム参加者の方々の存在も大きかったと思います。日本の文化に興味を持つ留学生らとカリキュラム内外で日本の様々な面を経験し、交流したことで、これまでにない視点から日本を見ることができました。

本プログラムに参加したことで、国際交流には言語能力や海外経験と同じくらい、自国や母語といったアイデンティティに基づいた自分らしさを持つことも重要なのだと気が付きました。今後も多様な相手と関わり、日本に対する理解と、相手に対する理解の双方を深めていきたいです。

学習成果について

文学部 2 回生

KSP 番号：438

名前：Shiho

今回 KSP に参加して、たくさんの海外留学生と関わることができました。海外留学生には様々な日本語のレベルの人たちがいて、日本語で交流できる人もいれば、このプログラムで初めて日本語を学という人もいたため、そういった人たちとは英語での交流しました。日本にいるとなかなか英語で伝えたいことを伝えようとしたり、相手が話すことを理解する経験は少ないので、とても新鮮でした。言いたいことがうまく言えないともどかしく、もっと英語を勉強して話せるようになりたいと感じました。また、言いたいことが伝わった時や相手の話が理解できたときは嬉しい気持ちになりました。今まで英語は机に向かって勉強してきたことはあったけれど、実践で使うことで学んで、よりうまく使えるようになると実感し、もっと実践で使いたいと感じています。もともと私は留学をしたかったのですが、部活の関係で長期の留学ができず、日本にいても海外の方と交流できる場がないかと思ってこのプログラムに参加しました。京大は留学生もたくさんいて、日本でも海外の方と関われる場はあると思うのでこれからも積極的に交流の場を探して行きたいと思います。また、今回自分の英語力で特に話す力が足りていないと感じたので、より一層勉強に邁進していきたいです。

また、今回主に英語で開講される様々な講義に参加して、自分の分野以外の授業を聴けて、とても見聞が広がりました。文学部は2回生以降専修に関わる講義が主になってくるので、なかなか自分の専修以外の話を聴く機会は少なく、今回とても楽しんで講義に参加しました。専修は分かれるとはいえ、学問として、様々なところで通じる部分があると思うので、今後も自分の専修にフォーカスするだけでなく、他分野にも目を向けていきたいです。

今回の海外留学生との交流や講義への参加を通して学んだことはたくさんありますが、その一つが他を知ることで自分を知ることができるということです。海外の話を聞いているとこのことは日本特有だったのだと知れたり、逆に特有というわけではなかったのだと知れたりしました。また、自分の専修以外の話を聴くことで自分の専修についての関連を考えたり、再度専修分野に目を向けるきっかけになったりしました。今後も自分の殻に閉じこまらず、他を知ることで自分を知っていききたいです。今回の経験は本当に実りある経験だったので、この先も活かしていきたいです。

Communicating, and Understanding Each Other

総合人間学部 1 回生

KSP 番号 : 439

名前 : Liz

The experience in the Kyoto summer program made me feel that I would like to communicate with people outside Japan in not only Japanese but also other languages and study abroad. All the classes are interesting, and the following two events especially brought me up mentally.

First, in the activities for the Final Presentation, I became confident in cooperating with others. Our team prepared for the presentation about Haiku, and I made a script while discussing a member from the US. Some of his opinions on the works of Haiku were similar to mine, and others were fresh for me. Although he and I grew up in different countries and had various hobbies, I felt I could understand a little about him by knowing his comments about Haiku works.

Sometimes, Japanese students in the team, including me, could not make sense to the overseas students in Japanese. I was frustrated, and maybe the overseas students were also frustrated. Because of this situation, I wanted to communicate more to understand them rather than give up talking with them.

In the presentation, we introduced the poetry in the countries where overseas members live. In preparation for the presentation, I thought that things we would talk about were too many to explain within 20 minutes. In the presentation, however, I realized we can understand Haiku well by comparing other styles of poetry. Now, I am sure the presentation needed an explanation for overseas poetry. Working with the group members for the presentation taught me that sharing our thoughts made us get closer and better ideas than thinking alone.

Second, I acquired various points of view from other participants in the Discussion Session among Students. I discussed the standardization of English. We wrote our opinions on sticky notes and put them on a large piece of art paper, then discussed them in detail. Japanese and overseas students actively spoke in Japanese during the discussion. I was absorbed in knowing the overseas students' comments, which reflected their culture. I was especially impressed with the comment of a student from Thailand. He said that people in Thailand even now use Sanskrit when they hold some religious rituals. This story reminded me of Latin, spoken not in daily life but in Christian ceremonies. Also, I associated the story in Thailand with the ceremony in my high school days. The high school I attended is Buddhist, and a song we sang at the ceremony has Sanskrit lyrics. The story of Thai students made me feel I got close to societies outside Japan. Through the discussion, I got diverse and fresh viewpoints.

To sum up, I realized anew how interesting communicating with others is, and I was motivated to talk with people in the world more to understand them well. To accomplish this, I will practice listening to and speaking in English as much as possible. During the program, I was surprised that the students whose first language is not English spoke English fluently. To discuss academic topics like them, I will work hard to have a good command of English and study abroad.

KSP 最終レポート

経済学部 1 回生

KSP 番号：440

名前：Z

わたしがこの京都サマープログラムで学んだことは、他者の気持ちを考えることの重要性である。これについて二つ例を挙げながら説明していく。

まず一つ目は日本語教授実習でのことである。我々京大生はもちろん日本語ネイティブである一方、海外学生は程度の差こそあれまるでネイティブのように日本語をしゃべることはできない。そうした関係性のもと、日本語を教えるというのは当初わたしに非常な困難を強いた。そもそも経験がないだけでなく、なぜわからないかがわたしにはわからないからだ。しかし回を重ねるうちに、海外学生にとって日本語を教えられるというのは、あたかも我々が第二外国語の授業を受けるかのようなことだと想像できた。それ以降は、たとえば教科書的な例文を用いたほうが理解してもらいやすいだとか、「わからないところはないですか」ではなく「ここが難しいけどわかりますか」と尋ねるほうが素直にわからないポイントを伝えやすいといったように、自分の第二外国語の授業で思うことを実践することで、よりコミュニケーションが円滑になったと感じた。

二つ目としては、アカデミックレクチャーのことである。わたしはそのレクチャーを 10 回受けたが、そこで強く感じたのは「講師の中には学生のことを全く考えていない人もいる」ということだ。たとえば食料生産の近藤先生は具体例や画像を多用したうえで、生徒へ積極的に質問を投げたりファニーなジョークを言ったりして、学生を巻き込んだ講義を作れるように努力されていた。そのおかげで、ファイナルプレゼンテーションで近藤先生の講義からインスピレーションを得た発表をする海外学生はかなり多かった。彼らはもともと食料のことについて興味があったわけではないかもしれないが、先生の講義を通して魅力を感じたに違いない。対照的に、時間がなからなどと言って講義を淡々と進め、質問や意見交換の時間を設けずに、自分の言いたいことだけを述べる講師もかなりいたように思える。そうした講義では半分以上の学生が寝ていたりスマホを触っていたりプレゼンを作ったりしていた。だからそれらの講義を参考にしたプレゼンはほとんど見られなかった。もちろんそれらの講師は自分の話を聞いてほしいはずだ。つまり伝えたいという思いは誰も一緒だが、学生の気持ちすなわちわかりやすく楽しめるということを考えられているかどうかで自分の思いを実現できるかが決まるということだ。

多文化共学短期 [受入] 留学プログラム 2024 年度実施報告書

2025 年 3 月発行

編集・発行 京都大学国際高等教育院 (ILAS)

京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

電話 (075) 753-9597

印刷・製本 株式会社 あおぞら印刷

電話 (075) 813-3350

